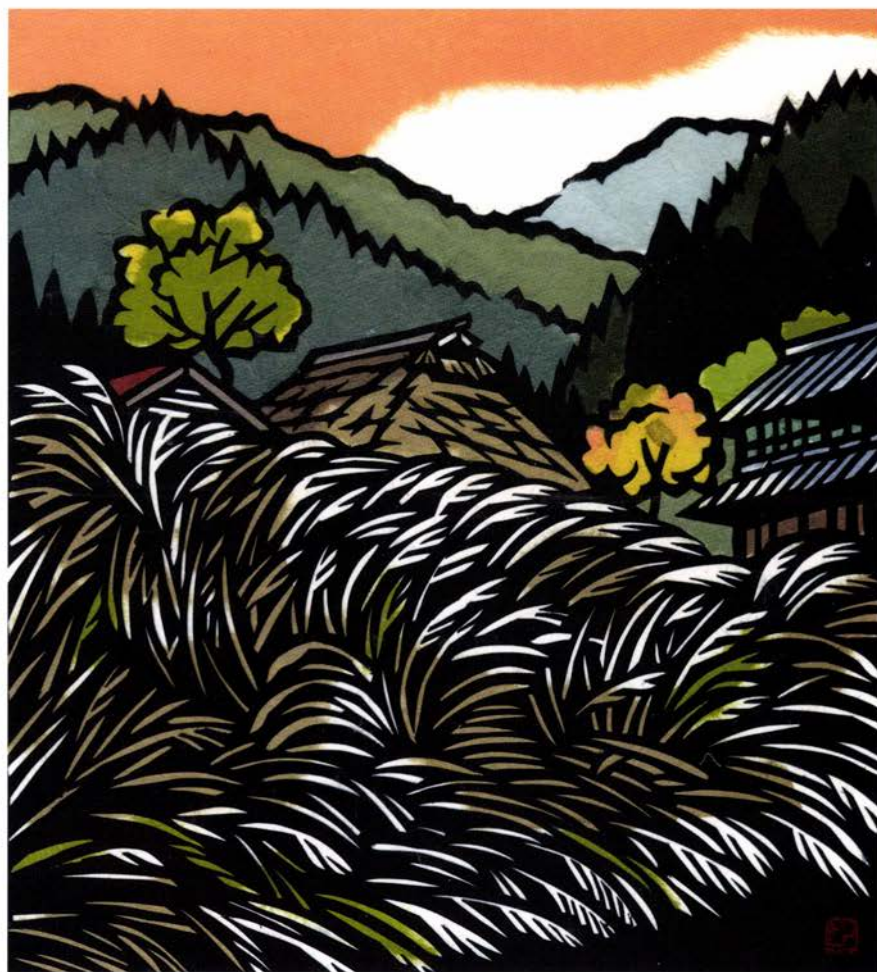


川柳塔



昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十五年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇三八号

日川協加盟

No.1038

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 十二月二十日

川柳塔社

川柳塔 発刊ご案内 合同句集 川柳塔 創刊九十周年記念

「川柳塔」は大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成二十六年で九十周年を迎えます。

これを記念して合同句集「川柳塔」を発刊致します。合同句集は昭和四十九年以来十年ごとに刊行し、今回は平成十六年に続く第五集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎致します。一人でも多くのお申し込みを心からお願ひ申し上げます。

川柳塔社

☆刊行 平成二十六年七月一日発行

☆締切 平成二十六年四月十日（木）

☆体裁 B6判・ハードカバー・上製本

八〇〇頁（予定）

☆参加費 五千円（句集一冊呈・送料込み）

☆掲載句 一人 十五句（自選）

申込み方法・所定用紙など詳細は次号にてお知らせします。

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■ 今年中に発表された句に限りです。
■ 締切 11月20日（本社事務所宛）

番傘川柳本社創立105年

記念全国川柳大会

小島 蘭 幸

会場のドアを開けると、そこはジャズミント・エレクトリック・オーケストラの世界でした。ボーカルは若くて美しい女性でしたが、軽く唄っているのに声量が凄いです。私もいつの間にかジャズの魅力に引き込まれていました。水府先生作詞の「桜咲く国」を唄われる頃には、もう胸がジンジンと熱くなっていたのですが、演奏が終わると爽やかな余韻に包まれたのです。ジャズって本当にいいですね。

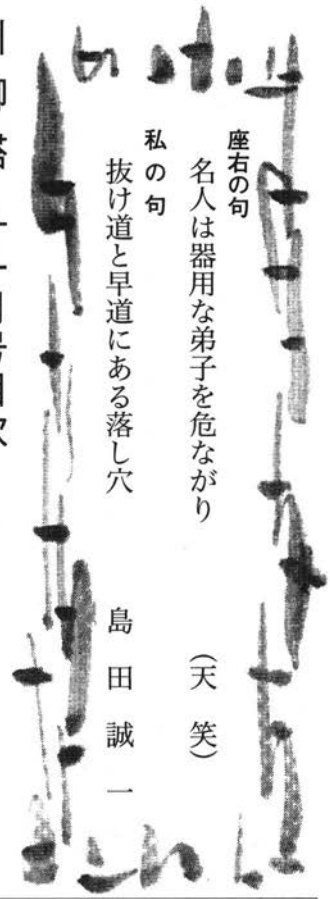
記念式典のあいさつの中で田中新一主幹は「水府先生の本格川柳を踏襲する」と力強く語られました。番傘川柳本社創立105年記念全国川柳大会は、新主幹の力強い言葉で幕を開けたのです。出席者は六一四名、祝辞は竹本瓢太郎、木津川計氏。続いて磯野いさむ名誉主幹に感謝状が贈呈されました。淡々と御礼の言葉を語られるいさむ氏の側で優しく

微笑まれる新一主幹、美しい光景でした。

句会は、句集「水たまり春秋」を発刊された森中恵美子氏の謝選から始まりました。宿題選者は、私と江畑哲男、大西泰世、雪石隆子、尾藤一泉、田中新一の六名が努めました。皆さんの披露を聞きながら私は、いい作品を直接生の声で聞ける幸福をしみじみと感じました。大会に出席して、いい作品を聞く、これだけでいいのです。川柳は本当に凄いです。

懇親宴は、豊来家大治朗さんの大神楽、森中恵美子、木津川計氏のお二人と、落語家露の団姫さんの「謎掛け」で大いに盛り上がりました。そこで私も一つ、「番傘とかけてなんとく」「長嶋茂雄の引退の言葉ととく」そのころは、巨人も番傘も「永久に不滅です」…。

フィナーレは「桜咲く国」を全員で合唱しました。唄いながら私は、来年の90周年記念第20回川柳まつりに思いを馳せていました。翌朝、ホテルの窓から大阪城を見えますと何故か、豊来家大治朗さんの眼が浮かんで来ました。揺れに揺れる台の上で見事にバランスを決めた鋭い眼差し、さすがプロの眼でした。そうして105年という記念の大会に出席出来たよろこびが沸沸とわいてきました。



座右の句

名人は器用な弟子を危なかり

(天笑)

私の句

抜け道と早道にある落し穴

島田 誠一

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「湖東・政所」

■巻頭言 番傘川柳本社創立105年 記念全国川柳大会	小島 蘭 幸	(1)
楽しむ川柳	村上玄也	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭 幸 選	(4)
川柳塔の川柳讃歌	木津川 計	(45)
西尾 葉句抄		(46)
新川柳鑑賞	麻生 路 郎	(47)
自選集		(48)
温故知新		(51)
水煙抄	川上 大 輪 選	(52)
俳風柳多留一二篇研究		(54)
英語 de Senryu	吉村 侑久代	(76)
江戸を楽しむ	小 栗 清 吾	(77)
愛染帖	新家 完司 選	(78)

楽しむ川柳

村上 玄 也

先ごろ19年のプロ野球選手生活にピリオドを打って引退表明をしたヤクルトの宮本慎也選手であるが、引退の記者会見の席でこんな事を言っている。「プロになった瞬間、野球は仕事に変わった。僕は1回も楽しんだことがない」と。

最近の若い選手たちは野球に限らず、厳しい場面に立ち向かう時「楽しんできます」とか、強敵に投げ勝った投手が「楽しんで投げられました」などとインタービューに答えている。

私たちの世代は厳しい就職戦線を戦って、仕事につけたと言う認識があったから、宮本選手ではないが、仕事を楽しくやらうなどと言う気など毛頭起りようもなかった。仕事に何とか早く慣れて一人前になろうと遮二無二頑張った世代「オー・モーレツ」の時代に生きてきた。それに対して今の若い人は仕事は楽しくやるものだと言う意識が強いようだ。面

檸檬抄「門」……………竹治ちかし・大内朝子共選……………(82)

「条 件」……………前たもつ選……………(85)

一路集「余 る」……………徳山みつこ選……………(86)

「ピント」……………伊勢田 毅選……………(87)

初歩教室「望 む」……………太 田 昭……………(88)

川柳塔鑑賞……………太田扶美代……………(90)

水煙抄鑑賞……………春木圭一郎……………(92)

せんりゆう飛行船³⁵……………新家完司……………(93)

津軽発おもしろ景色¹⁸……………高瀬霜石……………(94)

民族の詩歌¹⁷……………三好專平……………(95)

■エッセー 絶筆 東野大八「雨の法善寺横町」……………早川 遡行……………(96)

各地柳壇(佳句地十選/加島由一・森 茜)……………(98)

十一月各地句会案内……………(112)

柳界展望……………(114)

■編集後記(ひとこと/森松まつお)……………朱夏・能子……………(116)

座右の句

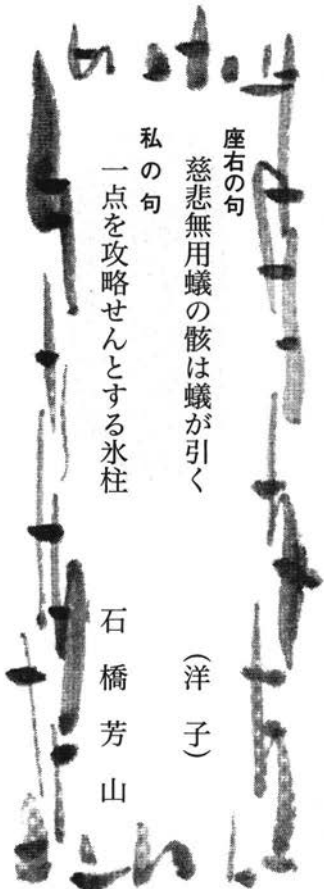
慈悲無用蟻の骸は蟻が引く

(洋 子)

私の句

一点を攻略せんとする氷柱

石 橋 芳 山



白くなければその仕事は自分に合っていないからとすぐに離職を考えると聞く。それくらい物事を気楽にやれば生きてゆくのがどんなに楽であろうかと思う。

川柳も然りである。退職後始めた川柳であるが、始めた頃は句会などで何とかな選できるようにと言う気持ちで一杯だった。実際その気持ちが少しは上達への原動力になったと思っている。そのうち何とか上位に入ろうとか、もっと入選する句を作りたいと言う気持ちだけ先走って、思うように入選しなかったり、ましてや全没などとなると大いに落ち込んだりしたものだ。しかしながら年を経て経験は積んだが、逆に齢と共に感性も鈍り能力の限界を知り始めて、背伸びは止めておこうと考えだした。

そんな中で川柳塔の大先輩の方々が亡くなる直前まで本社句会に足を運び、入選の数がどうであれ句会を楽しむために出掛けてこられていた姿を思い出す。

折角趣味として始めた川柳。現代の若者流に肩に力を入れず、ゆったりと楽しみなが、先輩方のように長く続けられればいいなと考えている昨今である。



小島蘭幸選

樞原市 安土理恵

懸命な夫の舌のりるれる

明け方の夢に昨日までのあなた

こんな日になぜ咲くのです白木槿

不確かな記憶をたどる二十五時

なるようになるななじゅうごと呪文をくりかえす

上向いていこうよ七十歳のちぶさ

和歌山市 木本朱夏

夏の名残の赤いポストにある火照り

行く夏の五目チャーハン完食す

菩提樹が歌う泉の湧くところ

秋の夜の灯りのひとつむせび泣く

目に見えぬものに追いついて来たら

歩道橋渡り終えてもお残暑

松江市 石橋芳山

つまらない飾りよ口先の言葉

貧相な目をして何を怖がるか

終わらない戦に負けてばかりいる

つまらない男を風が弄ぶ

男と女奇妙に絡み付いている

感性が尖ってあかぎれが切れる

堺市 栗原道夫

夏休み長し屋上の熱帯魚

西瓜から昭和滴りやまぬなり

恋心募りに募る夏休み

S M A Pの音程に昭和のにおい

一つずつ空を持つてる水たまり

猫たちの会議イキテイルコトガスベテ

河内長野市 山岡富美子

年金の砦の中の正誤表

一票と切り取り線の上にいる

生命線の所々に水たまり

風呂敷に包んだままのころざし

照準はオリンピックにする余命

勇気ある告発返り血を浴びる

檀原市 居 谷 真理子

まだこの世らしい半透明な朝
私だけこぼしていった掌

必要とされて愛されてはいない
闇に放るポチャンと鳴ってくれるまで
夏を暴いて向日葵の立ち枯れる
わたくしに巣くう青光りするもの

大阪市 谷 口 義

いわし雲めくれば視力検査表
有り合せの紐で括つてある覚悟
新米が意気揚揚とやって来る

反省はしてもせんでも歯は抜ける
天高くわたしは何もしてません
おととつととおばあさんにも明日がある

藤井寺市 太 田 扶美代

振り付けは自由わたしの盆踊り
丸印思い出せないまま九月
大小屋掃除心配させた罰である
わたくしと秋を探しに行かないか
美術館不思議な風が吹いていた
三回忌に少し遅れたさるすべり

弘前市 高 瀬 霜 石

越して来たハードルもはや数えない
不夜城に落としてきたらしい雄蝶子
温度差があってもまずは夫婦です

歳のせい言われなくともわかつてらい
政治家の答弁聞いている夜寒
尺貫法百貫デブは死語ですか

倉吉市 牧 野 芳 光

トンガリをまん丸くして町に出る
少数派塩を効かせた声になる
コツンコツンと心臓を探られる
リサイクルショップに人の臭いする
人を恋うように出来てる猫の声
夕焼けを見て目の底を乾かせる

出雲市 竹 治 ちかし

言い続けないと忘れる怖いこと
失望をせぬよう期待などしない
生かされて金で買えない物を得る
子にかざす母の日傘の右左
沢山の私と出会う眠れぬ夜
本当の自分試している余生

鳥取市 両 川 無 限

痛点にポトリと落ちてくる言葉
化粧直しに行つた女が戻らない
深追いは止めよう傘の雫切る
仏壇にあるスナックのマッチ箱
塩壺に哀を満たしてひとり住む
天下盗る夢と遊んだ木守柿

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

潔癖と聞けば深入りしたくない

悲しいことが笑って言える恐ろしさ

他言無用大き目の封筒届く

逆算をしてます恋は秋だった

ローヒール履いての愛は真正直

コスモスにつながってゆく姉の墓地

香芝市 大内 朝子

七年後五輪に会えるかな命

零れ種咲いてわたくしにも希望

彼岸花のあたりほのぼの仏さま

横道に昭和レトロの匂う店

愛憎に悶えた頃が嘘のよう

人間て不思議わたしも小宇宙

堺市 澤井 敏治

樹に耳を当てれば四季の詩がある

耳澄まし小人の鼓笛聞く樹海

柔らかいあれは父の樹母の森

浅漬の秋なすあれば酒二合

恋物語むかしむかしの風の盆

褒められた事ないと言う妻も古希

鳥取市 森山 盛桜

終活をするには少し早過ぎる

何や彼やシンドロームが寄って来る

満腹になつて沽券も失せて来た

議事録に載る発言はしていない
揚力が欲しい私の歩く道

後悔がいつぱいだった自虐ネタ

熊本市 永田 俊子

自信ないが笑窪二つを頂いた

紙縫作る無数の思い出まきこんで

と言われても私の色は変えられず

政界をがらがらぼんで洗いたい

やさしさと厳しさ波のうら表

平和大好き太陽と炎える向日葵

松江市 川本 畔

母として生きた半世紀の枕

墓洗う敬老の日が近くなる

葉脈が透けてきました両の掌に

白百合をじっと見つめて日が暮れる

人間の匂いの方が温かい

八月の稲穂はもう首は上げぬ

篠山市 酒井 真由

地下鉄の迷路で四季を見失う

ホテルまでもものはずみでついてゆく

不思議なひとですねと目が笑ってる

ぴったりと閉じた扉の内と外

肩寄せて見入る人体解剖図

雨風に動じぬ杉の立ち姿

西宮市 西口 いわゑ

いわし雲ふつと師の句を口ずさむ
通り雨のような叶わぬ恋だった
ベランダの茄子やトマトが食卓に
手作りの服で育てたのは昔
人と人ありがとうなら響き合う
感無量夕日の中にひとり立つ

鳥取市 前田 楓花

心根の優しい嫁が母を看る
足許は健気な蟻の通り道
イタリヤのみやげ美味しい風だった
思い込み同じ間違ひ繰り返す
コンビニが無いから田舎と言われた
老犬が寝なくてうちも寝られへん

泉佐野市 山本 蛙城

身代りと思いつつ病む人見舞う
袋綴じ開けても何てことはない
大正生れロマンの櫂で憂き世漕ぐ
ロト増えて脳活に日々忙しい
危な絵のストック誰に譲ろうか
メードインチャイナとあれば後退る

松原市 森松 まつお

猛暑日の記録更新などいらん
血圧と頭痛は妻の泣きどころ
そんな事いまさら妻に言えません

奇数月十日あたりに来る山場
堂々と昼から飲めるOB会
嫌いだと思うジェラシーだと思ふ

大阪市 古今堂 蕉子

汚染水体罰蓋されるさだめ
折れた心に副木治ればいいけど
宮崎アニメ御苦勞様と一人言
腰の位置決まれば結果はオーライ
ためらって飲み居直って飲み続け
人は人言うてもこの世人だらけ

河内長野市 村上 直樹

倍返しに酷暑に豪雨汚染水
悠々自適口で言うほど楽じゃない
酒好きのウイルスさんと飼っている
飾らないお人だ笑顔丸っこい
しがらみよ御免こっそり家族葬
徒し世を星のシャワーで丸洗い

藤井寺市 鈴木 いさお

何も出来ないが一緒に泣いてやる
群青の海に訊きたいことがある
とって置ききのジョークを遺書に認める
初恋の人によく似た妻選ぶ
疎ましく思えた蟬が懐かしい
ボス猿の脇にいるのが幫間

三田市 久保田 千代

生きて行く辛さを思う今日大暑
永らえて自分失うこと多し
歳重ね許せることが多くなる
砕け散る夢の瓦礫に足取られ
古稀迎えいよいよ死への恐怖あり
しっかりと自分を持って生きて行く

奈良市 大久保 眞澄

ボケてませんちゃんぽらんは生まれつき
別荘の街でラーメンすすつてる
優先席誰の優先席だろう
サッパリがいい人柄も逝く時も
同窓会あの人だけがなぜ若い
ゴミの日を正義に告げてカラス鳴く

鳥取市 岸 本宏章

朝ドラの「じえじえ」がひとり歩きする
余るはずなのに薬また余る
薬漬けの血にも藪蚊がつきまとう
試着室白髪に赤がよく映える
効きすぎも怖い美白化粧品
八十路坂登る力を溜めておく

米子市 吉田 陽子

白々しくも九月に夏は身を隠す
近況を書き合う二人アナログ派
むつつりのポストは嫌い窓口へ

惚けてはならぬ包丁を研ぎ菜を茹でる
鶴亀は無理でもせめて五輪まで
再起動するまで風と話込む

富田林市 山野 寿之

振り返る事を知らないままの華
前進を促す温いぬくい鞭
労りのことばを持っていた勝者
箸二膳空気のように火のように
出会いから別れ教わることばかり
少年がまだ抽出しの奥に居る

和歌山市 坂部 紀久子

終戦日もう巻き戻すことはせぬ
蟠り解けたと思う電話口
早合点された痼が喉元に
節電の付けが廻ってきた目眩
遠巻きの外で作戦練ってます
訓練だから笑ってられる震度七

大阪市 大川 桃花

兄妹のように似てくる老夫婦
路地裏の名所ガイドで恩返し
本物はキラキラキラと光らない
レットテルを貼って悪女にするメディア
部屋まるく掃いてお金に几帳面
ドラマでもめつきり見ないお座蒲団

松山市 宮 尾 みのり

ヘルシーにちょっと気取つていもかぼちゃ
異邦人のマナー闊歩するアキバ

しつかりが過ぎかたくなになっている
しゃつきりのばばで笑顔もストレッツチ
エベレストもいいが静かに老いたいね
ブラスマイナスイゼロでさよなら出来たなら

西宮市 片 山 忠

見ぬ振りができぬ男の未成熟
呑み屋だけ僕の博識評価する
感謝デー店の都合でつくられる
女かとちよつと聞きたくなる男
品行が悪いと書いてある背中
無駄遣いこんな楽しいことはない

西脇市 七反田 順子

異常気象覚悟はいいか天の声
伊勢遷宮孫も真顔で参拝す
絶景の鳥羽ずつとずつとこのままで
水族館旅の終りはジューゴンかな
温かく人を迎える母が居た
千枚田実りの秋にカメラマン

豊中市 江 見 見 清

鬼ヤンマ捕った歓喜の日も遠く
長男に墓を教えた盆休み
よく忘れる事はみんなに言うておく

僕の名があるので僕の忘れ物
つまらない本を読むには暇がある
さわやかなコラムと読んで動き出す

海南市 堂 上 泰 女

愛された記憶を辿り孫が来る
孫からの電話孤愁を拭い去る
法師蟬ノスタルジアを呼び覚ます
贗作のユトリロ誘うパリの街
初参りお地藏さんも笑み返す
深夜メール息子へ愛を一雫

和歌山市 上 田 紀 子

遣る気満まん秋へ助走を繰り返す
CTに写っていない恋の傷
清濁を巧みに飲んだ喉仏
踏ん切りが付いて男が勇み立つ
饒舌を軽くあしらう焼きりんご
アドリブで生きてみようか気の軽さ

和歌山市 堀 富美子

迎え火へ夫の膳の品定め
スクラップした日も明日の糧となる
同じ年母の遺影に負けている
スケジュール呆けるゆとりのないスピ
ン
厳し世を渡るに仮面外せない
七坂を越えた路線の絵が丸い

吹田市 太田 昭

ユーモアを飲んで楽しく老いてゆく
救急車に乗ると痛みが消え失せる
我慢することでは負けぬ土踏まず
背を伸ばしても自分の影は老いている
八月が過ぎて戦後が遠くなり
あなたから土の匂いの荷物着く

枚方市 海老池 洋

点滴にいのちの追加してもらう
腕振って歩いて欲しい万歩計
激怒する気力も萎えてくる老後
怒り方にも阿形派と伝形派
貧しかったが幸せだった草苺
読んではみたが消化不良の哲学者

藤井寺市 高田 美代子

茄子も胡瓜も熱中症のカオをして
残暑の胃袋をなぐさめた茶漬け
五円も五十円も紐を通せば溜りだす
無名なり派手さはないが華はある
東京五輪素直によるこべないのです
ギリギリになっても走らないペンよ

豊中市 藤井 則彦

山勘が当たると呆けも小休止
事務服が支えた高度成長期
アウシュビッツ訪ねてからは不眠症

思い切って恥を晒せば灰汁も抜け
私の心を映す朧月
病院の中では腰も低くなる

神戸市 山口 美穂

杖を頼りに今日のノルマだなあ靴よ
夏バテもなぜか体重計びたり
亡母からの便りないまま盆もすぎ
脳の命令手足は知らん振りをする
同窓会あの世の方が賑やかに
効いているつもり暗示でのむサブリ

大山市 金子 美千代

さあ九月もうダラダラはしておれぬ
気合い入れ雑巾掛けのストレッチ
現実を見せつけられる大鏡
冗談と軽く躲しておきましよう
お気楽な身分いろいろあつたけど
今ならば違う答えが出せたのだろ

鳥取市 夏目 一粹

一線を越えないように雨よ降れ
怖いから夜道あいさつして通る
一匹になった金魚を慰める
老人はひび割れ茶碗かも知れぬ
審判もにんげんだから甘くなる
品のある人にはズバリ言えませぬ

西宮市 亀岡 哲子

新兵器ダダダダツと齒科の椅子

黒髪に戻って今日は新学期

人前婚の証人となるうれしい日

幼稚園まではどの子も天才児

いざの時なんでも作る戦中派

美術館にクレオパトラの着たドレス

大阪市 川端 一步

しみじみと二人で語る秋夜長

嬉しいね毎日友と会える趣味

セブテンバーソング流れて秋の恋

五輪まで生きてやろうと欲が出た

稀覯本見つけた鼓動取っておく

作家死す通夜のつもりで彼の本

三田市 福田 好文

妻の友までも土産は吟醸酒

天災が地球の急所突いてくる

人の世は誤算があつて面白い

宝物殿民の血汁が見当たらぬ

席譲れば孫座らせるお婆さん

自動ドアの前で子猫が人待つ

鳥取市 倉益 一瑤

花束のリボンに潜む刺もある

錯覚のままでゴールへひた走り

残り時間まだまだ熱い息を吐く

赤ワイン少しビエロになりました

過去形の赤がとっても愛おしい

尻尾を隠すスカート少し長くする

竹原市 岩本 笑子

長い道にも休む所はあるんです

ポストまで歩こう切手貼ったから

追伸は本音を少しもらすところ

焼きナスのほろりと旨い秋の風

秋深し病院へ行く日となりぬ

とても気楽に薬七錠朝と夕

枚方市 二宮 紫鳳

満月に杯を重ねて虫の声

わだかまりラップでチンと溶けた夜

手作りの嫁のレシビに寿命延び

朝ドラに背なを追されて動き出す

ティータイム孫の手作り笑顔揺れ

夕顔の香りが癒す今日の憂い

羽曳野市 宇都宮 ちづる

前向きにパワースポット巡る旅

足腰鍛えよう拝殿は遠い

皆が来る今日は一日笑つところ

エスカレーター右に立つたら西の人

一家に一個赤飯届く老いの町

医者言う理想体重まで五キロ

京都市 高島啓子

ひたすらにボタンに合わすボタン穴
今日出来るけど明日へ延ばしとく
寝て読むとかなり大きい新聞紙
雑踏の中でわたしを解きほぐす
ふっと呼ばれて旅立って行きはった

京都市 坪井孝一

人生にせせらぎあれば淵もある
画布の花黙って人を迷わせる
アルバムに渾名の教師気品あり
ロボットに名工の目が教えられ
好きだから拗ねる言葉が出てしまう

京都市 西村益子

幸せは炊立て御飯解す時
残り物でフルコースです今日の幸
嫌な一日鍋が二つも焦げました
顔性格似過ぎた父娘また喧嘩
節電節水今年の猛暑忘れまい

京都市 梶本宏子

飛行船ゆったり雲とティータイム
ラストまで健脚と笑み遊び好き
夢のかげら背負って街へ出るリュック
花いちもんめそろそろやめようラブゲーム
神様が好き あちこちにお礼さん

京都市 三宅満子

暑いけどやっぱり感謝お日さまに
庭先で行水した日父母もいた
英語よりきれいな日本語が先でしょ
ブランドではっぱり決めてクラス会
なんでもええ言うて味にはこうるさい

亀岡市 井上森生

今更に病気で悟る命の火
気が付いて良かったいのちの有難さ
精一杯いのちを燃やす気になった
仕上げよう私の元氣川柳便
体細胞六十兆の大神秘

長岡京市 山田葉子

傷ついた記憶ばかり抜けている
懸賞クイズ解いてた亡母に近くなる
家事手抜きとことんやって夏終わる
走馬灯呼び止められぬ人を恋う
古着脱ぎ捨てて光の差す方へ

八幡市 今井万紗子

パチパチパチ夫の元氣な爪が飛ぶ
広い空まだ持ち合わす好奇心
景品に笑顔もひとつ付いてくる
やっそこさ魔法が解けた恋終わる
誉め合って広い心で生きましようか

大阪市 阿野 壽美子

家族会議なんか主役お母さん
楽しみを教えてくれた句に励む
女子会と高年齢に通知来る
久し振りに無難に容姿誉めている
持ち上げて操っている母の腕

大阪市 池上 清治

どの孫も見上げるばかり盆休み
同窓会今ではピンもキリもない
七十年会ってないけど年賀来る
聞きながら仕事ができるラジオ党
深夜便のトークにうとうとから覚める

大阪市 井丸 昌紀

売店舗貸店舗だけ威張る街
早とちり気迫はいつも空回り
大丈夫言いつつも目は泳いでる
お祭りが済んでひとりの晩御飯
ちよつとだけ降ってくれたらいいものを

大阪市 岩崎 公誠

保護色は役に立たない華美の都市
かやくめし秋の味たち揃い踏み
気分変え繁昌亭で大笑い
汚染水タンクを抜けて自己主張
丸く丸くやさしい言葉愛包む

大阪市 江島谷 勝弘

お宝が一つもない僕の家
とりあえず焼肉はタンから食べる
誰も知らぬ僕風揚げの名人
紙おむつ孫が替えろと持ってくる
原発を死の商人が売り歩く

大阪市 榎本 日の出

現役をつらぬくつもり台所
ほめられて急に体が軽くなり
今はもう焦らないけど時は金
平凡な暮しだんだん好きになる
ゆつくりと残り時間を味わおう

大阪市 榎本 舞夢

校門をくぐる元気な日焼け顔
見守り隊言葉掛け合うランドセル
花も木も私の脳も活気付く
ニュース見て同じ領土でありながら
元気な内役立つ事を少しでも

大阪市 奥村 五月

虫干しに心も干した青い空
ロボットは疲れも知らず愚痴もなし
崩れゆく地球を捨ててどこに行く
反省が足りず天国まだ行けず
笑ったら嫌な鏡も笑ってる

大阪市 笠嶋 惠美

八重の桜せめてみやげの箸使う
芝居見て憂さが晴れたか棘が無い
パトロールカード安心もらい壁に貼る
猛暑日の一度の違いようわかる
見舞の電話師からいただく果報者

大阪市 神夏磯 典子

いい答え出そうと辞書を撫でている
光らない私励ますネックレス
歯の治療おいしいものが顔を出す
抜けがらの私に愛猫来て坐る
決断を迫る尖った文字である

大阪市 熊代 菜月

ジェラシーも欲も消えずに八十路坂
誤解され解かないままで逝った人
友からの便り嬉しい淋しがり
悔やんでもどうにもならぬ夢ばかり
ひと区切りつける亡夫の三回忌

大阪市 小谷 集一

ブライドを捨てると唯の影法師
見逃した過去に未練は持たぬ主義
しみじみと読む旧姓で来た手紙
好きなものみんな封印して名医
悔しさを笑顔に変える老いの芸

大阪市 近藤 正

汚染水オリンピックの呼び水に
政官財癒着政治の根は深い
消費税上げたら国の税が減る
いつか来る大きな地震腹くくる
TPP内緒話が多すぎる

大阪市 佐藤 忠昭

終焉地何処が良いかと地図を見る
お守りに優しい言葉備蓄する
司馬遼に故郷の歴史教えられ
納得がしこり溶かしてハイタツチ
あと七年五輪見るまで死なへんで

大阪市 坂 裕之

飾りつけない人柄に人が寄る
笑顔まで捨てると何も残らない
オブラートで包んでからのお付き合ひ
要領の良さをいい人と言うのか
間違つてなかつたのかなこの道で

大阪市 田浦 實

パソコンを買い替え老いに鞭を打つ
気配りのできる間はほけません
忘れるから次の苦勞と戦える
断捨離を何からやるか妻ともめ
平均余命そうゆつくりはしておれぬ

大阪市 津村 志華子

三日月の先の辺りのミステリー
キャベツ一枚剥がして命重ねてる
旅立ちの夢と希望を抱くりんご
秋雨の降る夜は老母の事しきり
立ち向かうとても手強い五七五

大阪市 津守 なぎさ

滝シブキ浴びる溪谷蟬が鳴く
豪雨での検診予約ブルーな日
雨の中ゴーヤつぎ次気を貰う
鶏頭の花あざやかに路地晴れる
姦しく集う四人の三朝の湯

大阪市 寺井 弘子

口数を連ね飲み込み遅い妻
聞こえても聞こえぬ振りの空気よむ
無理をして買ったスマホの手に余る
ケイタイの無かった頃を振り返る
店仕舞いセールで店を立て直す

大阪市 原田 すみ子

児のように泣く術とうに忘れてる
やさしくて正直だからボスじゃない
自分で持て余すガラスのブライド
告白をするのが楽な嘘ひとつ
贅沢も節約も続けられない

大阪市 板東 倫子

猛暑豪雨だんだん心が荒れて来る
天と地の異変が人を狂わせる
戦争と天変地異の我が一生
泣き事の次は居直る電力界
日本の奥の手これぞお・も・て・な・し

大阪市 平嶋 美智子

涼風に野菊がゆれている路肩
猛暑には勝てた秋風ふかく吸う
両の手の日焼けに気付く高い空
洗濯物バリツと乾き陽の香り
ゴミ置場うちの分だけ残された

大阪市 伏見 雅明

川柳に力を貰い今日を生き
古文書に紙魚も覗いた跡がある
お粥さんをリゾットというグルメ本
正論を少し緩めて生き延びる
炊飯器セット忘れてカップ麺

大阪市 松尾 柳右子

総入歯でも食事にはずみ出る
雨上り気分そう快外に出る
掃除して大の字になり時計見る
シャツいちで作句している六畳間
友達と秋空眺め語り合う

大阪市 升成 好

背を立てて書く人間の詩を書く

ありがとうだけははつきり声に出す

喜寿もバス次の米寿へ夢を織る

万歩計コース変えてもアスファルト

蟬の死に蟻が葬儀の列つくる

大阪市 山崎 君子

朝顔一つやつと咲きますペランダに

紫の花大きく開く嬉しさよ

朝顔の三つ咲いたと大さわぎ

今日もまた病院へゆく車椅子

子に貰うやさしさ嬉し生きがいに

大阪市 山本 加お里

人生の笑い葉を探してる

信号を走り渡れるうちはいい

限らない老々介護して夫婦

入院も楽しかったと独り者

旧友の目立つ帽子の後を追う

大阪市 吉内 タカ子

心臓あめの日曜マンガ漬け

ゴールまで脳トレ止めぬ八十路坂

河内弁孫に通訳嫁がする

戦争は他国のニュースも見たく無い

イチローの真摯の姿勢金字塔

堺市 大久保 のん子

筋書きのない人生をどう泳ぐ

この橋を渡り昨日は忘れよう

人間の驕りを神は見逃さぬ

こんなにも淋しく気楽ひとりとは

まだ炎える夢あり明日に懸けている

堺市 荻野 像山

息切れそうで切れない爺ちゃんの鼾

耳遠くなつて囁きも出来ない

ダブルベッド止めて静かな良い老後

いいコンビ僕が我慢してるだけ

用もないのに女性コーナー覗いてる

堺市 奥 時雄

備えろと言われて困る大津波

台風は招かないのに親日家

予知不能竜巻型の妻の乱

反論の間合い許さない二の矢

窓開けてゆうべの鬱を解き放つ

堺市 柿花 和夫

九条を翳るウイルスにワクチン

惜敗の帰りは重い千羽鶴

こんなにも美味だったのか三分粥

胸高の帯に不退転の決意

先人の知恵歳時記が泣いている

堺市加島由一

遺品整理一つ残した玉手箱
君が好きお酒も同じくらい好き
天気より当たaraぬ株の専門家
ダイケアー行き帰り見る田の様子
仏壇に朝顔の数報告し

堺市源田八千代

バーベキューの残り火を消す老婆心
少女一人怖い夜道を何故歩く
花持たせ後でこっそり清算す
舌足らずでアベベと言った日の息子
オリンピック効果は如何被災地に

堺市齋藤さくら

荷物持ちだけで父ちゃん付いて来る
給料日楽しみだったのは昔
汚染水これでいいのかオリンピック
子の荷物ならないように竹を踏む
こっそりと溜めたヘソクリ見当たらぬ

堺市遠山唯教

こころには未だ燻っている戦後処理
年寄でなければ咲かぬ花咲かす
被災地でみた若冲のエネルギ
断捨離ができず何でも使い込む
妻からのワイン一本誕生日

堺市内藤憲彦

ここまでと読んだ株価の乱高下
安納芋おいしく食べて秋に乗る
増税で年金がまた軽くなる
墓洗う親孝行へ秋の風
茶柱が大役果す氣にさせる

堺市西村りつえ

夏五輪に全身弾むバスポート
テロに核大きな悩み持つ地球
お早ようで体の調子見る鏡
見た目より噂まいてるおちよば口
地震から冴えた目でみる物の価値

堺市村上玄也

原爆の悲惨さ遠くなる昭和
戦争を知らぬ世代が勇ましい
血税に群がっている族議員
酒煙草止めても金は残らない
禁煙は意志薄弱と喫煙派

堺市矢倉五月

高層の窓ガラス拭くスーパーマン
天辺でやつとはずしたサングラス
今蓋を取れば火柱また上る
鍵の数増やすひとりになったから
二杯目のワインへ過去が浮いて来る

池田市 栗田 久子

東京五輪わたしの歳を考える

さだかには見えない秋を風で知る

あなたには勝つも負けるもつらいこと

気休めに過ぎぬサブリを今日も飲む

渋柿の威厳が消えたつるし柿

和泉市 横山 捷也

耳鳴りか蟬の遠音が朝まだき

向きを変えまた向き変える夏昼寝

枳の塩なめて味わう旨い酒

黒光り大黒柱嫁の里

核心に触れると背中ピンとなる

茨木市 島田 誠一

置き去りにした心の荷探す旅

最果ての秘湯に晒す古希の膚

密葬でやるとデカデカ告知する

筋通す人だと知って距離を置く

不純物少しは混ぜてらしい古い

茨木市 藤井 正雄

妥協して生きねばならぬ握手する

父の酌母さん照れる誕生日

謎めきが頂点になる以下次号

練り過ぎた嘘で自分を見失う

快方の兆し励まし受ける粥

大阪狭山市 矢野 梓

辛うじて夏乗り越えてやつと秋

五輪へと生きる目標一つ増え

殴り書きノート時時読んで見る

手短かに話し要点抜けている

明日へと取っておいたら期限切れ

交野市 森本 弘風

頑張つて東京五輪見てやろう

リモコンをカチャカチャと言う古い二人

薄いけど諭吉が中に鎮座する

歳の差婚持て余してるザマーミロ

塩加減一寸薄味愛と言う

河内長野市 植村 喜代

昔の日本こんな雨あったのかなあ

ほんの今晴天五・六歩ですぶぬれに

娘がいても一人は一人さみしいね

介護する身ではないと医者と言う

人間になんの罪があるのかな

河内長野市 梶原 弘光

ストレスをスライスしてはぐいと飲む

齢かなー伸るか反るかの荷が重い

オリックスの放送ある日早仕舞い

オバマと僕共にこたわつて居る沽券

ライバルの泣き言思案顔で聞く

河内長野市 木見谷 孝代

投句終えやつと畑に身が入る

大根葉日も雨も吸い伸び盛り

鶏頭のおしべとめしべどこだろう

飾りけのない村人が温かい

祝東京みんな七年先を読む

河内長野市 黒岩 靖博

鉛筆が二人の愛をたぐり寄せ

晩婚で真紅の薔薇が巣立ちする

筋通し妥協許さぬ父の意地

病葉になつて延命治療受け

オリンピックアベノミクスで株上り

河内長野市 坂上 淳司

朝ぼらけ寢床抜け出し一万歩

弁当に良妻賢母発破詰め

喜寿祝い米寿があると遠慮する

碁敵を負かすとちよつと立ちにくい

青虫の試食は許す無農薬

河内長野市 谷 久美子

相槌を打って皆を呼び寄せる

せつかくの命洗濯喧嘩旅

直球をぶつけ育てた子が素直

したたかな草と闘う午前五時

日の丸が五輪招致の風に乗る

河内長野市 松岡 篤

ローン済みゆつくりすると雨漏りが

蓋閉めて三分待てぬ成長期

マニユアルで挨拶までも皆同じ

息抜きの旅行先でも夫の世話

ポイントの期日が迫り無駄遣い

河内長野市 水谷 正子

血管の枝を眺めて老いを知る

来月でいいかと本を借りる仲

雨降りには雑巾持つて猫迎え

生協が来やはる時刻眉を書く

クーラーをつけたまま寝て軽井沢

河内長野市 山室 光弘

さじ投げた頃もあつたね半世紀

菩薩から夜叉に変わった妻の顔

赤ちゃんをぬれば直つた昭和の子

贅沢に過ごしたバブル倍返し

恋が着せ愛が脱がせる人の性

四條畷市 吉岡 修

丸かった僕をとんがらかした風

僕の未来知つて神が笑つてる

ああ八十路大器晩成遂になし

はがゆいが一票だけの力です

五時すでに男の昼の顔はない

岸和田市 岩 佐 ダン吉

笑われているがこの道を歩く
涙まで流してくれた聞き上手
多数派の言い分だって聞いてやる
輪の中でこれでもいいのかふと思う
九条のどこが気に入らないですか

岸和田市 堤 植 代

会食の箸の運びもおそくなり
暑い日が過ぎてチョッピリ幸せを
まだオシヤレ忘れてません女です
さんま焼き大根おろしをたつぷりと
衣替え元氣を出してさあやろう

岸和田市 森 元 ふみよ

テレビみて世界旅行をして来たよ
青春が一度に戻るナツメロは
日本の大臣何故か浮かれ過ぎ
化学兵器目に見えている殺し合い
脳活性CM聞いてすぐ実行

岸和田市 雪 本 珠 子

雑然と積まれた本が自己主張
生き延びて今ある幸に感謝する
雑草もプライド持って生きている
雑学で自分の世界広げてる
夕焼けの向こうに夢が見え隠れ

吹田市 大 谷 篤 子

魂を穏やかにしてから眠る
旅立ちと白い日記に太く書く
浮雲よ生まれた故郷知ってるかい
誰れかれと話したくなる八十路
リストラを知らないままの蟻の列

吹田市 木 下 敏 子

燃えつきる花火は丸くまるく落ち
暑い夏今年も無事に百日紅
歩きましょ楽しみましょと赤とんぼ
体重を二キロ落とした蟬しぐれ
後悔はせずに芒の穂は伸びる

吹田市 須 磨 活 恵

出る度に打たれて杭は強さ増す
虫の音に思い出ひとつ疼きだす
淋しい日心の奥でもチチロ鳴く
無になれず悩みも迷いも欲もある
突然の悲しい知らせ沙羅双樹

吹田市 瀬 戸 まさよ

萩満開二人で愛でた日も遠く
名言だノロマになったから辞める
五輪から新生願う福島県
愛想よし赤ちゃんるときからでした
話題無いのに電話だけ掛けてくる

吹田市 野下之男

TPP 語呂は悪いが結果待ち
悪ふざけ知覧の兵はなんと見る
雨の神何故か機嫌がなおらない
ジジとババ元氣を見せる喉自慢
広島とあの人の名は忘れない

吹田市 山本 希久子

目標と夢原寸のままの老い
背いてばかり母は小さくなるばかり
転んだら一句拾って立ち上がる
みかんむく仕草礼節心得る
富士の絵に最敬礼をしてしまふ

高石市 浅野 房子

重陽の節句菊でも活けようか
エアコンを付け昼ドラにうとうとと
医者巡りタクシーだって疲れます
みんな痛みこらえて生きてはるのだね
あつ虹だもう泣き言はいいません

高槻市 井上 照子

娘の作る野菜ジュースの一气のみ
禁煙をすすめて孫に嫌われる
こおろぎに厳しい残暑まだ続く
小一も英語学ばう世の流れ
図書室の漫画コーナー広くなる

高槻市 指宿 千枝子

鰻丼に化けてもナスは茄子の味
ご先祖と一緒に食べる盆まつり
室内の涼しいところは猫の席
ありがとうしてためらわず腰かける
他人さまは良いも悪いも手本です

高槻市 片山 かずお

包み紙解きやはりという土産
笑顔ふり撒いてお近づきを狙う
親友の証だ秘密守ってる
招かざる客には少し渋いお茶
打ち始めまでは和やか囲碁仲間

高槻市 左右田 泰雄

ほほ笑みの形を残す片えくぼ
満月においでおいでをするすすき
追憶を辿ると見える重い過去
指定席なのに並んで待っている
優しさにあふれて素直な顔になる

高槻市 島田 千鶴子

秋めいておでんコトコト夕支度
矢面に立てば奮起する女
十三夜恋の話をしませんか
震災の傷癒えぬまま友が逝く
中心点曖昧にして理想論

高槻市 初代 正彦

軽自動車に替えて気分も軽くなり
気前よく値引きされると不安です
聴き上手忘れ上手のご長老
軽く呑むつもりがとんだ暑氣払い
飴玉をゆっくり舐めて機を狙う

高槻市 富田 美義

忘却の始め楽しむ日向ぼこ
思考回路だんだん緩み残り道
流れ行く雲の彼方へ我を見る
余命表覗ける神の胸の内
生き死にを語り差も無く散ってゆく

高槻市 富田 保子

いつ散るか知れぬ命を磨いとく
載った日は新聞さまに手を合わす
ひと呼吸置かずおばちゃん答だす
とんとんと降りた要件なんだつけ
お土産へ寄り道ばかりバスツアー

高槻市 安田 忠子

シンプルな服目立ってる同期会
絵手紙に簡単に書くお礼状
人の命新聞記事に見る軽さ
旅かばん最小限に軽くする
ワーツと来てサーツと帰り夏終る

豊中市 池田 純子

クーラーも猛暑も飽きたお盆過ぎ
割れそうで割れないコップ棚の中
大地震来るぞ来るぞと鈴が鳴る
箱の中甲乙丙の桃の顔
なぜ今と母が逝った日神に問う

豊中市 松尾 美智代

飾り物全部はずして躑躅口
自分史を飾るキラキラ光る汗
十八切符友とのんびり語る旅
太陽が無色の水に色を塗る
ありがとうなかなか言えぬ人と居る

豊中市 松村 里江

目標は高く男は焦らない
深読みをしてストレスを溜めるクセ
スマートな会話が弾む喫茶店
理屈通り行かぬ男と女です
一人居の指はタンゴの拍子取る

豊中市 水野 黒兎

火の舞った遠い記憶の焼夷弾
核にテロ師よ人の世は嗚呼ですな
町中にカメラ自分も監視され
時により子供目線になる介護
不許複製核・放射能・大地震

富田林市 片岡 智恵子

佐渡ヶ島丸いボストが懐かしい

思ったほど揺れず楽しいらしい舟

戦車にはなるかと念じ払う税

ちぎれ雲いつも一人を自覚する

オリンピック観たくて生きる卒寿まで

富田林市 中井 アキ

自画像を飾る明日という野望

都から逃げてきたのは自尊心

埋み火がまだ生きている生きられる

嫁姑隙間を埋めてゆく笑顔

穂和治療希んでるのは平和です

寝屋川市 富山 ルイ子

炎天下買物食事娘に感謝

電動の自転車に娘はやっと馴れ

自転車保険一億入らねば

秋冷にやっとハガキを書く元氣

わたしから私に褒美敬老日

寝屋川市 平松 かすみ

背伸びして届く程度にする庭木

ママチャリはエコだ空氣は無料なり

孫の買う老人向きの太いペン

妻と言う箍は外れぬままで居る

胃腸薬飲んで暑さを乗り切った

寝屋川市 森 茜

蘭枯れる定めのあるかなど問うて

生きんかなこの世は汗をかくところ

博物館しっとりひびくサヌカイト

腹べこがごそごそ真夜中のリビンゲ

月下美人 白を満たして香りたつ

羽曳野市 安芸田 泰子

大ジョッキ泡と一緒に消えた鬱

雨続き一人暮らしの無言劇

深読みをされては困る思いつき

ほどのどの距離が保っている平和

プライドを捨てて善意の手に縋る

羽曳野市 徳山 みつこ

脳回路復旧せずに秋に入る

まだ若いもう歳と子を惑わせる

貧しさに強くてわたし雑食系

竜巻の爪跡神よ見ましたか

真海さんの深い心が五輪呼ぶ

羽曳野市 永田 章司

勝ったからいいわといかぬ汚染水

アベノミクス腰折れ懸命消費税

苦も楽も笑って語る過去の日日

老いふたり物置き部屋が増えていく

防災の準備万端今日も無事

羽曳野市 三好專平

すこしだけ秋波をおくる志功の画
虎造もお茶を飲んでる富士の山
なにもかも水に流してしまふのか
太陽がプールの底で喘いでる
カチューシャに恋した戦後の青春譜

東大阪市 笠井欣子

本音ない話を語る長電話
想うこと多すぎ白髪また増える
三回忌済ませ肩の荷軽くなり
体調のすぐれぬ時に不意の客
一日を無事に生きたとお線香

東大阪市 北村賢子

可能性無限未来へヒラケゴマ
五輪招致へ未来明るく活気づく
伝えたい本音はそつと追伸に
労いも言わなきや解らへんアナタ
ジョークで済まされぬ飯の世の契り

東大阪市 佐々木満作

夏バテが一気に加速する九月
川底に人間のエゴ捨ててある
古希過ぎて悲鳴あげてきた身体
心電図微弱の波長にみる安堵
真夜中の鼓動明日は起きれるか

枚方市 安達忠央

二十年ぶり再会したがまだ綺麗
旧友と会えば仕草で名前出る
会長の威厳ざわつきびたり止み
肩書きがとれてゆっくりした気分
平和ボケ顎の骨から緩みだし

枚方市 伊達郁夫

仏壇に菊一輪の秋がある
戦終えただけで余生と言わないで
猛暑日が過ぎてまともな猫の髭
炎天下汗に私の毒を抜く
言い足りぬことが背中に書いてある

枚方市 小林わこ

眠る前ほんの一言書いておく
血圧の管理しつかりするノート
亡母の家計簿やりくり見事わたしには
あなたの声聞きたくなくてノーと躁る
何があったかちぎったあとが痛ましい

枚方市 丹後屋肇

ハッピーバースデーローソクを消す百二歳
偉人伝へナヘナになる読後感
亡妻のフォト怒ったことがない
イクメンを自負してみせるお襦袢換え
先人がヒントを呉れる洪水碑

天国の情報収集寺巡り

枚方市 寺川 弘一

遺書書いて墓も建てたがまだ呆けぬ

いい夢を見た日一日中元氣

デスマスク怒った顔は見当たらぬ

ヘアピースしてから調子よく喋る

枚方市 二宮 山久

夕やけがこんなにきれいな旅日記

ほら秋がきてます夫婦のベアシユーズ

里からの土産とどいて里心

旅プラン妻がだんどり秋が来る

作句するエンピツ芯は丸くなる

藤井寺市 伊藤 アヤ子

私に似た案山子今年も守ってる

相棒とはいつか別れる運命かも

滅入ってる自分に活を入れてやる

川沿にコスモスが咲く散歩道

好きだったぶどう供えて秋彼岸

藤井寺市 津田 シルク

遺影撮り断捨離もしてケセラセラ

眠剤要らぬ本が一冊あれば良い

二日酔い入道雲も泡に見え

出る幕じゃないと亡父の声がする

幕とじる老舗は老舗らしく閉じ

お別れの訪れ遠かれと祈る

老いたりとも戦体験者の気迫

身代わりは無いと信じて婚五十

時間厳守子午線の街育ちです

朝の冷氣に少し微睡む今暫し

藤井寺市 増井 ヨシ枝

秋桜揺れて亡母の声を聞く

厚化粧クシヤミ一つで剥がれ落ち

赤蜻蛉ヒユンヒユン亡父母も群れの中

瘦せたねと握手した手をいとおしむ

盆栽の菊そのままに三回忌

藤井寺市 吉田 喜代子

敗戦を終戦にして八月忌

脳疲労チヨコと仲よく秋を待つ

許せぬ日天声人語声出して

きみまろの毒舌許す主婦の群れ

山の湯は日々の雑事を消している

藤井寺市 若松 雅枝

水槽へ金魚残して孫帰る

故郷の祭り豪雨でお流れに

茜雲見れば何故だか胸疼く

歩行器に名札を付けて老い支度

東京五輪決まって生きる意欲湧く

箕面市 酒井紀華

足の爪カラフルに染め自己主張
見惚れてる爪のきれいな人妻に
秋深し決断せまる爪が飛ぶ
爪割れる明日はうなぎを奮発だ
夜の電話安否気遣う友嬉し

箕面市 広島巴子

今はただ五輪決定バンザイ
予定表2020へ五重丸
まだ暑い思考回路が作動せず
携帯の充電僕のティータイム
なんとなく暑さやわらぎチンチロリ

守口市 井上桂作

歳かなと考えることやめましょう
プロ野球孫も負けずにひいきぶり
局地的大雨少しこわくなる
特攻の友は地獄へ忘れない
いつしかにお盆の行事忘れられ

八尾市 内海幸生

うっかりを許してくれぬシュレッター
四面楚歌弱音を吐けば楽なのに
せめて夢だけでも杖をつくものか
エラーした選手を舐めるカメラアイ
無理にでも笑顔作って明日を待つ

八尾市 高杉千歩

肩の荷がないのに肩が凝る不思議
デイサービスここでも年長さんらしい
味見した時はお腹空いていた
任しとき昭和の知恵は無尽蔵
その手には乗らぬ大袈裟に転ける

八尾市 寺川はじむ

ガラクタを手放してから悔いひとつ
もう届いてる昨日のつけの請求書
夏休み終えて疲れが並ぶ駅
豆台風ようやく過ぎた夏休み
放任が過ぎて体罰悪にされ

八尾市 宮崎シマ子

證々寺の狸同窓会にみな来ない
秋の夕陽に紅葉見に行く車椅子
月の砂漠を姫はひとりで行く駱駝
雨が降り小雉子鳴く村灯がとまる
夕焼小焼明日幸せくる兆し

八尾市 村上ミツ子

竜巻のニュースへ背筋寒くなる
ひやしそうめん食べぬまま夏終わる
うろこ雲空いっぱいいのうろこ雲
はつきりともゆつくりと秋になる
効果あがらない健康ダイエット

大阪府 桑 田 ゆきの

糠床を毎日混ぜる蠅の掌
秋茄子に一家団欒今日の幸
虫時雨黄泉路を辿る母偲ぶ
無条件降伏をした国の業
仕舞い風呂心ゆくまで虫を聞く

大阪府 野 田 栄 呼

心の鍵しめて堂々生きる八十
鎌で刈る根氣と勝負して八十路
灼熱の陽を浴び健康色の顔
好物を食べてストレス吸いとらす
名も知らぬ風が運んだ庭の花

大阪府 米 澤 俣 子

透明の杖が欲しいな若づくり
味の出た頃にゆっくり朽ちてゆく
こわれもので届いた恋の送り状
ロッキンロール青春を呼び戻す
笑い合う目線は同じ良い仲間

大阪府 粉 山 隆 盛

秋冷にきゅんと締まった身とこころ
通学にゲートル巻いた暗い過去
伝統の味も薄れるワンパターン
贈られたことは綴れば愛の詩
張り詰めた空気を解かすジョークの矢

神戸市 伊勢田 毅

七年後余命をそつと神に聞く
ペール脱がぬT P Pに踊らされ
誕生日一日白いまま終る
竜巻の爪あと無情雨が降る
彼岸花亡妻の秘密は聞かぬまま

神戸市 白 川 淑 子

どこが良いさっぱり分らないホの字
私の軌道修正新子さん
少年日あの戦争は何だった
満月光コンビニ檣山に出来る
何でやろ負けても負けても虎ファン

神戸市 山 口 光 久

友達といつもIQ比べられ
合格後それきり努力しなくなる
回り道してきた足が頼もしい
人間の国境線を嗤う鶴
人前でにこにこ家で渋い顔

神戸市 山 崎 武 彦

きっぱりと別れて自分取り戻す
ことさらに跳ぶことはない水溜り
母からの糠床継いでくれた嫁
てつぺんの椅子は風向き読んでいる
お言葉を返してからの固い椅子

神戸市 山田 婦美子

人間のエゴが地球をかえてゆく
南海トラフ逃げる場所です採めている
二度と来ぬ今日の景色を焼きつける
親の背中見て育ったのに似ていない
ここだけの話に鎖をつけておく

相生市 中塚 礎石

定年の日の酒の味忘れない
背負い投げ大きな音で出た埃
生きること女一人の眉を描き
ゆったりと惚けて縁側日向ぼこ
靴の紐結び直して朝を出す

明石市 梶谷 和郎

あと何回聞けるか母のどっこらしょ
蟬の子と暮らし始める樹木葬
白さ増す手帳の老いを恥じてない
暇ありすぎて時計ばかりを見る暮らし
長生きへ揉めず悩まず楽しまん

芦屋市 黒田 能子

亡母はもう遙かな人になりました
ささやかなりボン結びの寸志です
イエローカード投句締切り明日である
徹はカビでも美味しく食べているチーズ
倒されたそこを出発点とする

芦屋市 竹山 千賀子

これ以上歩けませんと靴の底
待っていた発言の席飛ばされる
尺貫法生きていました五寸釘
恩返しまだ半分も出来ず喜寿
趣味の会仮の名前で出ています

尼崎市 市坪 武臣

星ひとつきさらきら光る帰り道
ひまわりも暑い暑いと耐えて立つ
ご健康を祈ると記して風邪に伏す
気取らない同じ目線の無二の友
新聞の天気図を見て動く朝

尼崎市 加川 靖鬼

煮て焼いて食えない男芯がある
好き嫌い選んで楽しい筑前煮
役終えた落葉も浸る露天風呂
だんだんと灰汁抜けて来て惚けはじめ
ためらっていると時代のゴミになる

尼崎市 軸丸 勝巳

トウキョウと決まり日本中歓喜
七年は歳をとらずに待つ五輪
災害の度に拡げる府県地図
納得がいかなぬ竜巻何で此処
怖いから行かずに孫と遠花火

尼崎市 長 浜 美 籠

たわいないことが楽しい日なり
無花果のたわわに実る自生の樹
責任回避ゆっくり落ちる砂時計
無印の日に花丸をつけておく
タイミング外し居心地よく暮らす

尼崎市 春 城 年 代

闇の深さにねずみ花火の思うまま
ホタル乱舞草深い曾祖父の駅
老婆の胸にみんな良い人ばかりなり
身辺整理すればしたで捜し物
さわやかな贅沢だった君も居て

尼崎市 藤 井 宏 造

飲む誘い受話器のそばで妻がバツ
退屈で近所の猫とにらめっこ
公園をまだ知らぬマジックのハト
かわいそう不味いと言えぬレポーター
秋の虫踏まないようにウオーキング

尼崎市 山 田 耕 治

いつかまた会えると思う同じ趣味
度を越さぬ程度にというお墨付
お会いして見たいブログのおばあちゃん
神様のヒントを当てにして眠る
寒い方がましかとこわい顔をして

加西市 金 川 宣 子

老いの坂愉しみながら越えてゆく
言ったこと責任持てぬ歳になり
敬老日湯めぐりマップ携えて
カーナビが旧道ばかり指図する
盆休み帰ってからが大掃除

川西市 西 内 朋 月

電話すらめったに掛けてこない子ら
赤ちゃんの笑顔にいのち伸びていく
満天の星が煌めく通夜帰り
一回も乗ったことない救急車
追伸に酒は控えと書いてある

川西市 山 口 不 動

百歳ののど自慢伴奏は無視
手拍子はAKBにそぐわない
人間に異常気象のペナルティ
防災日携帯ラジオまた買った
この世にてめぐり会えたる妻子孫

三田市 石 原 歳 子

練習をして書きました熨斗袋
暑い所為漢字を忘れ電子辞書
早二年独り暮しも板に付き
厚底の靴でそこらを歩きたい
初めての道で発見フジバカマ

三田市 上垣 キヨミ

年金は川柳楽しむためにある
私から子孫を残す血を吸う蚊
コーヒートのホットを頼む秋予感
炎と燃えて恋を知らない彼岸花
孫達の詠歌に遺影嬉しそう

三田市 尾崎 一子

肝心な用件が飛ぶ母メール
孫が来た机並べて夏を書く
盆参り仏陀の道は花ざかり
いじめっ子帰るところは母の胸
よそ見して大夕立に会う若さ

三田市 北野 哲男

早い目に秋を感じる登山靴
里の秋ハミングさせる栗ごはん
ご意見は姿勢正して聞き流す
救急車止って故郷へ電話する
グーとパー神とじゃんけん赤ん坊

三田市 田中 章子

おかげさま朝のごはんのおいし過ぎ
無防備でいられる夫と歩む道
あの人も子どもも孫もよくできる
手の届くところに包丁あるドラマ
十本の指遊ばせるマイシユーズ

三田市 堀 正和

女医淡淡妻癌告知即手術
大雨警報只今手術中
命には障りなしという御籤
マニユアルの通り動かぬ洗濯機
慣れぬこととして到頭ギックリ腰

西宮市 秋元 てる

街に出て素敵な人を目カメラに
御免なさい孫が先です仏様
待合室これも少子化高齢化
いい子いい子して生き延びる老いの秋
どう見ても無言の方が優勢だ

西宮市 足立 茂

車買う元気はないが免許証
ヒョウ柄のおばちゃん今日も怪気炎
七つ八つ星を数える肩車
温室では決して出ない野性の美
完璧主義ダイエットでは骨と皮

西宮市 緒方 美津子

家中の手摺気になり出した秋
里守る弥陀の使いの曼珠沙華
目を描くと息をはじめるお人形
父の声とも母のそれとも風の音
鍬を洗って梅花藻が美しい

西宮市 牧 渕 富喜子

ふるさとは大気不安の中にある
世も末を何度言ったか月終る
ベランダの蟬のなきがら盆もゆく
異常気象につくつく法師迷い鳴き
災害の備えあるかと言う夕日

西宮市 山 本 義 子

領収証だいに溜める癖が付く
おしくらまんじゅやめて各停乗ってます
自動より暖簾をくぐる店がよい
念押して忘れっぱさをカバーする
明日は押すか引こうか多分アハハだな

西宮市 吉 井 菜々子

大漁旗の気概を追って塩竈へ
塩竈のワカメに勇気貰ってる
ごめんなさい笑顔とジョーク忘れてる
復興の更地にゆれる力芝
汚染水にわたしの鉛筆も失る

姫路市 古 川 奮 水

猛暑の日銭湯も良し若返る
点滴へ不服を言える朝の顔
歳長けて浪曲もよしラジオ聴く
お目出度を伝える電話ベル涼し
鉛筆けずり久しい香に気づく

奈良市 阿 部 紀 子

五輪めざし希望に燃える子の強さ
汚染処理全て解決五輪まで
五輪まで生きたいものだ頑張ろう
地球上絶滅危惧種保護願ひ
椅子よけて掃除ロボット手がかかり

奈良市 岩 本 浩 二

ジョークだろそんなにもてる筈がない
冗談に言った言葉が点火する
用心深く心に鍵を掛けている
熱燗で鍋焼きつつき暑氣払い
素直にはアベノミクスを信じない

奈良市 加 門 萌 子

富士山も後押ししたか五輪来る
殺戮は御免ドラマも中東も
断捨離は苦手整理をしましうね
思いがけず可愛い頃の息子の手紙
負けん気が言い訳うまい老夫の背

奈良市 辻 内 げんえい

孫みんな揃えて盆の墓参り
騒ぐだけ騒ぎコテンと寝入る孫
ナメルナヨ言ったはよいが続かない
宇宙の謎ひとつ分かれば二つ増え
皆同じそんな時代じゃありません

奈良市 米田恭昌

御仏も心地良さそな御身拭い
仮名文字の魂ゆるがす八一の碑
据え膳だ何をためらう事がある
東京五輪何か侘しい高齢者
五輪まで頑張ろうやが合言葉

生駒市 飛永ふりこ

ざんぷりと一人遊びの波に乗る
最後まで花の恥じらい保ちたい
長い脚これ見よがしが美を汚す
親しさも謙虚の二文字ポケットに
紫蘇ジュース恋の惑いの一掬に

大和郡山市 坊農柳弘

十六夜の戯れに酔う月見草
ひと抓みの塩で唸らすシェフの自負
生きたくて催眠術に身を委ね
サービスタイトム賞味期限をチェックする
さよならの向こうでコスモスの笑顔

奈良県 天正千梢

わたくしの時間割私が決める
ひ孫まで「退社時刻」を知らせに来
一人ずつ病名知らしなくさめる
コーヒーマの味がどうのと患者たち
「名医でもないが」とたつぷり自信あり

奈良県 中原比呂志

輝いて読んだが今は眠くなり
値上げなどしませんが切身薄くなり
特価品求めて走るガソリン代
完熟のバナナは値段下げられる
折鶴を世界に広げていく平和

奈良県 渡辺富子

東京五輪その頃のちあるかしら
すり減った若さに赤を塗ってみる
倦怠期のこけしあくびを移し合う
乱切りにしたい一言熟を持つ
来し方のノート海鳴り高くなる

和歌山市 岩本美智子

ひぐらしが鳴いていますといわれても
異常気象実りの秋は憂い顔
人生を勝ち負けでみる性悲し
汚点ひとつブライド高き友に秋
卒寿まで生きてみようよオリンピック

和歌山市 柏原夕胡

わたくしに戻ろうと協道に行く
日めくりの悲哀へわたくしを重ね
ぬいぐるみだけ私の救世主
食前酒ふわーっと心と和らげる
あの世への扉に触れた事がある

和歌山市 喜田 准一

成り行きに任せ無策の策で行く
気を汲んで余計なこともして終う
今ここで凹んでられぬ訳があり
零す愚痴互いの距離が近くなる
照れている割にはつきり好きと言う

和歌山市 楠見 章子

レモンティー時には恋のまねことも
暮らしぶり想像させるいい女
世間では連休と言う大騒ぎ
きれいな夕陽それから坂が好きになる
泣きやんで明日けじめの旅に出る

和歌山市 武本 碧

早送りしたい日もあり茜雲
迷路から抜ける頓知はないものか
手に負えぬ時は想定外と言う
喝采を確かに聞いた夢の中
ハ長調の人生だった風が風ぐ

和歌山市 土屋 起世子

生んでくれて感謝してると五十の子
物差しの目盛り大きくして同居
晩年はきつと大吉手相見る
憎まれ口言い合う二人親友だ
スピンの朝の散歩の心地よさ

和歌山市 福井 菜摘

いつからか子等に教わる歳になり
ドンマイと暗示をかけてジャンプする
見栄張って余白だらけの手帳繰る
許すたび心の角がとれて行く
風の彩読んで明日を組み立てる

和歌山市 古久保 和子

七年は近くて遠い大騒ぎ
役どころ心得ている刻みねぎ
糠床は一生掛けてまだ足りぬ
百均の銀行印で足りる額
コンビニが増えて上手に手抜きする

和歌山市 福本 英子

出番くる猛暑ごめんと彼岸花
茶柱の立った朝でも独りきり
大切にしてくれてます耳飾り
サンマの値聞いて晩菜やり直し
台風銀座猛暑に遠慮してくれる

和歌山市 松尾 和香

好奇心若さの秘訣だと思う
梅干しに柚茶猛暑もへこたれぬ
あめとむち暮しのリズム保つてる
久し振り雨の音聞く地藏盆
有馬離宮娘と眠る夢セレブ

和歌山市 松原寿子

紀の川市 北山絹子

変身の和服で足が迷い出す
免許更新背伸びをしてる訳でなし
ほっとする花と対話の散歩道
二千円札何処でどうしているのやら
脇役で充分ですと学び取る

岩出市 藤原ほのか

打ち水を勤め帰りが踏んでゆく
新聞の三面記事を先に読む
雲が流れて連れ添う人の白い髪
川渡る風が幸せ連れて来る
困ってる貴方の傘になる勇氣

紀の川市 辻内次根

折り返し再び深く考える
瞑想し辿り着くのは母の胸
すっぱんのままで暮らせる心地良さ
背比べ柱の傷に夢託す
玉手箱開けると見える未来地市

海南市 小谷小雪

田辺市 岡本昇

友はもう銀河鉄道どのあたり
かさかさの手にちよっぴりクリーム塗る
面倒と言うとなんでもめんどうだ
デパ地下の割引の字は魅力的
ダメージを受けた心に手作り茶

紀の川市 宇野幹子

橋本市 石田隆彦

反芻をして正解を絞り出す
さらばえた脳を弾ます電子辞書
世の中を甘く見ていたつけ睫毛
凸凹のない道だから蹴躓く
醜態を晒し切るまで逝かれない

生きている意識だんだん強くなる
叱られたことが笑いのタネになる
心臓が好きだ好きだという合図
震度2の喧嘩でコップ割れました
口チャックこれが私の背き方

鳥取市 有沢 せつ子

いい風に運動会の曲が乗る
優しい絵やさしい心呼びおこす
本名と雅号で別ける住所録
職業の折り目が消えぬまま老いる
やる事がいっぱいあって出る元氣

鳥取市 池澤 大鯨

月一度例会があり区切りする
昼の月地味なままでもいいという
月の名を使い分けする雅かな
月満ちるだれの目にも明らかに
満月が海から生まれ今中天

鳥取市 奥谷 彩子

心の鎧外す一人つ切りの部屋
ボケ防止ジョーク合戦まだ続く
多数決いい事ばかりと限らず
愛なんて煙に消えた玉手箱
火傷せぬ正論雑魚にでも吐ける

鳥取市 加藤 茶人

手鏡を拭くと自分の素に戻る
右耳をしっかりと立てて票を入れ
風鈴の季節はずれはコウロギか
ジューシーな世代で渋みない味覚
肩書きと人間性は反比例

鳥取市 岸 本孝子

断って切れる絆は知れている
スマートにジョークを使い切り抜ける
目の位置を合わせ子どもを蔑する
ITの進歩老人舐められる
待つ者がいない佗しさ旅みやげ

鳥取市 竹口 清信

世の流れ逆らわなくて生きていく
世の流れ俺も流している一人
一人では生きてゆけないのもこの世
この世からみればあの世は楽そうだ
楽なんだ帰った人が居ないから

鳥取市 土橋 はるお

国あげて後期高齢者を嫌う
輪の軸にタワーを立てて盆踊り
算術は苦手と言うが銭溜めて
竜巻に遭うから旅は諦める
熊が出た嘘でも言わにや動かない

鳥取市 中村 金祥

孫の手をひいて出会った初恋の人
猛暑去り淋しくなった散歩道
岩清水命芽生える音がする
叱る時は我もしっかりしてかかる
三歳の脳へ沢山種をまく

鳥取市 永原 昌 鼓

ルンルンと海外旅行大移動
水槽を出て泳ぎたい熱帯魚
好き嫌い贅沢言わぬ戦中派
老人を残して村は暮れて行く
熱演に老いの涙が止まらない

鳥取市 西川 和 子

グループの目印にする目立つ人
胃の中をぐるぐるカメラ探し物
探しても何も見えぬと笑むカメラ
煽てられても近頃腰が付いて来ぬ
姿見にまだいけるよと煽てられ

鳥取市 春 木 圭 一郎

幸せは気持ち次第でやってくる
気がついた時がやる時やってみる
煩惱を消せる特効薬はない
できぬこと周囲の力借りていい
たいがいの事は時間とともに消え

鳥取市 平 尾 菜 美

動きましよう艇子に頼りの生返事
ジャンケンで納める試合たまに瑕
ピンピンの努力私も買っている
投資する時間わくわく秋深む
暗がりの牛を引き出す月あかり

鳥取市 福 西 茶 子

凸凹がいいな四角は肩が凝る
お日さまを足の裏にも見せ昼寝
屋敷中草が伸びても死にはせぬ
猛暑から晩秋空は天邪鬼
ガラクタの山が遺産で揉めもせず

鳥取市 宮 脇 道 子

来る秋を無事を折って花を植え
老いの友痛み分け合い夕日見る
老後の不安祖母ちゃんたちで分ち合う
幸福を忘れて泣き言やっぱりね
猛暑越え朝顔二輪咲いてみせ

鳥取市 吉 田 孔 美 子

一大事見た目九割にもあせも
まさかの時に人間らしく輝こう
瞬時の決断でまさかを覆す
草木染微妙重ねて絶妙に
あの峰を越えるよナビはおとなしい

鳥取市 吉 田 弘 子

似た様なローテーションの夏の食
同じ道歩き体調テストする
床につく今日の事より明日のこと
睡眠時間今日の機嫌のカギ握る
ひっそりと野辺に咲く花強い芯

倉吉市 猪川 由美子

恋文はやはり手書きが私好き
弱点を総さらけ出し人気出る
遺影写真早目に決めて告げておく
柔ちゃん寝技を決めて党の顔
気を遣うよりもトイレで昼飯だ

倉吉市 山中 康子

皆ねむり後部座席で力んでいる
十七号積乱雲とにらみっこ
竜巻にウインクされたその瞬間
今日もまたがんじがらみの脳揺する
一足飛びの涼にいやまごづいた

倉吉市 山本 玲子

言い訳はよそう心が寒くなる
半分は探し物する万歩計
聴力検査地獄耳では異状なし
体調は今日の歩幅に出てきます
世話役のハッピーで男あげた爺

米子市 後藤 宏之

ホタル族いつそタバコと縁を切れ
神様をとどころであてにする
うれしさが両手広げて待っている
たべること丈がうれしいそれもいい
アドバイス水割りよりもストレート

米子市 後藤 美恵子

残り火が優しい風になびく秋
夏の恋古いビキニが覚えてた
目付きみて人も魚も選ばれる
見たいテレビあるが会話を優先す
夫婦喧嘩引きずる朝の無言劇

米子市 竹村 紀の治

日本晴れ読書にすればと言う財布
誰からも電話が来ない豆を煮る
無駄な努力ですがアンチエージング
折れそうな僕を励ます別の僕
物産展ふる里が呼ぶ酒が呼ぶ

米子市 中原 章子

天気図が真っ赤に染まる新記録
特別な日の御馳走にするうなぎ
食べ飽きぬごはんのような関係に
逆境の後のチャンスを待ち構え
ヒントだけチャンスの女神ちらつかせ

米子市 成田 雨奇

なにかしら数えてばかりいる暮らし
天井も床も見えない位置にいる
孝行の仕上げ父焼くボタン押す
あれこれと心の旅は果てがない
後ろに手が回らぬほどに違反する

鳥取県 石谷 美恵子

魚臭一筋友はいまでも魚商する
リタイヤをしたい家事から抜けられぬ
病名を知るまでなぜか渦を巻く
八十歳のころに住んでいる少女
肉親の痛みへ酷なマイク向け

鳥取県 岩崎 和子

鴛鴦の名にびつたりの二人集
正直のなかに熱さが迸る
句集読み夫婦のどかに時過ごす
二人共しばし長閑に猫と居る
猫二匹今日も家族の椅子を取る

鳥取県 斉尾 くにこ

相席にじゃが芋くと南瓜さん
陽の射さぬ場所で声援おくつて
笑顔咲く待っていたとは語らずに
ひとときをシネマの中の逃亡者
夕焼けの花束もらう誕生日

鳥取県 竹信 照彦

向日葵の迷路明るく迷わせる
街灯がポツリとあつてホッとする
大宇宙なのかコップの中なのか
余命なお無限あちこち痛くなる
悩んでも所詮山頭火にはなれぬ

鳥取県 鳥越 鬼一

7年後東京五輪風で観る
7年間起らぬように大地震
原発にコントロールされる心配
物価高せて年金下げないで
せめてもの幸せ妻とお茶をする

鳥取県 西谷 悦子

迂回路を泳ぎ自分を取り戻す
脳細胞孫に上手に刺激され
可能性ゼロではないと脳がいう
談笑の中にぼろりと本音見え
仏様にまず差し上げて朝ごはん

鳥取県 細田 裕花

につこりと旅自慢するツーショット
看板が色褪せている過疎に住む
応援歌心の旅の底流れ
親友へ手紙書きたくなる月夜
私の未来へ会いに行く旅路

鳥取県 松川 行男

ライバルの猫は俺より先に膳
五合目で買ったサイダー同じ味
人生相談国の事など忘れても
どうしよう笑って泣いて暮れるまで
秋になつても枯れそうにない原発だ

鳥取県 山下節子

ふるさとの温さ感じる盆踊り
爆発の跡も絵になる文化遺産
選ばれた呼名の声に納得す
たまさかに一人ひたすら本を読む
がむしゃらに進んで一つ城つくる

鳥取県 山本正光

途上国大きな顔をして困る
母親を父の妻だと言う息子
毎日が大事と庭の草は抜く
トラ勝てば一合で酔えてまだ飲める
九回の裏は観ません胃が痛む

松江市 小川注湖

手を取って描いた夢に虹が立つ
ローン終り小庭の松と子の未来
三条件ひとつ引つ込めゴールイン
地産地消安心を売る顔写真
盆栽の形に祖父の腕自慢

松江市 錦織禮子

道の駅足湯もあつてリラックス
白内障物議の的になつてゐる
三六五の石段に落とした帽子
直立不動トークも旨いチャンピオン
お宝誕生産院ホテル並み

松江市 松本知恵子

幸を呼ぶ水引草の花咲かす
生け垣で風通しいいおつき合い
ひたすらに神に祈った夏過ぎる
白昼の軽さの中で本を読む
がらがらとエネルギーシユな孫が来る

松江市 松本文子

傷ついた鳥はふるさと出たがらぬ
浮き浮きとしてはならない墓参り
浮いたらおわりメダカも私も
古里に知らない人が住んでゐる
必死に生きた婆会の生ビール

松江市 三島淞丘

酔いざめのコップに浮かぶ亡母の顔
役退いてピエロの仮面脱ぎ捨てて
説法にユーモアという隠し味
晩秋の丘で天地の声を聞く
まだ生きるつもりで家のリニユーアル

出雲市 伊藤玲子

ばあちゃんと遊びズーゾー弁喋る
東京五輪浮かれて居れぬ底辺だ
私も霧が流れていくように
どうしても嘘は言えない立葵
袋から時どき覗く内緒ごと

出雲市 岸 桂子

良くできた母でもまたの名は姑
眠れない夜は過去などたぐり寄せ
子守唄わたし一人の節回し
嫉妬とは酸素不足に似てわびし
警官を見てもドキドキ等しない

出雲市 小白金 房子

山里の夕陽斜めに暮れいそぐ
生かされて地獄極楽読む時世
巨牛の激闘招く夏の島
礼服に真夏がしみる葬の列
雨の音聞いて二度寝の朝とする

出雲市 多久和 敬子

世渡りが下手迷い道ばかりする
新しい布団楽しい夢の中
年金もあれやこれやと目を回す
電池替え再びリズム取り戻し
もう一度腕まくりして出直そう

島根県 伊藤 寿美

酒はよし薫風偲ぶ北斗星
結局は独りで渡る終の橋
待合室にいつもの人が来ていない
立ち直る時に貰った平手打ち
無音無風煙まっすぐ立ち上がる

美作市 大石 あすなろ

大胆に鈍感力で生きている
キッチンに笑い袋が置いてある
脳回路未知を探してリフレッシユ
素朴さを愛しています国訛り
言い訳は気圧配置を読んでから

美作市 福原 悦子

百均を巡り好きな物を買う
はるかなる未来の孫を信じてる
マイペース晩学なりに重さあり
何気ない親切だから有難う
残像のあなたのお供して居ます

広島市 岸 本 清

凡人と悟ってからの身の軽さ
頷いて黙っているのも義理のうち
デパートに涼みに行つてエコ談議
老い二人猛犬注意のセキユリテイー
猛暑でもマネキンだけは秋纏う

竹原市 石原 淑子

シリア危機地球レベルで凝視する
さてさてさて生命線は切れたまま
萩尾花撫子摘んで母に上げ
満願の茶断ちお蔭と茶はのまぬ
再生紙夫へ恋文書いている

府中市 藤岡ヒデコ

あの猛暑なにはともあれのり越えた
秋風にふっともたげて来るツカレ
妹と小さい秋を食べに行く
運転は妹わたしは秋の中
難聴の兆ヒソヒソ話なり

宇都市 平田実男

邪魔になる時もあります血の絆
美人よりかわゆいほうが先に嫁ぎ
ソロバンを弾くと溝が深くなる
頭の低い人へ上手に使われる
絡った糸をほぐしてくれた酒

東かがわ市 川崎ひかり

物忘れ今日も夫婦のこぜり合い
がむしゃらに生きた昭和の足の跡
戦争は決して美化などしてならぬ
地を信じ生命信じて種を蒔く
美味しいと感じる量の試食品

松山市 古手川光

降る所は降るこれでもかこれでもか
九条がトラストジャン言うている
それなりに幸せですとカスミ草
買うか止めるか最後は論吉さんが決め
さわやかな秋晴ればくを浄化する

大洲市 中居善信

鬼灯が熟れてる妻が若返る
ハーモニカ遠い昭和を吹いている
放置農地よこれで政治が語れるか
農夫知る異常気象の草の伸び
諦めという逃げ道を神が呉れ

西予市 黒田茂代

ソーラーの威力今夏の燃料費
ほどほどを弁えぬこの頃の豪雨
思い出も影もゆらゆら秋立ちぬ
町起こしのコスモス町を埋め尽くす
すぐ暮れる秋は寂しいから嫌い

高知市 小川てるみ

ニコニコと笑う日もある箸二膳
地球には苦労ばかりをかけている
早場米競う農家のコンバイン
三合の米が毎日減る元氣
身綺麗に出かけることも惚け防止

高知県 小澤幸泉

招魂の涙かわかす秋の空
デジタルに代えて血圧変らない
老眼鏡かえても老後まだ見えす
マヒの手が踊るよさこい夏祭り
引き出物の皿をいまでも溜めている

唐津市 坂本 蜂 朗

子や孫に万葉の歌碑読んで見せ
さり気なく支える妻を見ない振り
コップ酒口喧しい妻の留守
妻の愚痴増えて聴力悪くなる
渋い顔しても滲み出る好好爺

唐津市 山口 高明

敦煌の遺跡を巡るラクダの背
海峡の霧笛むせぶか多喜二の忌
バンザイとお国のために死ねますか
胸の痕癒えぬおんなの深い秋
貌じゃ無い足に惚れたと夫が言う

熊本県 岩 切 康 子

突然に外食誘う愛ならん
ドクターの説明優しドック無事
葉鶏頭恩師の色紙もえてくる
移植して再起を願う畑の葱
ゴロゴロが怖くて訪問中止する

札幌市 小 沢 淳

銭湯に人間がいる真っぱだけ
ハンカチのプライド戦は一度だけ
友の前自慢話は切り出せぬ
真実をさぐる深層水を汲む
激動の時代昭和のエンペラー

札幌市 三 浦 強 一

積ん読を崩しています秋灯下
読書の秋去年挿んだ花菜
お洒落して老いほれなどと言わせない
涙腺が緩みっぱなし戦時秘話
行く先は完全介護終の宿

砂川市 大 橋 政 良

親指の号令横を向いている
蓮の葉にあぐらをかいた青蛙
手を振って入場式が美しい
この椅子に坐ってみたい貧乏神
物忘れ方向音痴かもしれぬ

黒石市 相 馬 一 花

消し炭で焼いたサンマは祖母の味
怪しげな電話に怒鳴る津軽弁
ニートから見れば哀れなサラリーマン
一日に五食も摂った腹時計
竜巻の怖さ知らない北の果て

平川市 小 寺 花 峯

聞く耳を持っていますか流れ星
泥んこの中から虹をたぐり寄せ
家庭菜園甘い風吹くナス・トマト
熱燗が人を呼んでる独り酒
雨の日は雨の色で咲く紫陽花

弘前市 稲見則彦

案山子ロード思わず笑う途中下車

友だちの輪がまた少し狭くなる

再起動させてもらえぬ二日酔い

じいじの自慢話は五百円

油断した窓を咎めるゲリラ雨

弘前市 岡本花匠

捨て切れぬ古着に感謝衣替え

饒舌の鴉は今朝も如才無い

落葉樹後生大事に秋迎え

晩秋の夫婦善哉見せつける

お内仏に匂花を添えて気が和み

弘前市 今愁女

熱中症耳通過だけ風は秋

いつの間に新種のりんご出まわって

竜巻という脅しの一つ多くなる

古米食べ子らには送る新米を

蟬しぐれ聞かずに過ぎた津軽夏

弘前市 須郷井蛙

いい土壤ほめてヒマワリよく聳え

いっだってこけしが語る平和論

庭の葱いつでも代打待っている

まだ死ねぬ泊るお宿の非常口

努力した風が笑いをつれて来る

弘前市 高橋洋子

お日様のリズムで暮らす従順さ

方言は心の寄る辺里帰り

過去捨てた女のネイルの白さかな

昭和の気骨継ぎ足し平成生きる老い

もくもくと入道雲の底力

弘前市 福士慕情

職退いて実印ケースから出ない

ゲリラ雨弱いところを狙い撃つ

今だから笑って言える手術痕

自分史に妻の介護は伏せておく

天国のガイドブックを探してる

青森県 松山芳生

持久走が得意なんです亀の意地

阿吽の呼吸でゲームを組み立てる

安らぎの窪みで生きている後期

偽名が闊歩するネオン街の貌

十指みな元気な朝のにぎりめし

さいたま市 星野育子

あの日から五輪カラーに塗り変る

東京は大丈夫だという目線

七年後の家族の齢を指折る

本屋も図書館も柳誌は隅っこ

向田作品で昭和懐かしむ

東京都 岸 野 あやめ

官僚のボス拘置所へ行くベント
コピー機は変換ミス正さない
寝転べば母の老後がよみがえる
七十年前の恋なら覚えてる
どうすればいいのかしらと娘に習う

東京都 まえで とよこ

日傘からけむりでそんな午後の街
アイスクリームひとときの避暑いすがある
カウンターのこやきをまつ人いきれ
大阪百貨店ここに幸あり冷やしあめ
病めるひとの声ひしひしと胸をうつ

横浜市 小 野 句多留

「東京」といった二文字に湧く波紋
上向きの景気に不感症になる
忘れものの氣になくなり呆け進む
水ばかり飲んで朝顔枯れ始め
五輪まで七年僕にチト長い

横浜市 菊 地 政 勝

大見得を切っても洩れる汚染水
歯切れよい嘘も本当らしくなる
スポーツが孫に正座を教えこむ
自分史に残せるものは何もない
氣が利いたジョーク空気を入れ替える

富山市 島 ひかる

京ことはジョークやんわり効いてくる
介護する人の明るさ何だろう
婚活へ明るい人を選び直す
改めて手相見る目が怖くなる
自己満足だけど他人の厳しい目

可児市 坂 山 まみ子

生きてても乗れるだろうかりニアカー
最期の日物知りだとして解らない
氣に入らぬ時はオギャアと叫びたい
オリンピックきつと儲かる人がいる
ゴーヤーの美味さわければ大人かも

犬山市 関 本 かつ子

韓ドラの男女未だに泣いている
ナイトーの後が私のテレビ覧
お返しに梅干だったお葬式
携帯を持たない友の大らかさ
おばさんのおしゃべり聞き役がない

愛知県 早 川 遯 行

二世帯の夢も適わず二人きり
降れば傘畳めば杖の散歩道
一つだけ余ったケーキどうしよう
かけ蕎麦が好きだったぶりの唐辛子
自転車をしつと見ている三輪車

川柳塔の

川柳讃歌

(107)

木津川 計

切れそうな糸に吊り下げられている

居 谷 真理子

「漫才育ての親」秋田実の没後、引出しに一首が遺されていた。「返り見て浮世の橋を眺むればさても危うく渡り来しかな」。東大で左翼の戦列に加わり、転向して漫才を新興翼賛漫才に筆を染め、戦後の笑いをリードした苦渋の昭和知識人は、しかし栄光につつまれたのである。それも危うい旅路の果て。人はみな一筋の「蜘蛛の糸」にすがった健陀多ではないのか。後に続いた何千もの罪人の中の女の一人が私だと真理子さんは言う。

天に星くよくよ生きるのは止せう

大久保 のん子

ある日、桂米朝さんがこんなマクラを振った。「天に星地にお手は何お手は何」。縁台将棋のみみつきさ。極大と極小の対比である。国内外の賞に輝いた映画「おくりびと」で採用面接に行った小林大悟が「月給は？」と

問うと社長は5本の指を見せたのだ。「5万円ですか?」「まさか、50だよ」「そんなにいただけるのですか?」。この質問の極小に僕の胸は詰まり、50万円を極大に思った大悟にのん子さんは天に星、どーんといけー、と。

新鮮ですよと新聞紙にくるみ

岩 本 笑子

「もし、ご新造さんえ、おかみさんえ：お富さんえ：イヤサお富、久し振りだなあ」の「ご新造さんえ」で切られ与三の台詞は決まった。新しいものは耳に留まり、目に付いたから藤沢桓夫の『新雪』は名実共に注目され、藤村の『新生』は告白文学の先駆けになった。

新しいものには値打ちがあつたので「三日前の古新聞」を誰も買わず、包み紙に役立てたのだ。いまま活用され、産地持ち運びの朝市は新鮮故に新聞にくるむと笑子さんは言う。

ジョーカーを持つと性格悪くなる

高 瀬 霜 石

大蒜(ニンニク)に辣韭(ラッキョウ)は勝てず、山葵(ワサビ)は唐辛子に負ける。どうして日本が韓国を凌駕できよう。同様に、花札の日本が切り札のジョーカーを持つトラップの国々に対抗し得るのか。

この頃、六歳になった孫娘が約束事に駆け引きをするようになったのは、そうか、トラ

ンプ遊びを始めたせいだ。人間の性格を悪くさせる根源を霜石さんは暴いたのだ。

同窓会ちよぼちよぼに生き笑い合う

今 井 万紗子

中学の同窓会に外務省の高官がやってきた。「○○くん」と呼ばれた彼は「おれを君付けで呼ぶのか」と言い放って座を凍らせた。どなたの句か「友達が皆貧乏で有り難い」どころへいけ好かん奴に來られては岩井三窓の気持ちわかる。「出世しよつていやらしい声となり」。「人間みなちよぼちよぼや」は小田実の言葉だが、万紗子さんの同窓会は楽しかろう。いやらしい声の人間がいない。

つつじ炎え会いたい人は左きき

岸 桂 子

判じ物のような句に惹かれた。なぜつつじが炎え、会いたい彼は左ききなのか。察するに桂子さんは右ききなのである。

麻丘めぐみがヒット曲「わたしの彼は左きき」で、「あなたにあわせてみたいけど／わたしは右ききすれちがい」と嘆いたように桂子さんにも次の回文通りの場面がない。

「夜ゆもじ包む湯上り潮の香たゆとうゆうゆうと豊かのお尻が歩むつつじ燃ゆるよ」。回文作家・土屋耕一の傑作。桂子さんにもいつか。

(「上方芸能」誌発行人)

西尾 栞句抄

(定本『西尾栞句集』平成八年発刊)

骸骨の講義骸骨横を向き

差し押さえ金庫の上の鏡餅

大体どこで落したとは無理な訊ねよう

君づけで社長を訪えば秘書あわて

旅 枕

人恋し人煩わし波の音

イメージの踊り子も見ず伊豆の旅

盃に島の唄ありひとり旅

宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来

河鹿きく妻も同んなじ宿浴衣

白樺の道 団体で行くあほらしさ

絵葉書は水量のあった頃の滝

スーツケース僕が持つうちが持つ

茶碗一つ置いて清水店となり

きよみず

河童橋写真を撮す順があり

大阪弁で信濃の空の碧さほめ

日本ライン盃洗にして酌み交わし

一步出ずれば吾れ旅人となる心

プラットに佇った姿も旅のもの

旅枕雨にしあれば雨の詩

香具山を指さす先を蝶が舞い

草の名でもめて吟行面白し

新川柳鑑賞 (21)

麻生 路郎

夜の女あわれまれるが腑におちず

(一 瓢)

何んとか女史が赤線地帯を訪ねて、あんな方は女性の一生を台なしにしている。ボスのいけにえになっていて、実に気の毒だ。わたし達はあなた方をそれ等の吸血漢から救い出すために、懸命の努力をしているのであると云うと、夜の女にして見ると、なぜわたし達はあんな人達からあわれまなければならないのであろう。なるほどわたし達はこんな商売こそしているが、あんな達にこれっぽかりもお世話にはなっていないのだと云うのである。

売春法よ何処へ行くと云いたい句である。

飲んじやいや嬉しいことを言つて呉れ

(春 日)

愛人か新妻か。どちらでもないいだらう。「そんなに飲んじや、ダメじゃないの」と云ったって、飲まなくては行られない時代がやがて来るのである。そう考えると若い時代や甘い時代を、うかうかと過(こ)してはなら

ない。おだてる訳ではないが出来るだけ甘い味を噛みしめておく必要がある。若さがほとばしつてくるような句だ。

馬鹿にした挨拶今日も呑んでるの

(娛句楽)

挨拶もいいが「今日も呑んでるの」とは何んだ。ワシの金でワシが呑んでいるのだ。兎や角云うてもらいたくないと云うのが酒呑みの云いぐさであるが「今日も呑んでるの」と云う女の言葉には「だからいつも借金でうだつがあげられないんじゃないの」という軽侮の声がふくまれているのである。女は飲み屋の女であらう。話し言葉の句の面白さである。

男みな阿呆に見えて売れ残り

(阿 茶)

見合しても、しばらくつきあつてからでないと結婚する気にならないのが、今の世の女である。さて、つきあつて見ると、どの男もどの男も欠点だらけ、こんな阿呆と一生つれそうなんて、つまらないわと云つてことわつてしまふ。余所目にあの男ならと思う男にはもう妻子がある。皮肉な句である。

巖文な男が泣けば喜劇めく

(淡 舟)

弱虫が泣くのに不思議はないが、誰れが見ても弱虫に見えない巖文な男がポロポロ

眼から涙をこぼして泣いているのはあまりみつともいいものではない。それこそホントの弱虫なのであるが、からだガツシリしているだけに喜劇めいてうけとれるというのである。たしかにうなずける句である。

赤着てる方がどうやら男らし

(阿 茶)

ジツと見てみると、今の世の中ぐらい、変天古な世の中はないとも云えるし、これでもいいんだとも云える。男だから赤いものを身につけてはいけないという規則もないし、赤は絶対に男に似合わないと言ふ理窟もなからうと云うものだ。ところがこの句を読むと非常にユーモラスに感じ、尤もだと云いなくなるのも面白い。今の若い人達は苦もなく風習を破るし、アバンはいくらに風習に囚われると云う差が、斯う云う方法で表われるものと見える。

男手の針にはながない糸

(法泉子)

今の学童は男の子でも学校で運針を習うが、従前はよくよくの場合でない針は持たなかつたものである。この句もそうした男を詠んだものに違いない。男と云うものは針に糸を通すと云うようなことは至つて面倒くさがるものであるから、長い長い糸をつけたと云うのである。男手と云うみじめな生活を巧みに描写していると思う。

自選集

小島蘭幸

元氣いただくゴッホの絵ゴッホの眼
アナログ派で結構はがき五枚書く
句碑巡り古書店巡りして秋に
ひとつになることの美しさと思う
いいかげんもぶつきらばうも好きと言う

奥田みつ子

ゼロいくつ並べてみてもゼロはゼロ
雲と遊び風と語った恋いずこ
幼稚園心が和む絵が並ぶ
横道は知らず一途な道を行く
月も孤独仰ぐ私もただ独り

河井庸佑

心配を掛けぬ程度に二伸書く
板挟みひとり苦しむ役回り
簡単に乘れぬ相談持ち掛ける
義理欠いて敷居だんだん高くなる
会議室火種を埋めたまま妥協

川上大輪

筆順が少し違っただけのことに
にぎり飯一つも不味いものはない
ピカソには勝てないどんな美人でも
冗談のひとつ本気になつてくる
まっすぐに並ぶと音符歌わない

小西雄々

貧しかった戦後を思い新茶飲む
戦争に征った記念に持つ軍靴
うちの嫁と隣の嫁を比べ見る
若い頃読んだ聖書が書架にある
男一匹五欲わすれず世を泳ぐ

斉藤 昴

野苺がぼつんと熟れる無人駅
思い出がしっとり眠るダムの底
花好きならばあさんがいる街の角
邪心ひとつつきり抜ける空の青
月見草に逢いたくなくて遠まわり

塩満 敏

オスブレイ日本の空にいりません
新しい日本の夜明けもうすぐだ
生きのびて新日本を見てみたい
弟がお先にゴメンと極楽へ

新家完司

七十歳やつと地上に出た蟬だ
灰色のスーツで驢馬の仲間入り
ボケ防止サブリは酒と悪口と
居酒屋であらかた消える我が歳費
教会とお寺と鐘の音が違う

恒松町紅

性格がさせる時間に几帳面
冗談は笑ってすませるまでのこと
大正の暦を抱いてまだ元氣
大正は軍靴の音も夢の中
大正のゲートル巻いた足も痩せ

津守柳伸

旅友と不老長寿を誓い合う
類は友呼んで底い合う他人
蟬しぐれ黒いトンボと三朝の湯
波打った稲穂の悲鳴高速道
働いた汗報酬に無頓着

遠山可住

無罪放免今日定年の床柱
還暦へ洩うまつせと勧められ
年金がゆつくり腰を落ちつけず
後期高齢高貴光輝とは言わぬ
草を引く老婆がひとり死んで過疎

都倉求芽

ファックスで送ってきたのはまた計報
逝つてなおご破算出来ぬ絆あり
通過点徐々にずらして送る日々
ご都合主義四捨五入して過す日々
湯の温度湯槽に秋がしのび寄る

土橋螢

国を愛するこの青空がある限り
何もかも終った後の月涼し
安穩の世に魂を置き忘れ
子や孫に教えてもらう事はかり
寝たきりにならないようにどっこいしょ

西出楓楽

七十五もう変化球など投げぬ
茶が旨い長生きしたらどないしよう
丁寧な仮面洗って寝るとする
癒えたはずの傷また疼く秋立つ日
ふるさとの話題肴に酌み交わす

仁部四郎

負け方がよくて相手に礼を言い
なるほどの粗品電話で礼を言い
赤ペラで三番までも礼を言い
秋空へみんなうまいと礼を言い
誕生日また来年と礼を言い

林 瑞枝

太陽へ両の手ひらき水中花
菌車の一つ立派に耐え生きる
とっておきのユーモア借りてする寸志
恩を知る鶴は秘かに機を織る
サイクリングの笑顔まだまだ若い古稀

前 たもつ

自分にまだ凄いと言ったことがない
大阪城野良猫群れる住みごこち
振り返ることまた一つ増え秋の風
どこか違うそう言う人にある魅力
一行詩聖書に学ぶこと多し

政 岡 未延子

差し迫る老いへ汚れをおとす今
節目節目を祭りと思う日々になり
見せないように男も涙ながすとき
凜とした砂像も疲れたためている
それなりに秋の涙も理由がある

三 宅 保 州

皿を外してヒトになった河童
畜生になったのですか人で無し
人間不信そんな不幸なことはない
人類は丸腰だったはずなのに
人間の弱さ強さよ避難民

宮 西 弥 生

暴くほどライバル大きく見えるだけ
ときめきはまわりに傷をつけぬよう
少しだけ泣いて猛暑を見送ろう
蜚飛ぶ木立ちの中に住む一流

花のおしゃべり

八 木 千 代

甘いよ バラさん棘を着なけりや笑えない
サクラさんこそひとりで散れないくせに
それならツバキ ためらいなんてないもんね
そうかなあ落ちて咲くのは未練でしょ
コスモスに決まり主張もあつて無防備で

両 川 洋 々

九条の血を薄めると戦争だ
ロスタイムなどない企業戦士の死
老々介護妻もリタイアしたかろう
北の拉致理性がマヒをしたらしい
人間を脇役にするロボットよ

板 尾 岳 人

木に登りそこったのはテロリスト
糞くらえ男になって秋の愛
ちよつとだけ男に預け火に迷い
唇に溺れてタイタニックの死
名月やピロシキ供え奉る（九月九日）



青谷小学校 川柳クラブ

「ようこそ・秋」



鳥取の秋には梨が実ります

秋の味 青谷の梨は日本一

食べるなら青谷の梨は文句なし

青谷町ようこそその声シンボルだ

梨もらう家がうもれるおすそわけ

本読むといろんな世界に入れるよ

朝読は時間いっぱい楽しいな

ばんで飯そのあと必ず梨が出る

(六年 相見 秀仁)

(六年 黄金 咲希)

(五年 田中 そら)

(五年 長谷川 奈緒)

(五年 村上 舞)

(五年 廣澤 真凜)

(五年 谷尻 つかさ)

(四年 吉村 茉佑)

第32回 鳥取県没句川柳供養大会

とき 12月15日(日) 午前9時開場・受付

ところ 新日本海新聞本社ビル 5階大ホール

JR鳥取駅南(駅裏)徒歩3分

会費 2000円(昼食・作品集呈)

精進落し 3000円(懇親会)

兼題 「敗者復活吟」 久保田千代 選

(この一年間で没になった句から2句吐)

「横着」 蔀 帆子 選

「打ち止め」 鈴木 かこ 選

「亡者」 竹山千賀子 選

「甘い汁」 春木圭一郎 選

「現役」 池澤 大鯨 選

「オーナー」 斉尾くにこ 選

「さっぱり」 谷口回春子 選

席題なし 各題とも2句吐

投句締切 11時厳守

欠席投句 1000円(切手可・作品集呈・11月末締切)

投句先 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3

中村金祥 宛 電話 0857-59-1056

主催 川柳ふうもん吟社

温故知新

『谷垣史好句集』より

席譲った方が逃げるように立ち

その言葉教えた人は死んだんだよ鸚鵡

制服を着て気味悪い大学生

マンネリを断たん木刀素振りする

終電の誰かに絡みたい気分

朝顔が咲いてるうちのひと仕事

女みな小さなお店出したがり

ホモッ気があるのかやわらかな握手

おしつまりましてと長い立ち話

閏年一日さみしい日がふえる

この家は犬も虚勢をはってるよ

夜桜は妻に言えないひとと行き

己に腹を立てながら観るボルノ

河馬悠然と四次元の顔である

流行が変ったんよとねだられる

バナナはおぼる口紅生々し

マネキンを脱がすに何故か羞恥心

革命に縁なき顔よ満員車

水煙砂

川上大輪選

紀の川市 楠原富香

堪忍袋少しゆるめる術を知る

栄光の過去を引きずるコップ酒

簡単に済ませて浅くなる絆

消しゴムが過去の汚れを引き受ける

健康を薬に託し生きている

オクターブ上げて命のラブコール

河内長野市 辻村ヒロ

孫達の会話の壁が高くなる

幼子の涙乾かす母の胸

楽しいな会話を耳が追い掛ける

朝ドラに合わせる食事我が家流

古稀ですがかぼちゃの馬車を待つてます

意に反しやんちゃになって行く私

神戸市 玄番美恵子

流れにも逆らってみる稚魚の群れ

臨月に元気な足が蹴ってくる

そこそこの出来栄え自分褒めておく

無骨だが飲めば陽気な芸達者

うっかりの言葉引き摺る自己嫌悪

丸文字も癖字も嬉し子の便り

岡山市 藤成操江

行くいかぬ迷い続けている時計

相槌は遠慮同罪にはならぬ

意地通すほんとは欲しい縄梯子

五七五私の友として歩く

結果論黙って熱い茶を入れる

みやげより友の笑顔を待っている

岡山市 工藤千代子

散る覚悟できたか薔薇が咲いている

色褪せた写真が知っている炎

お悩みは解るが軽い丸い文字

お返事は後ほど飴が溶けてから

末席の座り心地は手放せぬ

眠らない枕と昔話など

寝屋川市 岡 本 勲

高級魚ちらと眺めて鯖を買う
嫌いにはならぬがこわくなつた妻

一進一退ついてくるなよ影法師

良薬と妻の一言にがすぎる

かぶりつき西瓜に入菌抜きとられ

我が家ではやっぱり俺は無駄らしい

富田林市 中 村 恵

いくつもの火種同時に燃え上がる

限界を知るまでジャンプ続けてる

知らぬとは言えない見栄が邪魔をして

ぼろり嘘壁の背広が暴き出す

想像が膨らみすぎた恋ごころ

間延びした二人に隙間風が吹く

竹原市 國 實 力

八日ほどだから元気な蟬だろう

正直に頼れるお方諭吉さま

鎌や鍬錆びても心まだ光る

幸せな錯覚中流と信じ

ベッドからまだ落ちてない惚けてない

口答えやめるおかずが減るだけだ

鳥取県 大 塚 美代子

少年のポツケは夢にあふれてる

夢一つ抱いて飛び乗る故郷の駅

二度寝する夢のつづきが見たいから

アルバムを開き夢見る旅の空
一仕事終えて一気にコップ酒
不意に來た客にもてなす虫の声

瀬戸内市 東 楨 ますみ

よくしゃべるおばちゃん達のバーコード

チンドン屋が通る霊柩車も通る

ほめ言葉ばかりを拾う右の耳

雨だれがボタリボタリと愚痴になる

曲折があつて逃げ方うまくなる

程々を知つた夫婦の車間距離

堺市 羽田野 洋 介

今は昔気楽な余生夢見たが

耳寄りな話はきつと裏がある

的確なヒントがひとつあればいい

うっかりも度重なると心配だ

ハーフタイムここで油断が生じたか

ときどきは手抜きするのも生きる道

山口市 中 前 幸 子

群れて咲く淋しがりやの彼岸花

石蹴りしませんかと秋風に誘われる

ふっと吐くため息秋の深まりか

虹の彼方でわたしの影が遊んでいる

人魚姫からお使いが来る秋の海

廃船の影秋風に傾いた

大阪市 宇都 満知子

休日はルーズに過ごし生きかえる
嬉しくも悲しくもすぐ涙ぐむ
連合いとガイドブックで旅を練る
ママの愛駄駄をこねては確かめる
秋風にさあウオーキング再開だ

大阪市 高杉 力

坂道の自転車健康バロメータ
手抜きかも知れぬティッシュを三つくれ
健康の本が増えてく不健康
おふくろの味を求めてカウンター
相席が縁でいつしか飲み仲間

大阪市 栃尾 奏子

片思い僕は孤独なオルゴール
逆剥けの痛みと思うところあり
虎の爪ブチンと女切つてのけ
床の間に正座がひとつ置いてある
木枯らしに焼き芋ひとつ所望する

大阪市 柴本 ばつは

まだ丸いポスト立ってる母の里
不義理した実家の柿も実がたわわ
小さな秋見つけた落葉踏みながら
やっぱりね日本はいいな秋がきた
美味しくて犬もわたしも太り気味

大阪市 藤田 武人

負けること教え厳しさに教え
針穴の向こうに見えるパラダイス
出っ腹の医者にメタボと指摘され
人影が見えたか金魚口を開け
床を背に誰も座ろうとはしない

堺市 梅木 澄空

脅えてる熱中症と電気代
肝試し脅えぬ彼女見て脅え
写メールで四十年目のご対面
仕方なく継いだ家業が生き甲斐に
老犬と同じ病名告げられる

堺市 高田 智子

雲上に富士も穂高も肩並べ
月曜日湖上の船も欠伸する
夫作煮もの酢のもの酒の味
今日もまたゴーヤの料理考える
電子本奥に底なし沼がある

堺市 山崎 早苗

気がつけば少し離して読んでいる
少しずつ記憶の中身変えていく
多すぎて何のメモだかわからない
熱すぎる応援団を冷やす雨
恥じらいは遠い昔に置いてきた

池田市 上山 堅 坊

愚痴みんな拾ってくれる縄のれん

百倍は上げて欲しいな預金利子

節約を二人で奏で50年

傷口を撫でにくる人お断わり

ホイホイと句会を梯子する至福

泉大津市 助川 和美

間違ひも謝る勇氣あればいい

美術館眼鏡掛けたり外したり

めでたくも喪中ハガキに百二歳

沈む夕日少し泣いてもいいですか

儲かる話どうして人に勧めるの

貝塚市 吉道 あかね

妥協すれば老いがまっすぐやって来た

母と私の共通点を数えてる

母の血が多いか母によく似てる

新米がうまい長生きしましようね

半切りにされてカボチャが笑い出す

河内長野市 大島 友子

膝辺りイエローカードが見え隠れ

過ぎた日の悲しみバネに前を見る

振り向かぬ後ろ姿に意地がある

賑やかしでいつも重宝されている

貴方色に染まるつもりが染め上げた

岸和田市 中岡 香代

伸びきった輪ゴムにもある自己主張

法螺吹きに他人の法螺がすぐ分かり

ひたすらに働く蟻で悔いがない

生真面の影とくよくよ二分する

法律に疎くて困る遺言書

高槻市 田中 由美子

美を求めサブリメントのお取り寄せ

結婚の誓詞を妻がすぐ見せる

テレビから今日も習った悪の道

補助金に乗せられただけ無駄遣い

茶を替えて揉める話を丸くする

高槻市 原 洋志

始まりはマッকারサーのサングラス

端折れたページここまで父がいた

立ち食いそば男ばかりの失語症

話聞く一緒に雨に濡れてから

キープしたボトル男の時間切れ

豊中市 石橋 優明

力こぶ入れてもマリモ丸いまま

ふと気付くマリモえくぼが愛らしい

傾いた郵便受けから見た世界

水槽のむこうに見える人の群れ

雑踏にひからびているのがね虫

豊中市 源田啓生

日々好日酷暑厳冬耐えながら
乾杯のときだけ出てる空元氣
食欲に物欲少し未だ死なん
階段に一声掛けて昇る杖
おら達の出番が来たと虫の声

松原市 市川雄太

秋の日々だけど暑さは夏のまま
苛立つて口も心も閉めている
一人きりの旅行も実に良いものだ
のんびりと時間が過ぎる日曜日
今できる心を込めたおもてなし

箕面市 寺井柳童

銀傘に響く青春メッセージ
一球入魂紫紺の旗へまた一步
「また来いよ」敗者に惜しめない拍手
五黄の寅絶対引かぬ山の神
見納めに伊勢神宮へ二人連れ

八尾市 赤木妙子

カウントダウン私もしたイブシロン
照る日曇る日食べて寝てたらもう傘寿
払っても老いが足から這い上る
肩ゆすりさびしさ少し振り落す
母に似て背中丸い影法師

八尾市 前田紀雄

枝豆と言えばビールが欲しくなる
御迎えとオリンピックと何方が早い
憲法がだんだんきな臭く進む
真ん中でブレない妻が家仕切る
読書の秋人間研ぐ五七五

大阪府 神野千恵子

ためらい傷一杯持っている平和
しっかりと底辺叩く物価高
駆け込んだ終電にある連帯感
体温と同じ空気が纏いつく
自画自讃何処の国にもいるトップ

神戸市 輿水弘

この暑さすべてそこそこ済ませます
出かけよう萎える気持を跳ね上げる
流れ雲今日の悩みは今日捨てる
若ぶって二段上がりで足がつり
糠床に想い引き継ぐ嫁の意地

神戸市 山根弘子

疑問符を捨てて八十路の坂を越え
九十九の父の泳ぎに血が跳ねる
そこそこのジョークでとかす蟬り
子の未来大樹になれと亡父の声
友が来て夫婦喧嘩もそこそこに

尼崎市 小池 幸子

下校時児童にもらうコンニチワ
玄関ドア閉めたら気付く忘れもの
散歩道目だかに会える遠回り
五七五楽しく余生指を折る
見栄を捨て手押し車で出かけます

川西市 日野岡 和之

鬼がいる仏もいます介護の日
豪雨とも慈雨とも呼ばれ温暖化
あんよさきおててはあとよ消費税
駄菓子食べ昭和を拾う夏祭り
無理に無理重ねた老いの若づくり

篠山市 石田 久子

今日もまた歩いていきます明日のため
うそでいい褒めて下さる人が好き
俄か雨傘を持つ人もたぬ人
杖をつきゆっくり歩く老いの坂
これだけは言うなとネジを巻いたのに

篠山市 北澤 稠民

もう少し歩いてみたい過去の道
まだ少し無理のきくのは酒の量
そのへんで愚痴は仏に預けとき
もう一度愛だ恋だと咲きたいね
一日の疲れが酒に上手く溶け

篠山市 藤井 美智子

百へ来てよう思わんと母の弁
がん検診今年もまずはマル届く
前評判良すぎ本番あてはずれ
ひとり身の肩の荷膝へ下りて来た
水栓の調節出来ぬ自然界

三田市 多田 雅尚

守備固めしたはずなのにエラー負け
汚染から守る大事な子の未来
視聴率上げたセリフが倍返し
姿見を見ては気合を入れ直す
親に感謝整形せずに済んだ顔

宝塚市 丸山 孔一

そのうちに北海道で熱帯魚
好きな物食べろは医者の絶縁状
肉体は有限精神は無限
擬音まで入れてトイレの押ボタン
今妻に寝込まれたならどうしよう

奈良市 前田 弘恵

休息日パジャマのままで日が暮れる
今日も無事暮れたと月に一人言
ドラマでの電話のベルに惑わされ
旅に出て体内時計狂わせる
手抜きせず努力してます独り食

和歌山市 磯部 義雄

死んだふりしたまま終るタイガース

風の向き変わりのよいよ来る出番

三振の記録作って負け投手

離婚危機回避伝える娘の涙

福島を積み残した五輪劇

和歌山市 北原 昭枝

時々空っぽにする胸の内

ピリオドへ深くゆれてる水中花

辛抱を覚えてくれた母の背

他人ではないから腹が立つてくる

里神楽柿の葉ずしの旨いころ

鳥取市 高原 かおる

母が来たのか片づいた部屋になる

一輪の花に茶筌の生きる室

ひらくまで分からなかった花の色

散歩する蚊遣りをつけた万歩計

暑さには勝てぬ野菜もぐつたりと

鳥取市 山下 凱柳

兄弟でこうも違うか出来不出来

小言一言言ったら妻は倍返し

恨みたい親直伝のDNA

アベノミクスオリンピックが追い風か

大丈夫なのか公約汚染処理

倉吉市 岡崎 美知江

本当の事は裏面に書いておく

叩かれた肩リストラと気がついた

好きだよとしじみ次次口あける

ハヒフヘホ今日の笑いはハの音で

年なのかこの頃心弾まない

倉吉市 中村 毅

褒めるにも程があります披露宴

原発でなく九条を輸出せよ

避暑を兼ね続きを読みに行く本屋

賽銭を弾む神は知らん顔

胃袋は賞味期限を知っている

米子市 生田 和之

年金の予備費葬祭だけに消え

中古車を買って後期も乗り切る気

決戦のゲームにトイレ近くなる

朝は水昼はポカリだ夜は酒

生きているお陰でかかる金と手間

米子市 野川 宣子

目指すもの温度差あつて手が組めぬ

日本が奇妙な風に煽られる

皆ファイト国は当てにはならぬから

病み上がりファイトファイトは禁句なり

遅出しのじゃんけん明暗を分ける

米子市 見山温子

雲南市 菅田かつ子

続く猛暑何をする気もおこらない

打ち水に少し和らぐ夕涼み

言い過ぎに夕食少々手間をかけ

厨房も休みがほしい冷や奴

山菜の味施設の母に問うている

米子市 森脇麗

こどもの目いつも向いてる親の背な

会釈して深いお辞儀を返される

好きだから憎まれ口も言うてみる

胸に棲む鬼も衰え妥協する

円満解決とは言えぬ蟠り

米子市 湯浅俊久

B面の演歌が僕のおはこです

玄関が顔をしかめる靴の泥

登校のチャンスが来たぞ負試合

気に入らぬ返事のかじる鉛の音

また迷うたぶん前世と一緒だな

松江市 藤井寿代

ふる里へ続く道なら忘れない

曖昧な男を諭す芋焼酎

雑草に過保護な嫉諭される

負けて勝つ頑固な石が緩み出す

残飯をつつくカラスに諭される

気がつけば側で鳴いてるキリギリス

こんな日は楽しい話待っている

やさしさが欲しくてちよっと拗ねてみる

真ん中で笑い忘れている夫

笑うのが薬ですよと妻は言い

岡山市 永見心咲

シナリオは無くてもドラマの世を渡る

母の写真フタ問わず語りがふえてくる

衣食住たりて大事な落し物

帰るまで案じてくれる人が居る

弁解を聞かされている耳は留守

岡山市 池田たか子

食前酒などと酒だけ飲んで寝る

つゆ草の真青にまなこ奪われる

友からのすす虫涼のおすそわけ

花メダカすず虫育て親になる

おさんどんに飽いて人形にもなれず

岡山市 田中恵

甲斐もなくみんな忘れる一夜漬

イメチェンをしたいと思う昼の月

手作りは下手くそなりの味がある

ふるさとの訛飛び出す紺緋

叱られに行くか戻るか風の中

宇部市 高山 清子

香南市 桑名 孝雄

寝たような寝てない様な熱帯夜
それぞれに匙加減ありお付き合ひ
良い事をするだけなのに要る勇氣
天下り死語にならない永田町
いやな家事怠け猛暑のせいにする

香川県 田口 彦六

万華鏡ベンガル虎が隠れたな
悲の海は浜防風の咲くころか
家族にも修正液が必要だ
古稀にして伊勢神宮をまだ知らず
炭焼きの星の話は長くなる

今治市 渡邊 伊津志

ひとことが或る日くると裏返る
迂闊にも鬼に返事をしてしまふ
正義だと決める心にある驕り
氣遣いが過ぎてロマンが消えてゆく
腰の低い男が心覗き込む

大洲市 花岡 順子

たつぷりの欲を詰め込む皮下脂肪
安心を半分貰う保険金
ポイントを溜める確かに欲だらう
圧力が子会社の首絞めに来る
躓いたところから欲が滑り落ち

秋深しさあこれからをどう生きる
空元氣いつまで続くわけでなし
人生論なんと浅はかだったのか
酒だけが古今東西よき伴侶
長老と呼ぶなご隠居なら許す

北九州市 小松 紀子

私ってお色気ないの食いけだけ
トホホッ病氣の話で盛り上り
生きがいはボランティア句を作ること
羽化させたコオロギ夜をなごませる
今ハワイ友の散骨海の上

唐津市 北村 松風

禅寺の襖絵ひと日見て飽かず
吾になき泉もつ人憧れる
天国へ持って行きます後遺症
タクシーは最後に降りるひと払い
隠し湯の効能猿も知っていた

佐賀市 真島 久美子

暇な振りしている向日葵の黄色
ヒマワリの存在感に負けている
太陽になれずヒマワリにもなれず
好感度上げよう向日葵を抱いて
ひまわりは笑っていると限らない

弘前市 肥 後 和香子

マクワウリ小踊りしたくなる響き

白黒に替えた日常よもぎ餅

下取りに間に合いますか 男

そつとそつと心の添え木はずします

水澄んで今日もたくさんさんのありがとう

塩竈市 木 田 比呂朗

フルムーン本とパンフが増えただけ

ハンガーの背広も何か言いたげに

家計簿を真顔にさせる消費税

路線バス値上げの秋を知らんぷり

がんばるか東京五輪七年後

横浜市 巖 田 かず枝

先の事考えないで生きて行く

土壇場で助けてくれる神がいる

食いしん坊食事療法どうしよう

雷と花火恐がる柴という

留守番の夫トマトに冷や奴

横浜市 川 島 良 子

秋の虫キミも寂しく泣いている

フリーという時間を大切に生きる

ピカピカの位牌貴方はもう居ない

第二章ドラマはすでに動き出す

盛り付けもたまには凝ってひとり膳

佐渡市 高 野 不 二

十年の寿命を買った大仕事(ベースメーカー手術)

心臓にエンジンつけて元気です

口だけは達者一級障害者

三本の管ぶら下げて行くトイレ

看護師と話が合わぬまま帰り

富山市 有 澤 嘉 晃

捨て置かれ意地で芽を出す鉢の花

お見舞いに顔は見せない思いやり

病院前過ぎて乗客空になる

原発を甘く見ていた関係者

呆けても忘れないのが年金日

岐阜市 平 野 あずま

新鮮なニュース地球は回ってる

恋人の時もあつたな老い二人

満点でないからお互い救われる

墓地手入れ来世も共に棲む覚悟

父親の拳の痛みなつかしい

豊橋市 藤 田 千 休

冗談が路傍の石に通じない

核事故の国が原発セール中

結論を先に持ちこす妥協案

天高くベルトの穴が耐えている

聞く耳にシャッター下ろす妻の愚痴

物忘れを笑い話に出来ぬ年齢

京都市 清水英旺

すみません一言いえば済むものを
隣のピアノ早く上手になつてくれ
疑えばきりなしだから疑わず

長岡京市 日置みどり

旅終わり楽しかったな疲れたな

消費税デフレインフレみな不安

賞味期限気にかかるほどやわでない

人生がふたつあったらいいのに

大阪市 浅井公平

川柳へ益々湧いてきた意欲

飲んで食べ眠れりや他の欲は無い

よくもまあ相手が読めず八十路まで

僅かなのそない気遣い困ります

大阪市 内田志津子

過去の事許したはずが愚痴に出る

満天の星空愛でて仮面脱ぐ

グチ文句言わぬと決めていい調子

カーナビと知らない街を旅します

大阪市 梅里南天

風立ちぬ少年日で夏が過ぎ

半年も過ぎてだれかの死に気づき

髪染めて欧米人になりたがり

津波図にうちには来ぬと安心し

廃線の夏草何か語りかけ

蟋蟀の途方にくれた昼の貌

生涯を余白残さず締め括り

熱中症防いだだけの夏が去り

大阪市 太田としお

命の重さ説いても自死は無くならぬ

顔の皺過去の苦勞を語り出す

贅沢な大きな家に猫二匹

相続の話に乗ると葬式屋

大阪市 平井露芳

生命が大事節電二の次や

汚染水うまくかわして五輪決め

賽銭の論吉に神も上機嫌

大台にのつた言うても年なんば

大阪市 前川善之

柔道界光り出したぜ星三つ

雨量計目盛驚く雨の量

温暖下人も果実も甘くなる

歩いて見て世間の風の暖かさ

大阪市 松田聰

年重ね知らないことが増えてくる

頑張れと言うだけの人無責任

背中から自信あふれた父だった

嫌なこと忘れなさいと言われても

大阪市 吉田 知之

笑顔もらい笑顔返せば知らぬ人
混んでも車内放送ちゃんと聞く
贈り物経費と言われ苦笑い

ひいじいちゃんと呼ばれて名前でてこない

堺市 近藤 治子

和の文化メンタル抜きで語れない

秋の風感じて今朝はやる気出る

平凡のなかに喜び今日は丸

最後まで役にたちたい健やかで

堺市 増田 わこう

サブリメントいうほど効けば医者いらぬ

老木も多くの技で支えられ

八十路越し癌細胞とせめぎ合い

認知症霊験あらたか五七五

堺市 大和 峯二

古希真近これから開く第二幕

原発の怖さわかって売る怖さ

地位名誉書きもなく元氣だけ

夢希望中途半端で死ぬません

貝塚市 石田 ひろ子

コスモスの水遣りにゆく無人駅

炎天を涼しそに売るわらび餅

節電と避暑兼ねて行くカラオケに

いわし雲恥かしそうに秋を告げ

河内長野市 藤塚 克三

都合良く聞いてた耳が今遠い
貧乏性を血液型のせいにする
人助け苦勞の割に報われず

馴れた漢字楷書にすると書き辛い

河内長野市 穂口 正子

無言でも心地良き有り夫婦旅

時時は振り向き奴を威嚇する

神様のヒントは少し難解だ

神様の新居訪ねて伊勢出雲

河内長野市 渡邊 修

悔しくて洗って落ちぬ肌の染み

怪力の把瑠都も膝でふん張れず

招待者バラのサイズに不満顔

贈答品箱と値段に時間掛け

高槻市 鳥居 宏

天高く下腹ばかり肥えている

友去りぬ遙か遙かの鰯雲

お悔みの筆は走らず七日過ぎ

吠えるのも無口のもいる大社会

高槻市 三谷 白黒

孫が来て天プラ料理上手くなり

梅干の出番が増えたこの暑さ

五七五妻に秘め事バレちゃった

この夏も想い出置いて孫帰る

豊中市 荒木郁子

親と子で励まし合ってダイエツト

母さんの日記代りのカレンダー

チャレンジが若さと脳を活性化

言い分はどっちもどっち老い二人

豊中市 荒巻 夢

マニュアルが無ければ恋も語れない

レントゲンへそ曲がるわれ写し出す

これでよかったこのひとことに五十年

おせっかい受けて下さりありがとう

豊中市 貝塚 正子

人波に押されたふりで前に出る

ぜんざいでなかなか本音聞けません

スマートホンうっかり指にツバつける

大先生育ての親は患者たち

富田林市 関 よしみ

その先の本音聴きたい丸い椅子

いい予感呼び出し状を待っている

先輩と言われてからの乱調子

古希に合う少し派手目を選ぶ私

富田林市 肥山 一文

はいはいとだんだん個性消えていく

あれそれと喜劇演じる老い二人

恋のきずいまだに消せずもち歩く

教師の目子供達より父兄見る

寝屋川市 荒川 鈍甲

この夏を凌いでやつと今朝の秋

脱原発を決めたドイツの倫理感

労働規制緩和ブラック企業生み

いくさ好きも世界の世論まなならず

羽曳野市 磯本 洋一

うっかりと眠り富士見ず東京へ

古里の悪童今は市長とか

継ぐと言う息子のメール五年先

鉢替えてコロコロ逃げる団子虫

羽曳野市 藤原 大子

たこ焼きに大阪の意地詰合せ

さあ笑顔鏡の前のセレモニー

割り切れぬ日々に根性育てられ

瞬間に言葉が消える恐ろしさ

羽曳野市 安本 美喜

父と娘と同じ寝相よ倅せに

白鳥のイメージ描くスイミング

わたしの心に発芽を待っている

財布の紐緩める呪文唱えたい

枚方市 河田 洋子

丸裸それでも暑い熱帯夜

友達は心裸にお付き合い

覚悟して医者の前では裸見せ

裸一貫汗と涙の夫婦坂

枚方市 坂本 ミヨノ

負け嫌ひ碁石を故意にたたくうた

車窓の富士晴天望むハネムーン

肩の荷を降ろしほのぼの定年後

窓に差す月光覗く独り酒

枚方市 松原 保

ツーカーの仲で生まれるイガミ合い

民意より重い扱い有識者

来年もこんなに暑い夏予報

大河ドラマ歴史を学ぶチャンスです

藤井寺市 田付 絹枝

熱帯夜安眠誘うアイスノン

栄光の影でシェルパの呻き声

小さき事幸と思える今が好き

五輪沸く影で増税見逃さず

箕面市 村田 恵子

当り前が当り前でなくなる日

竜巻は虹のかなたと信じてた

ネットミス大きなスイカが一個来た

今ならわかつてあげれたお父さん

八尾市 田邊 浩三

頑固な風がみごとに染いた「わたの花」

(吉村一風氏を悼む)

酒色より川柳愛した一風さん

杖ついたあの細腕に愛光る

野菊より幸せだった民子さん

八尾市 山根 妙子

この夏は連れひとり減る盆まいり

収穫はゴーヤ八本夏終る

八十に一十秋が追ってくる

うっかりで違うリモコン押している

大阪府 小栢 こずえ

机上では分らぬ知恵を老いは持ち

次の世も人間だろか気にかかる

よろけつつ階段昇る夢がある

幸せは自分の心次第です

大阪府 高木 道子

うるさいと言えば鳴きやむ秋の蟬

NHKみたいな人と聞く落語

可も不可も五輪五輪の夢を見る

助手席の口とナビとについて行く

大阪府 西川 冷子

東京五輪生きる目標また延びる

五輪決定延ばす寿命は後七年

マジックテープ片手に持って介護する

五輪招致生きて応援きつとする

大阪府 畑中 節子

暑に耐えて生きる庭木も雨を待つ

孫と顔並べ脱皮の蟬を見る

私にはわたしの癖のある不思議

よく伸びる生きてる証髪と爪

オギヤアーと一声高く夢運ぶ

神戸市 井上忠貞

いとおしいお腹を蹴ったこのアンヨ
遣伝子を継いだ笑顔に感無量

一夜明け生命の重みじんわりと

神戸市 木村忠義

ゆつくりとゆつくりと年寄りらしく

老いたとて木偶の坊にはならぬよう

今日の幸すてきな方とした対話

決心がつき思い切り背を伸ばす

神戸市 能勢利子

聞き流す術を覚えた古稀の坂

通信費安くなったらスマホ買う

五輪まで生きるつもりと老母が言う

曼殊沙華猛暑忘れたように咲く

神戸市 松井文香

若くなる秘訣はきつと恋だろう

悩み事笹舟に乗せ流します

子育ても介護も済んだやつと趣味

二次会の余韻楽しむ帰り道

尼崎市 中井楓花

あきらめて買えば出てくる探し物

何事も笑いで事を済ませちゃう

待ち遠し虫の鳴き声秋の風

前向きにきれいに歳を重ねたい

足腰が年だ歳だというてくれ

加東市 安達厚

もうあかん言うてあれから早や五年

そうですか猛暑ですかと草は伸び

老い二人番茶を飲んで日なたはこ

加東市 岩本美緒子

半生期気まま暮らしに下げ首

あら不思議母娘首すじ黒子あり

ゴキブリと真剣勝負追いつかず

自分史へ笛吹き鐘は少し先

川西市 大坪一徳

熱中症恋や愛とは無関係

電動で歯を磨く世が来ようとは

新人はですます調でかしこまる

今更の負けず嫌いが邪魔になる

篠山市 酒井健二

晴れやかな顔にも会った葬儀場

美男美女区別がつかぬしやれこうべ

空を飛ぶ夢見た朝にけつまずく

カロリーを減らし心も軽くなる

篠山市 佐々木勇

国境は無い蝶蝶の世界観

連敗も心は広いトラファン

捕虫網子供心を掻き立てる

お馴染みの釘が一本ない不自由

篠山市 神島照代

ゆつくりと論す子供に愛も添え
先立たれ自由淋しさ置きみやげ
腹立ちにはやき漫才一人する
喜寿になり顔の変遷アルバムに

三田市 足立つな子

四十過ぎ自分がつくるいいお顔
にこやかに会釈したのに人違い
同窓費納めて元氣知らせます
しっかりと踏ん張っていく喜寿の坂

三田市 雑賀一泉

八十路越え口はまだしも足腰が
このところうっかりでない物忘れ
ハワイまで行つて傷めたヒザ小僧
メタボ腹自慢の姿ぶちこわす

三田市 辻開子

菜園が猛暑助けた旬野菜
まだ若い紙パンツにはたよれない
一人の夜早い雨戸を閉めまわる
自主リハが出来て元氣に朝迎え

三田市 野口晶子

昭和史の中に青春埋めて来た
屋上で古墳も競馬も見えたっけ
通学路蛙が陣どる梅雨の朝
掌の夢と現実握りしめ

西宮市 株元玲子

体中がほてり目覚める生きていた
このままあの世かと夢うつつ暑し
隣にいる人の機嫌気に掛り
繰り言をじつと聞く耳褒めてやり

三木市 山口久子

台風すぎ秋風ともに虫の声
敬老の日カレンダーまで祝つて
川柳の締切近し頭痛する
情けなやあと一針で出来る服が

南あわじ市 萩原狸月

大安に娘の姓を変え式
里帰り飲めない婿が気に入らぬ
判押した紙一枚で縁が切れ
新聞がバイクの音でやってくる

兵庫県 上田ひとみ

うつむいてひとりぼっちと語り合う
走ったりしないけれども夢はある
偉そうに語れるものは何もない
お静かに私はずっと昼寝中

奈良市 尾畑なを江

見た目よりあつさりしてる好感度
逃避行する程の恋でもないか
肴出る前に一杯すでに干し
家計簿も日々のくらしもガラス張り

奈良県 谷川 憲

しごかれた底に情あり昭和の世
通勤路黙黙歩く蟻の列
苦勞話聞かされるたび大げさに
仕事という重荷おろした途端閑

和歌山市 さかた きく

あの頃の知恵の輪今も外せない
食欲のブレーキかぬ秋の風
みかんの皮灰皿にする日曜日
家の前今日も素通り宅配車

和歌山市 平田 元三

星見せる為にあるのか長い夜
雨暑さ迷惑だけの新記録
低い山選んで老いのみかん狩り
里の秋忘れたのかと怒りの荷

岩出市 村中 悦男

この年へもツアー広告攻めて来る
少子化で兄弟げんかの声も消え
手も足もほぐれ氣持の秋の汗
妻とても幾年月にある起伏

田辺市 小川 イセ

八十路坂元氣をもらうナスの色
赤トンボ画いて残暑見舞い来る
半歩ずつプラスをしては華咲かす
一日の始まり先ずは深呼吸

田辺市 大峠 可動

自画像は今日も真夏の陽を背負う
追伸の情けが汲めず自己主張
人間の浅知恵まると罰点と
運命は七坂越えた場所にある

和歌山県 森下 よりこ

朝の二時間真夏日にやる農作業
幸いにも眠剤貰ったことはない
猫駅長の電車はとても洒落ている
ひまわりの夏の終りを掃除する

鳥取市 大前 安子

条件があつたよな氣が繋ぐ手に
庭の草条件無視で子を育て
目に余る墓のお供え待つカラス
和尚様バンダナ巻いて庭掃除

鳥取市 近藤 秋星

病院のベットなかなか寝付かれぬ
入院は墓場の隣だから嫌い
夏風邪がすぐ肺炎になっていた
後何度迎ええられるか敬老日

鳥取市 坂本 とも湖

介護する老母の笑顔は天使だよ
秋風が傷心の愛包み込む
ガソリンが高くて泣くに泣けません
切なさや夕焼雲がまた誘い

鳥取市 谷口 回春子

減らず口叩く相手が長く生き
悪口を生きる肥やしに今日も生き
長生きへ憎まれ口という薬
陰口が存在感を強めます

鳥取市 津村 律子

協賛の掛け橋となるおもてなし
汚染処理世界公約安倍総理
満足感大空染める茜色
アイフォンもスマホも持たぬ脳音痴

倉吉市 堀 かずこ

のど自慢予選落ちでもいいじゃない
幸せは笑顔が連れて来てくれる
お陽さまの光をあびて笑顔出る
悩むより行動すれば答え出る

倉吉市 田中 紀美恵

鈴虫くん鳴いて心に明かりくれ
行列の出来る店には福の神
よちよち歩き心はらはら見てる母
夢枕母は立たない忘れたか

境港市 中井 虎尾

美しく完成したか見る鏡
暑い日を嵐追放秋すずし
一日をふりかえりつつ一人酒
酒飲みが好きと蚊が来る俺んとこ

米子市 池岡 たけし

年ごとにファイト袋の息が抜け
亡き人を忍ぶ心が明かり焚く
善くぞまあ此処まで来たと褒めてやる
秋はまだまだかと暑い日を耐える

米子市 加藤 正二

不思議にも大事なことをよく忘れ
魔の風が日本の空舞っている
あちこちで道草食って独り旅
来た道は良くも悪くも万歳だ

米子市 田村 周子

秋らしい風に誘われ友と会う
梨食べてあの世へ逝った父思う
シリアにも平和な日々が来るように
温暖化地球の変化おそろしい

鳥取県 飯野 菖子

ざまあみろ人の話も聞くものだ
苦しみはうれしいおまけ明日の糧
生きる道選んで今は米作り
ハンドルを握って越えた幾山河

鳥取県 下田 茂登子

気の小さいおとこに神も味方せぬ
我が家には拾う神様みえて来ぬ
夫婦でもひとつふたつの丸秘あり
年金の差でビールも違う老夫婦

鳥取県 田口 清帆

出雲市 黒目 英男

にこやかに笑えど腹の探り合い
人生は運と不運と二人旅
味噌汁の香りに今朝を膨らませ
失言も腹にあるから出る言葉

鳥取県 橋谷 静江

老いて来る未知の世界へ手探りだ
残された時間を無駄にしたいくない
何事も今してこそこの値打ちある
長雨に農業予定乱される

松江市 相見 柳歩

待ち合わせ今度はわざと遅刻する
狙うことやめたら君がついて来た
泥んこを許せる親になりたいね
差別かなしつかりしてよ男でしょ

松江市 武島 ちよえ

役果しゴーヤカーテン疲れ果て
人生を蛇行のままで八十路坂
もたもたを見ると口出ししたくなり
夏バテと口には出せぬ無為徒食

松江市 山根 邦代

皆さんと同じでなくていいんだと
心まで貧しくならぬように行く
台風が暑いアツイを連れてゆき
涼しさに朝寝が癖になりそうだ

ありがとう素直に言える人生だ
面影を忘れないよう写真見る
夏祭り花火をよそにテレビ見る
命拾い自分を信じ生きている

安来市 原 煩惱児

この儂を案じてくれているナース
地藏盆屋号の味が受け継がれ
入院の身では失礼盆の仏
終戦日もう何も喋りたくはない

府中市 馬場 利子

今日よりは明日を夢見て弾む靴
シャワー全開心の汚れ流し切る
向かい風笑えば味方してくれる
噛み合わぬ言葉に迷う一里塚

岡山市 丹下 凱夫

ほどほどに酔うております終戦忌
一通の案内状に風立ちぬ
この村を出ようとしないう赤とんぼ
自己主張苦手なボクと朝の月

岡山市 前田 恵美子

虫の音に熱いお茶を飲んでみる
安心は家族の笑顔見ている時
新しい朝だ大きく窓開ける
捨てようと思った言葉噛み直す

倉敷市 安東モモ

会議中ケイタイ急に歌います

ジムに行き汗を流してビール飲む

屋内の駐車場にも虫が鳴き

夏休み済んで子供の姿へる

玉野市 片岡富子

どこまでも妻は夫の代理です

防災食美味ではないが生きる為

オリーブ切り空の青さに遣る気出る

些細な事無視は出来ない土踏まず

備前市 森ふみか

ゲリラ雨それできれいになりますか

湧き水を飲めば背中にまで浸みる

土中から出れば猛暑と蟬時雨

結局はゆっくり死ぬかすぐ死ぬか

竹原市 若年幸子

小六の悩みボクに嫁さん来るかなあ

少し位噂の欲しい再生紙

やっと晴れ虫もののびのびセレナーデ

オリンピック復興はいつどうなるの

竹原市 土井輝恵

アンコール演奏予定ちゃんとする

預金高妻に聞かぬと解らない

しっかりと親を叱って盆帰省

日本酒でなけりゃ酒とは言わぬ夫

竹原市 六田半徳

この夏は熱中症と勝負した
オニヤンマ我が家の庭をパトロール

雨も降り台風一過虫の声

今年こそカーブCSつかみとれ

松山市 神野きつこ

いわし雲はだしのゲンを読んでいる

窓を開け秋の合唱隊を聞く

夜遊びの足音を聞く反抗期

ありがた水だけど恐ろしい水

四国中央市 篠原久

いい夢の続きを猿に食べられる

ボジティブに生きる覚悟で過去はかこ

箸不明妻の苛めにあっている

吃水線辺りで石は丸くなる

高知市 三谷待太郎

四〇度風呂なら長湯の癒し系

年重ね化けてきた身をなぞる齡

汽水域酸いと甘いの交差点

ジ・エンドのそこから先を覗きたい

唐津市 岩崎實

することは小さなことよ草むしり

することは小さなことよ手足もみ

することは大きなことよ親孝行

することは大きなことよこの一票

佐賀市 清水園實

雨の日の病院行きはタクシーに
院長は今日も減塩笑顔指示
薬屋はこれも効くよと置いてゆく
黒と白敵の急所はわが急所

唐津市 吉富節子

波のれず移りゆく世に拗ねて生き
原発に日本未来を託せるか
雷は独り寝怖し夫恋し
ひと仕事しては一服窓の風

佐賀市 門井孝

まだ未熟遠慮します敬老日
今の世も三歩後から妻は来る
空気の良い旅でした四十年
かくれ酒しやべり過ぎてか妻にバレ

山鹿市 三谷たん吉

トンボ飛ぶどうやら地球ひと安心
アメリカは昔も今も西部劇
応援をねだるスポーツ見る気なし
期待などしないと誰も裏切らぬ

山鹿市 米加田恭代

煩惱と戦いながら更年期
冗談もイヤミも隠す笑い顔
おだてても木には登れぬ猿である
大らかに生きて体重持て余す

福岡県 本田さくら

今日もまたリンパ体操秋の風
忙中閑「あまちゃん」だけは見えています
カレンダー一枚はげば秋の風
肩痛し何の罰かを問うてみる

熊本県 杉野羅天

夕菅^{ゆすげ}が心にしみる年になり
カラカラと豪雨中間欲しくなり
御婦人もデザートだけは矢のように
汚染水原発事故のままに漏れ

熊本県 前田幸子

電気料惜しんで日がな汗流し
干魘に豪雨も今日は恵み雨
節電より熱中症が高くつく
腹一杯ごちそうのあと常備薬

札幌市 佐藤登美子

異常気象雨の被害と雨乞いと
ワンクッション置けば怒りも小休止
悪妻のふりして夫働かせ
運動会無邪気な孫に十二の目

札幌市 富永恵子

見え隠れ水は甘いと誘われる
猛暑日に北国育ち動かれず
雨後の草スルリと抜けてノルマ終え
まだ虹を掴めそうですこんにちわ

弘前市 高森 一 吞

不思議です貴女が妻でいるなんて
あれ以来ピエロが踊りやめている
脛かじる瘦せる年金絞る孫
蝟酒呑んでも元氣帰らない

つくば市 嶋本 喬

目覚しはクマミンミンとアブラゼミ
お昼寝の犬うろたえるイモ虫に
秋風だ動きの鈍い蚊をたたく
倍返し所得倍増できればね

多摩市 大竹 一 良

知っていて知らぬ顔する難しさ
意地悪は心が映る手鏡に
泣き笑い夫婦喧嘩もノーサイド
仲人の洒落た祝辞に席なごむ

東京都 高岡 弥 生

晴れ豪雨喜怒哀楽の多い夏
彼女出来大人になった息子見る
怒らない我がワンチャンは癒し系
お野菜を欲しがる歳になってきた

横浜市 長島 亜希子

聞くだけでバテる猛暑という予報
読めそうもない名をつける親心
二〇二〇わたしの五輪企画する
暑さ一服隣も草を抜き始め

静岡市 渡辺 芳子

良し悪しの決断にぶり進めない
お互いを気使う友よ老いの幸
外歩きお腹へこめて胸はって
何事もダンダンスローになって行く

熱海市 三谷 圭 角

家を出て先ず熱風に身構える
好景気なのかお祭り派手になり
妻元氣麻雀お茶にビリヤード
あら不思議電車の切符安く買え

江南市 脇田 雅 美

箸並びどんな料理がでるだろう
言い切った自分の意見向かい風
目に見えぬ事まで気づくおもてなし
旅半ばメールで隣り火事を知る

愛知県 樺 嶺 志

天怒り豪雨洪水灼熱日
タッチの差帰宅と同時に豪雨くる
夏日の夕風はほのかに秋寄越す
汚染止めなるまいきつと空手形

台風26号の被害に遭われました皆さまに心より
お見舞い申し上げますと共に、一日も早い復興を
お祈りします。

川柳塔社

俳風柳多留一二篇研究 5

援用。

細井 賛。こんな句もあります。

女帝腎虚で奥山の獲になり

一四二五

清 賛。

30 供部やの音を禿ハふしがり

伊吹 登楼する主人に付き従ってきた草履取り同士が、退屈のあまり供待部屋で博打を始めたのだろう。壺を伏せるような聞きなれぬ音がするので、禿が訝しく思っている。

山田 賛。

供部屋へ禿が本をかしなくし

二一

小栗 賛。公許の遊所たる吉原の供部屋で禿にまで聞こえるほどの壺皿の音をさせてバクチをしたとは思えないのだが……。洒落本などにその様な光景はザラに出てきましようか。

細井 賛。

供まちの内あなとつてふせて居る

安元礼 4

清 賛。供部やで御ぞう壺本はりなくし

安四松 3

28 十三日手もつけられぬはらで出る

伊吹 十二月十三日の煤払い。この場合の手もつけられぬ腹は、今にも陣痛が起こりそうな腹。家中のすべての部屋の煤払いをするため、産室にいる妊婦も座敷牢にいるどら息子も、部屋から出て来る。

座敷牢腰縄で出る十三日

五三

山田 煤払いの時の胴上げでしょう。まさに「手もつけられぬ腹」では胴上げは無理。

花姫ハ胴につかれぬ御目出度サ
十三日内義目立ッてゆるされる

三五10

幸々安元頌 3

清 同。

29 山さるのかむり女帝のおものずき

伊吹 弓削道鏡が、宇佐八幡の神託と称し皇位継承を企てた故事。彼を重用した女帝孝謙天皇は「称徳天皇が物好きだ」といつている。河内国弓削村出身の道鏡を山猿と表現したとともとれるが、宗祇が「百人一首古注」に「猿丸太夫を弓削道鏡と号す」と書いたが為の、猿丸道鏡も利かせる。

名ハさるで馬のやうなへ勅使たち

一四二34

山田 賛。猿の烏帽子。

小栗 賛。山田兄も指摘されたように、「猿に冠」(意味は「猿の烏帽子」に同じ。外観だけよそおって内面がそれにならなないことのとえは小学館『ことわざ大辞典』の

31 車引たはらの中へむぐるやう

伊吹 俵をたくさん積んだ大八車の描写句。あまりに多くの俵の荷物であるから、車の後から押す者が俵の中に潜り込んでしまうようである。

車引跡のたわらへむぐるやう 二二 3

山田 賛。

車引跡トから首の無イか行キ 安四板 3

清 賛。

32 けんくわかと思へば車おして来る

伊吹 大きな声がするので、喧嘩が始まったのかと思つたら、掛け声を上げながら車力が車を押してきた。

橋と坂越すと車力ハ声がわり 一三〇 30
清 賛。

だまつてハ引かれませぬと車力い、

安六礼 5

33 何もかも内ぶところへござ入れる

伊吹 なにしろ目の不自由な瞽女のことであるから、あちこち別の所へ入れると、何処に

何が入っているのか分らなくなる。そのため、内懷へ何もかもすべて入れることになる。例句は用心のため。

ねついござ内ふところにばちふくろ 三 7

山田 賛。懷へ入れただけでは落ちるおそれがあるので、内懷へしつかり入れる。

石川 賛。横や前に置いても分らなくなるので内懷へ。

小栗 賛。石川さんの補説にも。

清 同。

34 役者付中よりうへハ何ンぞもち

伊吹 役者付は、顔見世番付と同じで、顔見世狂言の興行前に向う一年間に出演する役者の顔ぶれを番付にしたもの。面付または役者入替番付とも。中堅以上の役者であれば、その役に応じた小道具を持つ姿が描かれている。

首数級なま／＼しいを茶やくばり 八四 29

顔のたんとある絵持てかけるなり

安四義 3

清 賛。

役者付嬢どれ見せなく

二六 25

35 女中よみていまひに見てかつぎ出し

伊吹 よみは、賭博の読みガルト。この場合の非に見るは、間違っていると思うこと。女ばかりでの慣れないカルタであるため、ルールが不確かである。その審判を下すため亭主が駆り出される。

女よみおちなさるなとしやかをうち 六 11

小栗 「ひに見て」がわからない。「非に見るは「不正、不完全だと見る」と「日国」にはあるが、登場人物の主語、目的語関係がよくわからない。

清 不明。変な句だ。

36 五日めと十日めすまで御ちようあひ

伊吹 在原行平。配所の須磨で松風と村雨という女性と親しくなったから、雨と風がその時を得るといふ成句の五風十雨をからませて、五日目と十日目に寵愛しただろう、という想像句。

面白く雨風にあふ中納言

三九 1

小栗 賛。五風十雨＝五日ごとに一度風が吹き、十日ごとに一度雨が降る、が元の意。

清 賛。五風十雨に気がつけば其れまでの句。

五風十雨で豊年な中納言

三三 36

行平ハ五風十雨ときめたらう

三九 41

英語 de Senryu ㊤

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

(岐阜保健短期大学)

蒼空よ すくすくのびる 子が五人

blue heaven,

*my five kids are around me
growing quickly*

湯ざめするまで お前と話そ 夢に来よ

feeling cold after taking a bath

I want to talk to you

come, my son, in my dream

～リバーウィローのため息～ (川柳の海外普及の立役者: R.H. プライスの著書 (4))

Japanese Humour (日本交通公社 1959)

戦後 14 年目の昭和 32 年 10 月、交通公社は外国人旅行者向けシリーズの最終巻にプライスの *Japanese Humour* (日本のユーモア) を出版しました。外国人観光客の日本誘致が目的でした。プライスは日本のユーモアについて「川柳には最高のユーモアがある。川柳の心意気 (精神)、つまり人の心を揺すぶろうとする強い欲求やパワーは、文学においても、それぞれの国においても、また男と女と一緒に集うところには見出されるだろう。しかし川柳が際立ち、独自性を保っているのは本質的な要点から遠ざけることなく、簡潔な表現であり、人生の出来事や人間が持つ生きざまがたった一行の詩に含まれることである」と述べています。海外からの旅行者を風光明媚な観光地、料理、独特のおもてなしだけでなく、文学の世界、それも川柳という江戸から続く庶民の世界に向けさせたところに、この本の出版の意義とその独自性があります。それは日本文化をこよなく愛したプライスのスタンスでもありました。プライスが穿ちの例として取り上げた古川柳を *Japanese Humour* (p.113) から紹介しましょう。

出されたを出たにしておく里の母

She was sent away./ But her mother in the country/ Makes out she just left. (プライス訳)

プライスは「娘の夫は彼女に飽きて離婚したが、母は娘が自発的に去ったと取りつくろう。そこに母の心、女性の心、女性の意思を知ることが出来る。彼女らは事実に従うことができず、彼女らに対する評判が生活そのものよりもずっと重要なのだ、もちろん、真実がずっと重要なだけ」とコメントをしています。現代においても、この川柳と同じような取りつくろいを見聞することがありますね。

七五三を祝う

小栗清吾

人生の節目節目には、さまざまな儀式が行われますが、七五三は子供にとって最大の儀式の一つでしょう。

七五三とは珍しい十五日

安四鶴2

という句がありますから、「七五三」という言葉自体は、この句のできた安永四年（一七七五年）頃はまだ一般的ではなかったようですが、『東都歳事記』によりますと、「髪置（三歳男女）」「袴着（五歳男子）」「帯解（七歳女子）」という行事があり、十一月十五日に氏神様へ参詣する習慣だったようです。以下、それぞれの句をご紹介します。

【髪置】

髪置は、三歳児のお祝いです。この時から髪を大人のように伸ばし始めます。

髪置の祝儀小判を置き始め

六二26

お祝いとして小判を渡したように読めますが、そうではありません。これは男の子が髪

を伸ばし、頭頂部に小判形の月代を剃ること
を詠んだ句です。

髪置の櫛させば落ちさせば落ち

二二17

こちらは女の子でしょう。まだ髪が短いので、櫛をさしてもすぐ落ちてしまうのです。

髪置に庭の南天坊主にし

一〇二6

子供の髪は伸ばし始めますが、反対に庭の南天の木は坊主にしてしまったというのです。髪置のお祝いに赤飯を炊いたので、その添え物に南天の葉が使われたからです。

【袴着】

袴着は、五歳の男の子が初めて大人の正装である袴を着けるお祝いです。

袴着にや鼻の下までさっぱりし

初5

いつも青はなを垂らしているいたずら坊主が、今日ばかりは鼻の下もさっぱりときれいにして、紋付きに袴の正装で氏神様へ参詣に出かけます。

ひとつ飛んだりと袴着吊し上げ

一四22

お宮へ途中に水溜まりがあったので、両親が「さあ、ひとつ飛びなさい」と子供の手を引く張って吊し上げるようにして飛び越えさせている様子です。

よんやさんやさと袴着は上がり

一七13

お宮に着くと、両親が手を引いて「よんや

さよんやさ」と掛け声をかけながら、神社の階段を上ります。数え年五歳の子には、階段はなかなか大変です。

袴着のどうだまして脱がぬなり

七27

ふだんとは違う立派な着物を着せられ、大きくなったと誉められたのが嬉しくて、なかなか着物を脱ごうとしないのです。

【帯解】

七歳の女の子が、子供用の付け紐をやめて、正式の帯をするようになる儀式です。いわば大人への第一歩です。

帯解は濃い白粉の塗りはじめ

初6

大人のように帯を締め、厚化粧をしてお宮参りに出かけます。大人の濃い白粉の塗り始めです。

帯解は男を尻に敷きはじめ

四二16

正装した女の子は、出入りの職人などの肩に乗せられて、お参りに出かけたさうです。これが、いずれ男を尻に敷くようになる最初の場面だというわけです。

痛い事あすこの袴ここの帯

二九10

親戚に七五三の子がいると、相応のお祝いを届けねばなりません。「あそこの子が袴着で、こつちが帯解かい。痛いなあ」と。いつの世も付き合いは大変です。

愛染帖

新家 完司 選

大阪市 江島谷勝弘

孫だけが脱がせてくれと寄ってくる

(評) 子も孫もいなかった新婚の頃は、もう少し色っぽく胸弾む状況であったのだが……そのうちに孫さえ寄って来なくなる。

神戸市 松井 文香

短所だと思っていた長所

(評) 自分の長所は分かっていくものだが短所はよく分かる。その短所こそ個性であり、コントロールして磨けば長所になる。

三田市 上田ひとみ

だんだんと自分のことが好きになる

(評) そのようでありたい。自省は必要だが自己嫌悪は暗くなる。自分の良いところを認めて胸を張れば内面から煌めいてくる。

鳥取県 吉野いさお

百兆の予算届かぬ孤老の死

(評) 必要なものは、血の通った人と人の繋がりと、孤立している老人それぞれの意識改革。金だけで解決できる問題ではない。

和歌山市 古久保和子

読みかけは生涯積んだままだろう

(評) おもしろい本は一気に読了する。が、途中止めて「またいつか……」と本棚に置いたものを再び手にすることは極めて稀。

豊中市 藤井 則彦

筆順の通りに書くことが歪む

(評) 筆順を間違えてはいるが、書き慣れたので形は整っているのだ。法律違反でもないし、いままら矯正することもあるまい。

橿原市 安土 理恵

金婚式すんだし好きなようにする

(評) 我慢し合って50年。もう我が儘をしてもいいだろう。但し「七十にして心の欲する所に従えども矩を越えず(孔子)」のこと。

富田林市 山野 寿之

ユーモアがいつばい飛んでいる酒場

(評) 好き勝手な駄駄螺や本音が飛び交う酒場。騒がしくて聞き取りにくい、耳を澄ますと、漫才顔負けのオモロイことばかり。

羽曳野市 宇都宮ちづる

古希までにボディースーツを買ってみる

(評) 何をするにしても「遅すぎる」ということはない。行きたい所へは行く。買いたいのものは買う。諦めると必ず後悔する。

鳥取市 岸本 宏章

日本は廃炉技術を売ればよい

(評) そう、フクシマの苦い経験から得た数々

の技術を、今後の事故や廃炉に向けて役立ててこそ、「災い転じて福となす」である。

箕面市 広島 巴子

シニアでも目指すぞ五輪ボランティア

自分への残暑見舞いに生ビール

広島市 岸本 清

最近では忘れることに慣れてきた

晩酌をセルフと決めたのは女房

東大阪市 北村 賢子

濡れてまいろう言うてられないゲリラ雨

気合い入れ真つ赤な服で行く歯医者

大洲市 中居 善信

伏流水は過去を清算して清し

八月忌お水いっぱいあげましょう

神戸市 田中 章子

百歳になれば終活始めます

スキップで転ばないようスクワット

三田市 福田 好文

残りビールで食後の薬飲んで寝る

昼寝して晩酌までを持て余す

羽曳野市 徳山みつこ

わたしを守る年金と背後霊

ついにデビューおひとり様の食事会

和泉市 横山 捷也

自販機のお釣りビタリが面白い

鈴虫が秋の封切る一番手

八尾市 高杉 千歩

認知症かなと本気で考える

倉吉市 中村 毅
経を読み坐禅組んでも元のまま

弘前市 福士 慕情
カメムシが坐禅の膝へ寄ってくる

青森市 守田 啓子
逆境のひまわりが四股踏んでいる

枚方市 小林 わこ
四週間もう過ぎたのか診察日

岡山市 丹下 凱夫
耳鳴りとコラボしている虫の声

鳥取市 前田 楓花
念入りに描いた眉毛が消えている

藤山市 遠山 可住
男用日傘を差してみるも歳

枚方市 伊達 郁夫
一合で酔う日もあれば酔わぬ日も

米子市 森脇 麗
休肝日無いままに來た夫の酒

藤井寺市 鈴木いさお
良性やそんな飲んでもええぞうな

高槻市 原 洋志
夕立ちと肩を並べて飲んでる

大阪市 高杉 力
焼き芋に栗の値が付く北新地

定年の友増えゴルフ平日に
倉吉市 岡崎美知江

自分だけ写真うつりが悪く見え
のど飴をもらいおしゃべりまだ続く

枚方市 寺川 弘一
魚釣り殺生してると思わない
体罰なしで怒ると声がすぐ嘎れる

西宮市 吉井菜々子
スーパーマンは武力行使をためらわず
貧相なボエムは棄てて憤る

弘前市 高瀬 霜石
勝ち戦でも負け戦でも お酒
似てますわなあ毒の字と妻の字は

岡山市 工藤千代子
シャワーから湯ぶねに変えて秋にする
一応は「今日の運勢」目を通す

松江市 石橋 芳山
ぼんぼんと言われて耳に残らない
それらしく拳握ってみたりして

堺市 矢倉 五月
白衣着ている人偉いと思いがち
人様の事なら合点いくお歳

長岡京市 山田 葉子
師の計報冬がそこまで來た気配
断る役慣れて図太くなりました

豊中市 水野 黒鬼
省線と言いつ張る母の白寿膳
玉砂利を踏むと軍歌がまた響く

鳥取市 岸本 孝子
頼まない物を送るという詐欺師
身の始末出来るくらいは貯めている

西宮市 片山 忠
反るように歩きひんしゆく買っている
大阪府 藤原千恵子

豊橋市 藤田 千休
夫と犬こころ良さそな寝息する
プライドも高い老舗の包装紙

榎原市 居谷真理子
あしなえの鳩の一羽も棲んで駅
茨木市 藤井 正雄

京都市 高島 啓子
古里の灯はあたたかい母の酌
断捨離は息子夫婦にしてみらう

堺市 奥 時雄
整骨院腰痛持ちが支えてる
鳥取市 福西 茶子

大阪府 小谷 集一
お日さまが怖くて出来ぬ草むしり
誇張して書いた日記が面白い

大阪府 米澤 俣子
逝く時は親に貰った名のままで
奈良市 辻内げんえい

奈良市 加門 萌子
なぞなぞを孫に問われて辞書を引く
夫にもよく言い聞かす詐欺電話

神戸市 山口 光久
奢るとは決して言わぬお金持
香芝市 大内 朝子

ふた親を偲べばコロリ子に戻る

三田市 尾崎 一子
女文字鉛筆の先丸くして

河内長野市 坂上 淳司
先祖代代婦唱夫隨の筋をひく

藤井寺市 増井ヨシ枝
外灯のようにフェンスのゴーヤ熟れ

川西市 山口 不動
ご先祖も猛暑の中を里帰り

西宮市 牧渕富喜子
真夏日と聞いて九月が反り返る

大阪市 井丸 昌紀
なるほどね蟬には耳がいらしい

吹田市 野下 之男
鳴き終えて蟬は静かに天を見る

八尾市 村上ミツ子
そうだ今年もかき氷食べてない

倉吉市 牧野 芳光
蟻の身になったら蟻が分かりだす

海南市 小谷 小雪
涼しくて調子上げるカネタタキ

高槻市 片山かずお
薬袋も連れてランチの席に着く

松山市 神野きつこ
キャリアウーマン自由気ままが癖になる

堺市 村上 玄也
介護料だけは払い放しでよい

岡山市 藤成 操江
さつきまで頭にあったいい言葉

塩竈市 木田比呂朗
ケータイをスマホにかえてからの鬱

鳥取県 山下 節子
げつそりとなるほどするなダイエット

八尾市 前田 紀雄
札束を見るとコントロール不能

三田市 堀 正和
地球儀はなんで斜めになつてゐる

神戸市 山根 弘子
愛して一言信じ五十年

堺市 遠山 唯教
置引き注意スコアボードが恥ずかしい

京都市 榎本 宏子
人の為使うと誓い宝くじ

和歌山市 喜田 准一
足腰の痛みが失せて欲が出る

鳥取市 有沢せつ子
三姉妹青藍赤の個性もつ

吹田市 太田 昭
あんなんのへそに詰まった桜漬

藤井寺市 鴨谷瑠美子
見たくない仕草も見えてくる夫婦

亀岡市 井上 森生
世の中が明るく見える大病後

芦屋市 黒田 能子
ご機嫌がいいのかソプラノで笑う

大和郡山市 坊農 柳弘
不揃いのリングはジャムになりました

大阪市 栃尾 奏子
極上の子育て三世代同居

河内長野市 松岡 篤
人脈で紡いだ老後味がある

松江市 三島 崧丘
出る予定ないが髭刺る鼻毛切る

八尾市 宮崎シマ子
雀のお宿に行きたがるフルムーン

神戸市 奥澤洋次郎
しっかりとせねばならぬと独り言

大阪市 柴本はつは
衣食住そっくりもらいほけはった

三田市 多田 雅尚
マイホーム買えずに墓地で我慢する

三田市 上垣キヨミ
王室に肖り曾孫ジョウジ君

鳥取市 夏目 一粋
青信号長くして欲し高齢者

豊中市 松尾美智代
ダーズリン濃い目に淹れて寝つかれず

堺市 羽田野洋介
都合よく耳のチャンネル切り替える

河内長野市 穂口 正子
老いたって顔ほど心変化なし

米子市 竹村紀の治
ピンチには声を小さくするラジオ

藤井寺市 若松 雅枝
七回忌好きな煙草も供えとく

奈良市 大久保真澄
ステテコがおしゃれだなんて許せない

京都府 坪井 孝一
無人駅ドラマ探して歩く旅

西予市 黒田 茂代
一年中仏さまにはうちの花

篠山市 佐々木 勇
しっかりと抱かれた戦友の消えぬ声

寝屋川市 平松かすみ
私の知らぬ処を内視鏡

弘前市 稲見 則彦
元取ると金魚掬いに精を出す

鳥取市 吉田 弘子
現代医学性格までは治せない

大阪市 田浦 實
家掃除大汗かいてダイエット

富田林市 中井 アキ
暇だからさもしい事も考える

宇部市 平田 実男
避難所へみんな行ったらバンクする

尼崎市 春城 年代
食文化もあらばこそお茶漬けのうまさ

紀の川市 辻内 次根
油にまみれた機械は昭和製

和歌山市 土屋起世子
けなされて急に湧き出す地元愛

姫路市 古川 奮水
大道芸見惚れてバスをまた逃す

紀の川市 楠原 富香
スイッチオン飛び出してゆく赤い靴

弘前市 岡本 花匠
悠長に押し蓋使い母の味

米子市 後藤美恵子
溝板が選挙になると架けられる

和歌山市 磯部 義雄
生ごみを漁るカラスに誰がした

三田市 足立つな子
軽やかで内緒話にむかぬ声

富田林市 肥山 一文
淋しい時演歌を唄いまざらわす

岡山県 田中 恵
思い出がだぶって歌が続かない

高槻市 初代 正彦
呑気でも健診だけは年二回

鳥取県 平木 公子
病院もあまりの暑さ空いており

田辺市 岡本 昇
子と同居遅寝遅起き馴らされる

京都市 三宅 満子
安倍さんのドヤ顔五輪つれて来る

河内長野市 梶原 弘光
身ぐるみをはぎ取られるぞTTP

神戸市 能勢 利子
はやはやの豚まん冷めた長電話

寝屋川市 岡本 勲
洗濯機の中でもつれる老い二人

鳥取県 細田 裕花
青春はコーラの泡の不確かさ

奈良市 尾畑なを江
助手席のサングラスから指図出る

青森県 松山 芳生
核のない戦争むかしむかしです

堺市 近藤 治子
スタイルが寸胴だから着物好き

今治市 渡邊伊津志
ほどほどに散らかっている安堵感

河内長野市 辻村 ヒロ
ふるさとが渴いた私抱きしめる

堺市 大隅 克博
鬼門などと言っておれないワンルーム

豊中市 池田 純子
トイレかな竜巻来たら逃げる場所

三田市 雑賀 一泉
ピカピカの昨日の新車今日中古

和歌山市 北原 昭枝
夫寝てわたしの時間至福なり

米子市 加藤 正二
それぞれの足跡語る敬老会

寝屋川市 富山ルイ子
おもてなしの心貰って帰る宿

奈良市 岩本 浩二
カイゼル髭の祖父が茶の間を睨んでる

羽曳野市 藤原 大子
ミステリー私の明日は天まかせ

共選欄

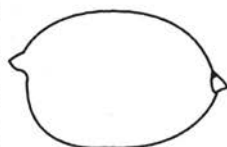
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 724句)



K. K

「門」 竹治 ちかし 選

趣味の門たたいてからの弾む日々
お隣の息子赤門出て無職
極楽の門が開いてる焼鳥屋
同門のよしみラーメン吸ってる
門限にやっと気がつく三軒目
表門さけて裏木戸くぐり抜け
門構え先祖は偉い人らしい
うっかりとお門違いの口を出す
門のない家で気楽に友が寄る
寂しくて門はいつでも開けておく
校門の桜は歴史知り尽くす
表門建前だけが入りする
門外に出してはならぬ内輪揉め
ときどきは生欠伸する昼の月
合掌すると極楽の門が開く

米子市 吉田 陽子
大阪市 江島谷勝弘
篠山市 遠山 可住
紀の川市 北山 絹子
大阪市 川端 一步
高槻市 左右田泰雄
大阪市 板尾 奏子
池田市 上山 堅坊
シドニー 坂上のり子
大山市 金子美千代
東大阪市 佐々木満作
尼崎市 藤井 宏造
鳥取市 福西 茶子
高槻市 原 洋志
鳥取市 土橋 螢

「門」 大内 朝子 選

千客万来門戸は広くあけてある
オリンピック門戸開いたチーム力
竜巻が天地の門を破ってる
門などはないが温もりある我が家
ブチ家出行ったり来たり門の前
校門をくぐると思い出がポロリ
門柱にセコムのシール見える位置
晴れやかな門出を祝う青い天
門札に今風の名がひとり増え
偏差値に希望の門を閉ざされる
デイサービス広く門あけ待っている
本棚に寝るパソコンの入門書
入場門ソワソワしてる園児たち
青春の門は酸っぱい味だった
門限を守ってるのは父ひとり

八尾市 宮崎シマ子
高槻市 綿山美斗子
川西市 山口 不動
堺市 村上 玄也
日置市 前田 洋子
大洲市 花岡 順子
八尾市 内海 幸生
東大阪市 北村 賢子
米子市 竹村紀の治
橋本市 石田 隆彦
和歌山市 土屋起世子
川西市 西内 朋月
大阪市 立蔵 信子
藤井寺市 鈴木いさお
大阪市 板東 倫子

たいたいたら母さんの門あきました

末席の門外漢が的を射る

門撤去歴史が一つ消えて行く

門限を破る平成シンデレラ

門閤という格式がある田舎

門限を縛る人いず人恋し

門限をちよこちよこ破る恋二章

門一歩出れば戦士の面構え

鬼門には貧乏神が陣を取る

裏門の中は暮らしの匂いする

門限に時たま小さな嘘もつき

絆されてこころの門扉開かれる

裏門から煮物を運ぶそんな仲

門番がいる家なかで揉めている

表門よりも裏木戸くぐる仲

青春の門は酸っぱい味だった

「ごめんね」に閉ざした門が開きます

偏差値に希望の門を閉ざされる

門番をかしこい犬にさせている

門限はわたしが決めるので自由

わたくしの門にたつぷり化粧する

門灯が青の内には帰らねば

門灯を点けて家出の猫を待つ

三田市 田中 章子

茨木市 島田 誠一

米子市 小野 鶴子

和歌山市 上田 紀子

安来市 原 煩惱児

箕面市 酒井 紀華

茨木市 藤井 正雄

大阪市 小谷 集一

生駒市 飛永ふりこ

藤井寺市 若松 雅枝

雲南市 菅田かつ子

東大阪市 北村 賢子

和歌山市 坂部紀久子

奈良市 辻内げんえい

鳥取市 津村 律子

藤井寺市 鈴木いさお

出雲市 伊藤 玲子

橋本市 石田 隆彦

鳥取市 岸本 孝子

豊中市 江見 見清

鳥取市 倉益 一瑠

八尾市 宮崎シマ子

和歌山市 土屋起世子

入門書積んで理論はうまくなる

門灯の暖かく待つ塾帰り

門外に出してはならぬ内輪揉め

門出の朝お守りそつと渡す母

威風堂堂城を見守る大手門

再審の門を広げている自信

喜寿すぎて門ある家にまだ住めず

チャンス待つ門はいつでも全開だ

山門の時雨ここから秋になる

仏門をくぐれば修羅は遠ざかる

狭き門などと小学生が言い

鬼門さんらしい図面を引き直す

父母を送り無口になった門

秋の門飾る菊花に手間かける

裏鬼門きれいに箒目を立てて

鍵ひとつ握って門の無い暮し

校門の桜は歴史知り尽くす

近付けばばつと反応門構え

入門の動機は知らぬ三歳児

札束を置くと裏門さつと開き

名門に生まれ鎖にしばられる

門灯がぼやつと点いて主人待つ

開けるなど言われ開けなくなった門

札幌市 小沢 淳

貝塚市 石田ひろ子

鳥取市 福西 茶子

倉吉市 中村 毅

高知市 小川てるみ

倉吉市 山中 康子

大阪市 川端 一步

芦屋市 黒田 能子

鎌山市 遠山 可住

池田市 栗田 久子

大阪市 神野千恵子

和歌山市 喜田 准一

藤井寺市 鴨谷瑠美子

神戸市 松井 文香

尼崎市 春城 年代

橿原市 安土 理恵

東大阪市 佐々木満作

大阪府 桑田ゆきの

堺市 矢倉 五月

鳥取市 永原 昌鼓

紀の川市 楠原 富香

三田市 久保田千代

大阪市 井丸 昌紀

門限を守らないのはいつも妻
門限を守って娘凡人に

門灯が点いてる妻が起きている

門外漢だからよく見えよく喋る

鍵ひとつ握って門の無い暮し

男名の門標がかげ暮す寡婦

門柱も私も少し老けました

どの道を選べど人生狭き門

門いくつぐれば浄土行けますか

門出には花一輪があればいい

門限のない侘しさを少女A

門だけが残留みんな家を出た

破門されやつと眼が覚め燃え上がる

会ったことないけどよくも路郎門

裏門から入りなかなかなか出てこれぬ

名門に生まれ鎖にしばられる

出る時もある時にも同じ門

人間を小さく縛りつける門

開けるなど言われ開けなくなった門

秀句

待っている人はくぐって来ない門

黄泉の門開いて鳩が鳴いている

天国の門に踏絵が置いてある

大阪市 柴本ばつは

神戸市 井上 忠貞

東かがわ市 川崎ひかり

河内長野市 梶原 弘光

橿原市 安土 理恵

奈良県 中原比呂志

三田市 久保田千代

吹田市 須磨 活恵

瀬戸内市 東横ますみ

長岡京市 山田 葉子

富山市 有澤 嘉晃

米子市 政岡未延子

松江市 松本 文子

豊中市 水野 黒兎

米子市 後藤美恵子

紀の川市 楠原 富香

鳥取市 谷口回春子

松山市 宮尾みのり

大阪市 井丸 昌紀

鳥取県 斉尾くにこ

松江市 石橋 芳山

弘前市 高瀬 霜石

極楽の門の掟に時代の差

その門はいつもちよつびり開いている

水門を開けてこころの激流す

赤門の前で写真が撮ってある

退院の柵正門出られない

門あまた越えて終章日溜りへ

合掌すると極楽の門が開く

門外不出胸に芽生えて来た双葉

人許す登竜門にある試練

萩芒今宵は門を開けておく

衛兵は景色に溶けて門の前

わたしは風小さな門も通れます

門一歩出れば戦士の面構え

樹木葬決めて狭き門が続く

山門を出ると俗世をまた着込む

未帰還の門閉ざされた特攻機

復興の門出に凜と松の意地

迷い解け心の門が開く朝

母さんの門はいつでも開いている

秀句

気まぐれに天の水門開かれる

原発神話ガラー崩れた核の門

天国の門に踏み絵が置いてある

唐津市 仁部 四郎

三田市 上田ひとみ

奈良県 渡辺 富子

堺市 奥 時雄

大阪府 初山 隆盛

海南市 堂上 泰女

鳥取市 土橋 螢

尼崎市 長浜 美籠

大和郡山 坊農 柳弘

和歌山市 古久保和子

松江市 石橋 芳山

藤井寺市 高田美代子

大阪市 小谷 集一

青森県 松山 芳生

岡山市 工藤千代子

八尾市 宮西 弥生

枚方市 伊達 郁夫

多摩市 大竹 一良

瀬戸内市 東横ますみ

京都市 高島 啓子

弘前市 福士 慕情

弘前市 高瀬 霜石

「条件」

前 たもつ 選



信頼の証条件などはない
 条件はフクシマクリアして五輪
 核廃絶に条件なんて不要です
 おさんどんしますと彼のプロポーズ
 わが息子好いてくれればそれで良い
 愛ひとつ条件にしてゴールイン
 条件は愛だけですと若かった
 秋晴れに条件なんかいらぬ恋
 好きな人の頼みはみんな無条件
 明るくてプラス志向が条件だ
 生きる条件何があっても前を向く
 執念が悪条件に吉を呼ぶ
 無条件に好きになった吾木香
 条件は揃ったあとはやる気だけ
 条件もつけずに燃える曼珠沙華
 うっかりと条件出して火傷する
 親子でも条件つけて金を貸す
 息子には出世払いと言つてある
 母さんは条件なんかつけません
 募集には容姿端麗書いてない

唐津市	坂本	蜂朗
奈良県	渡辺	富子
貝塚市	石田ひろ子	
奈良市	米田	恭昌
堺市	奥	時雄
倉吉市	中村	毅
河内長野市	松岡	篤
池田市	上山	堅坊
橋本市	石田	隆彦
米子市	中原	章子
大阪市	笠嶋	恵美
生駒市	飛永ふりこ	
海南市	小谷	小雪
豊中市	池田	純子
吹田市	木下	敏子
倉吉市	岡崎美知江	
唐津市	吉富	節子
札幌市	三浦	強一
大阪市	太田としお	
四條畷市	吉岡	修

禁煙の条件つきで同居する
 条件を変えれば打てるホームラン
 条件が金でないからいとおしい
 幸せの条件いつもある笑顔
 条件は同じ球児の泣き笑い
 私の柩にノート鉛筆を
 山男の条件退き返す勇気
 条件を絞ると消えていくわたし
 案山子がばやく一本足の守備範囲
 フルコースお箸もつけて呉れますか
 元気でさえあればと願う呱呱の声
 条件にびたりとはまる小市民

佳

ウインクに条件反射してしまう
 一日にせめて五分はしゃべろうよ
 天国に行く条件は満たしてる
 無条件降伏赤ちゃんの頬っぺ
 東北の酒で三三九度祝う

人

お金なら平気 金属アレルギー
 無人島もいね一泊二日なら

地

天

大声が条件エール送り合う

軸

天国を求めイエスに辿り着き

藤井寺市	鈴木いさお
富田林市	山野 寿之
西宮市	片山 忠
豊中市	水野 黒兎
弘前市	富士 慕情
三田市	上垣キヨミ
大阪市	柴本ばつは
出雲市	竹治ちかし
堺市	内藤 憲彦
三田市	堀 正和
豊中市	松尾美智代
紀の川市	辻内 次根
枚方市	寺川 弘一
河内長野市	穂口 正子
三田市	田中 章子
羽曳野市	徳山みつこ
篠山市	遠山 可住
弘前市	高瀬 霜石
榎原市	居谷真理子
堺市	矢倉 五月

「余る」

徳山 みつこ 選



おもてなし少しの余裕みて用意
裾分けの裾分けをする夏野菜
飯要らんならば要らんとメールして
適齢期娘三人控えてる
余る程あつても欲の皮が張る
福などは入っていない余り物
たつぷりと余るほどあるベルトの目
有り余る肉を担いで生きている
手に余る事はお口でカバーする
有り余る古着蓄えてる昭和
不自由が恐くて余るほど貯める
てにをはの余る思いを句に畳む
余ってますあなた来るのを待ってます
合コンでひとり余ったお月さま
人知には負えぬ竜巻ゲリラ雨
燦燦と身に余る陽の中に居る
ああ余生頼る年金そっぽ向く
やりくりで妻は上手に余剰金
目に余るネット投稿ご乱行
暑くても目に余る臍ルック

堺市 矢倉 五月
三田市 上垣キヨミ
堺市 村上 玄也
大阪市 太田としお
河内長野市 谷 久美子
弘前市 稲見 則彦
西脇市 七反田順子
和歌山市 柏原 夕胡
大阪府 高木 道子
大阪府 野田 栄呼
奈良市 大久保眞澄
和歌山市 上田 紀子
橿原市 居谷真理子
鳥取県 齊尾くにこ
札幌市 三浦 強一
鳥取市 前田 楓花
塩竈市 木田比呂朗
大阪府 米澤 俣子
河内長野市 木見谷孝代
大阪市 伏見 雅明

人間の体余分なものはない

大物は余談の方がおもしろい

手に余る難問どれも先おくり

復興費が余るだなんてでなこと

人口は減るが社員は余る国

あり余る資格を持つて職がない

イエスマン仕事受けすぎ手に余る

ボケットの辞表文句があり余り

ライバルに余力の微笑見せておく

身に余る先ずそう述べる護身術

まだ少し余力残して荷を下ろす

自分史へ翔べる余白はあと少し

佳

越し方の山河余生はどんぶらこ

余白から夢が湧き立つ水墨画

子の未来余白は広くとっておく

ハイエナが嗅ぎつけてくる剰余金

政治家のレッドカードが目余る

人

身に余るお褒め頂き役が来る

地

日の丸の何とも言えぬいい余白

天

枯れ下手で五欲に燃えている余命

軸

お国の借金わたしの手に余る

西予市 黒田 茂代

河内長野市 梶原 弘光

唐津市 山口 高明

四條畷市 吉岡 修

堺市 奥 時雄

札幌市 小沢 淳

米子市 成田 雨奇

鳥取県 石谷美恵子

茨木市 藤井 正雄

唐津市 仁部 四郎

松江市 三島 淞丘

和歌山市 武本 碧

弘前市 福士 慕情

橋本市 石田 隆彦

東大阪市 北村 賢子

弘前市 高瀬 霜石

河内長野市 坂上 淳司

大阪市 坂 裕之

高槻市 初代 正彦

香芝市 大内 朝子

「ピント」

伊勢田 毅 選



少しだけピントがずれて楽な妻
難聴のピント外れた生返事
善人の顔にピントが合いにくい
すぐピント外す老女の愚痴話
あれそれで話のピント合うふたり
お彼岸へピントを合わせず曼珠沙華
金婚でやっとピントが合ってきた
ばやけると皆イケメンに見えてくる
ものの価値合わずに同居こばむ老い
日中韓ピントの合わぬ歴史観
九一四ピントを合わせず杉の碑
土俵際足にピントの行司の目
時々ピントをはずし遠く見る
ピントなら合わせることなきわが余生
ハイチーズ美人にピント合わせ過ぎ
聞き役のピントはずれの縄のれん
清張の0の焦点読み返す
少しだけピントずらして見る世間
焦点を絞ると垢がよく見える
ピンボケの二人になって日々平和

奈良市 加門 萌子
三田市 上垣キヨミ
富山県 有澤 嘉晃
シドニー 坂上のり子
奈良県 渡辺 富子
大阪府 高木 道子
鳥取市 春木圭一郎
海田市 小谷 小雪
弘前市 今 愁女
三田市 堀 正和
堺市 澤井 敏治
南あわじ市 萩原 狸月
羽曳野市 藤原 大子
鳥取市 夏目 一粹
倉吉市 中村 毅
篠山市 酒井 健二
河内長野市 藤塚 克三
松江市 三島 崧丘
神戸市 山口 光久
大山市 金子美千代

五十年添うてピントが甘くなり
隅っこの美女がピントを狂わせる
八方美人ピント合わせはお手の物
これ以上ピントは合わぬ差し向かい
意地と意地ピントの合わぬ我が夫婦
ピンボケで良かった皺が隠れてる
嘸み合わぬ話ピントを変えてみる
てくてくと歩く明日香に酔うピント
ピツタリとピント合わせた顔のしわ
同じ彩だからピントがびたり合う
せき込んでピントのずれてくる実話
今日もまたピントを合わせず眼鏡拭く

佳

課題吟ピント外れが良く抜ける
あんなにも厳しい母の眼が空ろ
宿敵のピントが外れ来たチャンス
ひと言が図星と突かれ目が泳ぐ
すんなりと糸を通さぬ針の耳

人

偏差値にピント合わせて逃がす幸

地

正鶴を射る見識のある視線

天

舞台暗転肅々進む再稼働

軸

突っこみとボケでピントの合う夫婦

吹田市 木下 敏子
和泉市 横山 捷也
神戸市 松井 文香
米子市 吉田 陽子
三田市 雑賀 一泉
和歌山市 喜田 准一
松江市 小川 注湖
八尾市 宮西 弥生
西宮市 足立 茂
和歌山市 武本 碧
西宮市 片山 忠
三田市 久保田千代
三田市 福田 好文
東大阪市 北村 賢子
高槻市 富田 美義
富田林市 山野 寿之
鳥取市 福西 茶子
海田市 堂上 泰女
鳥取市 吉野いさお
弘前市 高瀬 霜石

初歩教室

題一 望む

太田 昭

【意味の重複を避ける】

子供の頃、「富士山の山とか太平洋の海」などと平気で使っていたが、富士山は山であり、太平洋は海であるから、単に「富士山」「太平洋」と言うようにと先生から注意をされたことがある。大人になって川柳作句の世界につかて見ると、小学校の先生の言われたことを思い出す。

十七音しかない川柳では言葉を節約することが大切ですから、意味が重なった語は極力避けなければなりません。

角とれて人生やつと丸く生き

励ましに笑顔で話しに来た見舞い

灰皿がくすぶる煙まだ思案

これらの句は、内容的にはよく解る句ですが、角が取れると言うことは丸く生きることであり、励ますと言えは話すことになり、くすぶるのは煙にきまつているから、完全に言

葉が重複していることに気づいてほしい。

言葉は重なってはいなくても、最初の例句の「角取れても丸く生き」のように、句全体意味が重複している場合は、特に初心者には気づきにくいように思われる。

【少しの修正で良くなる句】

原 ほとほどの望みなら神聞くという	元 三
添 ほどほどの望みを神は聞いてくれ	
原 高望み捨てて余生を生きる今	一 泉
添 高望み捨てて余生を生きてゆく	
原 望み事多くて愚痴がよく出る	(見) 温 子
添 望み事多くて愚痴と入り交じる	
原 退院の望み出て来た三分粥	狸 月
添 退院の望みの見える三分粥	
原 街の灯を望む住所が安穩に	(富) 恵 子
添 街の灯を望むわが家は安穩に	
原 望み通り行かぬ現世を泳いでる	こずえ
添 望み通り行かぬ現世を泳ぎきる	
原 孫達は望む仕事に就職す	(山) 久 子
添 孫たちは望む仕事をゲットする	
原 わが子にあれこれ望む親のエゴ	(株) 玲 子
添 あれこれとわが子に望む親のエゴ	
原 五十路まで望むすべてが上手いき	開 子
添 五十路まで望むすべてが上手いき	
原 子供らが夢持てる国作りたい	利 子

添子供らが夢持てる国作らねば

原 オリンピック皆それぞれ望みもち

添 東京五輪皆それぞれが望み持ち

原 ダイエット望む女の摘み食い

摘み食いはいは誤字で「撮み食い」です。

添 ダイエット望む女の撮み食い

原 肩の荷を降ろしほのはの望む停年後

添 荷を下ろしほのはの望む定年後

原 還暦を過ぎてもオレは未だ背伸び

還暦ではありません「還暦」です。

添 還暦を過ぎても背伸びしています

原 息子の木思い通りに育たない

添 思い通りに育ってくれぬ息子の木

原 高望みしてないけれど縁遠く

添 高望みしてないけれどまだ一人

原 思うほど思ってくれぬ子の思い

添 望みほど思ってくれぬ子の思い

原 高望みしてたのかなかまだひとり

添 高望みしていたからかまだ一人

原 苦しくて望みは決して捨てません

添 苦しくて望みは捨てず持ち続け

原 一つの世も親の希望は子供たち

添 一つの世も望みをかける子供達

【添削】

国 和	忠 貞	武 人	昭 枝	秋 星	富 香	修
-----	-----	-----	-----	-----	-----	---

原招致劇望み叶った涙顔 安子
 添涙望み叶った招致劇 恵子
 原雨降れと願つて今は晴れろと言う(廿) 添降れと願ひ晴れろと願う人のエゴ 洋一
 原招致され望みかゝつた七年後 添東京五輪望みかゝつた七年後 高望みしていた頃が懐かしい きっこ
 添故里で高望みした若い頃 原おばあちゃん望み叶つて海外へ 満知子
 添望み叶い海外へ飛ぶおばあちゃん 原東京五輪メダル目指すと輝く目 亜希子
 添東京五輪メダルを目指す高望み 原仮設住まい一日も早い復旧を 紀雄
 添一日も早い仮設の復旧を 原税よりも給料上げを望む民 克三
 添消費税より給与上げと望む声 原望むこと貴方と私いつまでも 志津子
 添余生の望み貴方と私いつしよです 原同窓会七年後には東京で (渡) 修
 添同窓会東京五輪で会いましょう 原冬ベスト 新幹線で望む富士 喬
 添冠雪を新幹線で望む富士 原母の日の望みは顔が揃うこと 心咲
 添母の日は家族みんなが顔揃え 原老い暮し望み捨てたら明日が無い 正二
 添老いの暮し望み捨てず明日に立つ

原望みたい事自分にも望まれる 史郎
 添人に望めば即自分にも望まれる 添望むなら叶える努力おしまない 文香
 添高望み叶える努力惜しまない 原スクラムを組めば望みは果しない 一文
 添スクラムを組んで望みは果てしない 原鯉のぼり大きな望み飲んで立つ 治子
 添大きな望み飲んで泳ぐか鯉のぼり 原経験や望みもしない爪の跡 勝治
 添歳重ね望みもしない土踏まず 原もう何も望むことないできた妻 凱柳
 添もうなにも望むことない妻と居る 原宝くじ望みが列をなしている 妙子
 添宝くじ望みの列の後につく 原力尽き望む頂上御来光 冷子
 添老いた身で望む頂上御来光 (入選句)
 汚染水きれいな水になった夢 次の世もやはり女に生まれたたい りのり子
 風向きに望みをたくす風媒花 スッキリと美相を望むダイエツト (高) 道子
 届けたい夢と希望の近未来 身の程を知らず子供に望む親 英男
 東京五輪望み適えるアスリート 自分から望めば温い風に合う 律子
 恵

身の丈を越えた望みでやる気だす (前) 洋子
 リハビリの痛み望みに支えられ 高望み知つてくるくせに無理をいいのぞむたび容姿を変え富士の山 信二
 まだ八十路希望に燃えて老いしらず 望郷の念毎につのる震災者 絹枝
 比佐恵 登美子
 【佳句】
 もう一度全速力で走りたい (葛) 正子
 眼下に望む古里の灯が温かい 友子
 まだ女恋の望みは捨てませぬ 紀美恵
 もう一度鳴らしてみたい鐘がある 洋志
 いいんだよ望み通りに生きてみて (高) 弥生
 核兵器イヤだ平和を望むだけ とも湖
 【今月の推せん句】
 女です逝く迄花でありたいの 石田ひろ子
 逝くまでは花でありたいと望む女性の気持ち 次世代へ平和な日々をハイタッチ 齊藤宏子
 次世代の子供達に、核も借金も何もない平和な日々を引き継いで行くのは、現在の大人達の責務ではないだろうか。 野口晶子
 戦争を知らない親の平和論 戦争も敗戦も知らない親達が増えて来た。戦争と言う惨たらしさを知らない親達が唱える平和論には、何か物足りなさがある。

川柳塔鑑賞

同人吟 太田 扶美代

— 10月号から

川柳塔11月号発表の秀句鑑賞依頼の通知をもらい、勉強のチャンスにさせていただけようと、囲りの雑用を片付け、いつもは締切り間際にしか出せない川柳塔への投句も早々とすませ、原稿の届くのを待っております。

笑顔っていいな鏡に褒められる

小川 てるみ

トップにこんなに明るく、さらりとしていて、前向きだなと、さえ思える句に遇うと、後の五句まで同様に輝いて見え、六句の中から一句選ぶ作業に苦勞しました。

ただ二人なのに合意に至らない

森山 盛桜

多分どの家庭にもある、二人の意見のくい違いを書かれたものと思います。

後で思えばどちらでもいい事だったの

に、なんであんなに本気になったのかと苦笑い。

美しい女だ本を読んでいる

土用波今日は言わせてもらいます

居谷 真理子

言われてみればそう、少し俯きかげんに無心に本を読む姿は知的で上品、格好よく一言で言えば美しい。

土用波の方の句も、どちらか一句にしなければと言われたら困るほど好きだ。

誰に？何を言いたいのと興味を持たせ気持を昂らせ、土用波もまた、同じように何故、どういう意味？と考えさせてくれる、そんな大袈裟さがとても面白い。

機嫌よく遊んでるのも仕事です

谷口 義

大人しく、他人様に迷惑をかけないよ、うに、気さんじに遊んでいてくれたら、

変に少しばかり手伝って怪我などされるより、若い人達からはきつと喜ばれるでしょう。

その意味では川柳は最適の遊びかも。

無味無臭胃酸力りは飲み易い

寺川 弘一

まるで飲んだ事があるような書き方がいい、面白い。

僕はまだねじれてるのが生きる甲斐

藤井 則彦

きつと愉快で少しシャイな方なのだろう、お人柄まで想像してしまふ。

昨日捨てた方が大事な物だった

鴨谷 瑠美子

人間に置き替えて詠んでみると楽しい。指折って自分の歳をまた数え

岸野 あやめ

いつの間にこんな歳に……。

納得のいくまで数え直してください。

私にも経験があります。

約束はしない忘れてしまつから

早川 遡行

そうですね私もそしております、その

方が賢明だと思えます。

たいがいのことを夫には話す

高島 啓子

私もたいがいの事は話します。余り返事はしてくれませんが、それでも何か喋っていないと間が持たないのです。

髭生えた孫と距離が出来ている

山田 葉子

この句とてもよく解ります。

野球をやっている孫で落ち込んでいる事がよくあるのですが、悩みの幼さに対して、見上げるように大きな十八歳に戸惑ってしまいます。

八方美人顔が足りなくなりました

神夏磯 典子

まさに川柳ですね。

いよいよ足りない時は私のお使い下さい。

好き嫌いわぬ夫で箸つけず

西村 りつえ

男性のずるい所と思いませんか。

下り坂の景色も捨てたものでない

山本 希久子

肩の力もぐっと抜いて心も少しリラックスすると、見えてくる景色も、下り坂と違った楽しみ方となる。

うつかりと捨ててしまったメモの乱

黒田 能子

領収書の裏のメモを、領収書と一緒に捨ててしまい、とても後悔していたところ。メモの乱には気をつけます。

蟬のおしゃべり手紙書こうかな

牛尾 緑良

ひぐらしの声ききながら、とか蜩もそろそろ鳴き終えて、とかの書き出しで手紙が書いてみたくなる、優しい句ですね。

ばあちゃんちいつでも西瓜冷えている

古久保 和子

私がふる里にいた頃は、冷蔵庫などなくて縄で縛って井戸に入れて冷やしていました。今は無き故郷を思い出しました。

今から習つフラダンスは無理ですか

松本文子

どれ位ダンスが好きか、やってみた気がどれほどあるかという事でしよう。

文子さんのファイトなら大丈夫、実は

私も少し、ダンスではないけれど……
起きてまず花の機嫌を見て回る

黒田 茂代

同じ趣味かもしれませんが、花に触れていると刻の経つのが分らなくなります。ほどほどにせねばと思っているのですが。

伸び盛り回転寿しの皿の数

福士 慕情

子供達にも孫達にも勝てなくなった皿の数、何とかして少しでも食べさせようとしていた頃が懐かしい。積み上げた皿の数は子供達の成長の記録、嬉しい筈。

梅漬けを止めたら紫蘇がよく育ち

岩切 康子

要らない時は本当に困るほど出来るのですが、不作の時に限ってご近所に欲しいと、言われて困る時があります。

とてもとても実感のある句ですね。

ちなみに今年の我が家の紫蘇は異常気象の所為もあって壊滅に近い状態でした。

独断的な鑑賞もありましたがどうぞお許し下さい。

水煙抄鑑賞

— 10月号から

春 木 圭 一 郎

不器用で真つ直ぐ父という手本

栃 尾 奏 子

イクメンブームとも言われ、子育てに父親も励んでいる。子どもの頃から具体的に父親なりに①体を使った遊び②お風呂③読み聞かせ④外遊び⑤お出かけとかいろいろあるが、やはり背中を見せるのが大切なようだ。誠実に生きる姿を、子どもはじつと見ている。

しつかり者の妻のお陰で今がある

岡 本 勲

仕事に行き詰まって困り果てていた時「自分の思い通りにやつたらいじゃない。なるようにしかならないわよ」となぐさめてくれた妻。どれだけ心が救われたか。これからも感謝を込めて、温泉巡りをや対話を楽しみたい。

作者ご夫婦のご健勝を祈りたい。

夕方はシール貼る人追いかける

山 崎 早 苗

スーパーで閉店間際は割引となる。その時間がくるのを楽しみにしている人は多い。係りの人により次々とシールが貼られてゆく。入手しなかった品物を手にレジに笑顔が並ぶ。家計を預かる者にとり、この値引きはありがたい。

亡き後を言えば平気ですと妻

丸 山 孔 一

「あなたがいないと困るわ」という答えを期待した者にはショックである。まさに妻にとって、亭主元気で留守がよいの延長線上の話かもしれない。保険金をたんまり受け取って、手間のかかる連れ合いがいなくなつてせいせいとした妻の姿が浮かぶ。

修正液いらない日々を目標に

福 呂 秀 子

毎日が真剣勝負である。適度の緊張感を持ち、慎重にことを運びたい。

ところが人間のやること完璧とはいかず失敗の連続である。しかしたいがいのことはやり直しができる。大事なものは引き返す勇気があるかどうかである。

若き日の妻によく似たこけし買う

浅 井 公 平

大層喜ぶ奥さんの様子が浮かぶ。冗談にも君に似たこけしを土産に買ってきたと私も言ってみた。きつとスタイルの良い奥さんに違いない。

いつまでも、お二人仲良くすごしてください。

一日のリズムが狂う休刊日

赤 木 妙 子

ひいきチームが勝つた翌日は特にそう思う。深夜まで、あちこちチャンネルを回して、美酒に酔いたい者もいる。

一日のリズムの狂う、赤木さんの気持ちの分かる者が、大勢いる。

配達の人たちや新聞社の都合もあらうが休刊日をなくせないものか。

宿題が親の能力越えだした

坂 本 とも湖

子どもの宿題は、たいがい親が手伝って仕上げる。特に夏休みなどの長期休暇はそうである。

ところが問題は子どもの進級とともに中身の難度で在る。付いて行けるうちは良かったが…親も勉強である。



漢字には味がある

先日、テレビで「漢字の書き順を当てる」というクイズ番組を見ました。自信あり気な回答者が「えっ、そうだったの?」という場面がしばしばあって笑ってしまいました。かく言う私自身はまったく駄目で、小学校の授業をサボっていたのを今更ながら悔やんでいます。また、「筆順が違ふ」と字の形が整わない」という説も私の悪筆が証明しています。

このように書き順がクイズになるのは、間違っって覚えている人が多いということでしょう。次の2番目の句は今月号の「愛染帖」に入選のものです。寸評も併せてご覧下さい。

筆順をまちがえたまま母になり
筆順の通りに書く字が歪む
書き順がどうのこうのと言うお世話

河原 千壽
藤井 則彦
端河 潔

しかし、「書き順がどうのこうの」とエラーソーに言う人の中でも「鬱」の筆順を間違えずにサラサラ書ける人は少ないのではないかと思います。「鬱」は、常用漢字の中でも最も画数が多く、29画もありますので、私など筆順どころか文字そのものが書けません。面倒なので「ウツ」と書くのかと思うこともあります。が、「ウツ」よりも「鬱」のほうが一目見て理解できて、しかも「鬱」そのもののムードもあります。

鬱の字はやはり漢字がよく似合う
鬱の字を拡大鏡で確かめる
鬱という漢字覚える程使う
鬱檸檬薔薇を書いたら漢字通

辻内けんえい
尾沼 綾子
板東 倫子
村上 直樹

文芸に携わる以上は少々難しい漢字でも筆記できるのが理想でしょう。しかし、だんだん記憶力も減退して、覚えていたつもりの檸檬や薔薇も書けなくなってきました。それは誰しも同じですが、面倒だとか間違ひそうだからなどと安易にカタカナにしてはいけません。作品全体のムードを考えて漢字のほうがふさわしい場合は、辞書を引く手間を惜しまず、拡大鏡で確認してでも漢字で表記したいものです。

恋人の膝はレモンのまるさかな
恋人の膝は檸檬のまるさかな

レモンより檸檬の方が素敵です
睡蓮という字見ていて眠くなる

橘高 薫風
田浦 實
植原しげの

前述のように、漢字にはそれぞれの文字が持つ「味」があります。最初の「レモン」と薫風先生の「檸檬」を比べてください。耳で聞くと一緒ですが「檸檬」のほうがロマンティックなムードがあります。三番目の句も「睡蓮」の文字が持つ雰囲気をもよく掴んでいます。

もちろん、名詞はすべて漢字のほうが良いと言うものではありません。作品の内容によつては柔らかな平仮名や、外来語と明確に分かるカタカナのほうが良い場合もあるでしょう。

レンガ 煉瓦 トンボ 蜻蛉 コーヒー 珈琲
ビール 麦酒 サンゴ 珊瑚 カマキリ 蟪蛄
リンゴ 林檎 バリ 巴里 フランス 仏蘭西
右、それぞれ漢字のほうがレトロな雰囲気とか文芸の香りがあります。そのような味を出したいときにはカタカナは避けた方が良いでしょう。なお、平仮名のほうが良いと思われる副詞や接続詞については次回に記します



色景色におもむきよき津石の霜瀬高

奇数月の連載になります。

ルドルフの秘密の巻

(18)

日本人は気が早い。11月の下旬あたりから、クリスマス・ソングが街に流れ始める。

♪真つ赤なお鼻のトナカイさんは——で始まる「赤鼻のトナカイ」(原題は「赤鼻のルドルフ」)は、コミカルで人気がある。

サンタの櫓を引いているのはトナカイ。トナカイには角がある。トナカイはシカの仲間、シカのオスの角は毎年繁殖期を終えると落ちて、翌年の繁殖期の前にまた生えてくるという。つまり、オスに立派な角が生えているのは9月〜10月の繁殖期。メスを巡るオス同士の闘いに必要で、繁殖期が終わった年末から1月頃にかけて抜け落ちてしまう。

ここまで読んで、アレ? って思いませんか。

サンタの櫓をトナカイが引くクリスマス・オスには角が残っていないのではないかと。となるとルドルフ君、きみはオスではないのかい? と聞きたくもなる。

前述したように、トナカイはシカの仲間。シカのメスには角がないのは常識。わざわざ奈良へ確かめに行かずとも分かる。ところがどっこい。普通シカのメスには角がないが、トナカイに限っては、メスにも角があるというからややこしい。シカ界唯一の存在という。

トナカイのメスにはオスほど立派ではないが角がある。ただ、あるのは冬の間だけというからややこしいのだなあ。冬に角があるのはメスだから、サンタの櫓を引くのはメ

ス。ルドルフ君は男ではないってことになるわなあ。

ところがところが、メスは身体が小さいから労役には使わないという。じゃあ、サンタの櫓を引くのは一体どっちなのだ。もうチンパンカンパン。

正解はオス。ただ、オスはオスでも「去勢されたオス」なのだそう。去勢されると、冬でも角は落ちず、体格は普通のオスよりも大きくなるという。なんと、ルドルフ君は、ニューハーフだったのである。

映画「ローマの休日」のラスト。

オードリー・ヘプバーン扮する王女が登場する(ため息の出る美しさ)。記者席の1番前に、昨夜涙のキスをして別れたばかりのグレコリー・ペックがいてハッとする。

「訪問になった中で、どの都市が1番お気に召しましたか?」の記者の質問に、とりあえず無難に答える。

「何処の地も、それぞれに忘れ難く、比較は難しく…」ここで一瞬、間がある。そして表情は一変、輝くばかりの笑顔でこう答える。

「ローマです。何と申しましたがローマです」

誰か、僕に聞いてくれないかなあ。

「霜石さんはクリスマスチャンだそうですが、クリスマス・ソングで、1番好きなのは?」

「どの曲もそれぞれに素晴らしく、比較は難しく…(間をおいて)ルドルフです。何といっても『赤鼻のトナカイ』です」と、颯爽と答えるだろう。

ルドルフ君の秘密を知ってしまったのでねえ。

民族の詩歌 (17)

—『離騷』の反骨から

三好 專 平

中国からもたらされた漢詩は、貴族の間に広まり、「懷風藻」を生んだことは、以前ご紹介した。私家集でその点万葉集と軌を一にする。集最後の一絶

雲飛低玉柯
月上動金波
落照曹王苑
流光織女河

雲は低く枝に垂れこめ
月は金の波のようで
夕日は曹王の宴の苑
天の河のように美しい

くだって、『文華秀麗集』は、嵯峨天皇の勅撰による平安朝の漢詩集。七言絶句

寒林落葉前雨滴 点着閑庭不湿衣
閑道琤璫秋月暮 聖年宮樹待黃飛
(秋の景色の美しいのをたたえる)

この漢詩は、江戸時代には、武士階級の

必須の教養科目となり、そらんじられた。

しかし、揚子江流域の詩(楚辭)を取り入れるのには、熱心ではなかった。(その代表として、屈原の『離騷』『九歌』『九章』『招魂』などがある)が、その内容が、政治批判・権力批判に傾くものが多いために日本では敬遠されたのであろうか。ご承知のように屈原(BC343-278)は非常に剛毅な性格で、楚の懷王の懐刀であった。が、讒言を受け、懷王の死後(秦との戦いに敗れ)世を憂えて汨羅江(揚子江の支流)に身を投じた。江南地方は、当時、中原の国により、迫害・侵略されることが多く、それらは司馬遷の『史記』に詳しい。つぎは、『離騷』の一節、

靈氣既告余以吉 占歷吉日乎吾將行
折瓊枝以為羞 精瓊粥以為糧

(靈良し。吉日に出発し粥を糧としよう)

現代になり楚辭の批評・抵抗精神は陰に陽に日本の詩歌に影響を与えた。

『天香』の渡辺白泉の俳句より

戦争が廊下の奥に立っていた
夏の海水兵ひとり紛失す

玉音を理解せし者前に出よ

『反戦反核平和詩歌句文集22』より

九条危機彬の一句火のごとし
みんな夢灼けてころがる蟬の殻
八月や雀の居ない日本です
ダン吉 朱夏 千尋

現代川柳より(名前略)

手と足をもいだ丸太にしてかへし
玉砕の日の青空を誰と見た
血を血で洗うかつて五輪のあつた村
路郎の句より

見渡すとユダの心をみんな持ち
善人が滅びつつある寂しさに
学校の倫理でゆけば死ぬところ

日本語は懐の深い言語で知られるが、まず中国の影響を受けたのは幸運であったと言える。特に江南地方は当時仏教が盛んで、日本に齎された呉音(濁音・撥音・拗音)の影響は看過できない。飛躍的に日本語の幅を広げることができた。

絶筆 東野 大八

「雨の法善寺横丁」

エッセイ 早川 遡 行

絶筆となった東野大八の「雨の法善寺横丁」というエッセイがある。かつて私が所属していた柳誌に、亡くなる一カ月ほど前に編集部へ送られてきたもので、大八がこの柳誌に発表してきた実に九十を超すエッセイの中の一つである。

折しもNHKテレビでは、名作映画復活と銘打って「夫婦善哉」が放映されたこともあり、柳吉役の森山未来と蝶子役の尾野真千子がどんな演技を見せてくれるか楽しみである。森繁久弥と淡島千景とはまた一味違った新鮮な演技を見せてくれるに違いない。

そこで、東野大八と川柳塔の数人が雨の道頓堀を闊歩した時の様子を、大八のエッセイから見ることにしよう。

雨の法善寺は懐かしい所だ。
一昔以上にもなるかな、それ以来この

水かけ不動のお姿を拝したことはない。

法善寺母の袂の懐かしき 大八

を、幼児を脱けた頃合いに、初めて作った川柳句がこれ。その頃のおふくろは、髪を丸髷に結い、木綿の紺せもスツクリした船場の立派な御寮さんで押し出し充分だった。

「法善寺でつか、つい鼻の先やがな。じゃあ、みんなで夫婦せんざい食べに行こうよ」

板尾岳人君の発言で、西尾葉さんを筆頭に、橘高薫風、板尾岳人、谷垣史好といった川柳塔連のお歴々がゾロゾロ。

(何年ぶりかな、法善寺はー)

めくるめくネオンも煙るなかを見上げると、白く光る細い雨脚。

(雨の法善寺か、悪くないな)

私はその雨脚へ独りつぶやいた。

法善寺と言うのは、千日前通りを五十メートルほど南へ歩くと、「天竜山法善寺」という立派な石柱が立っている。ここから西へ入る小路と、これに並行するこの細路を合わせた一画で、現在では大阪の繁華街のミナミの象徴だ。一名「水かけ不動」さん。中心はこの仏像だ。

私は、岐阜はもととふるさとではな

い。育ちが伊予の大洲なのだが、生まれは大阪市東区久太郎町一丁目。すなわち、これでもチャキチャキの船場っ子なのである。

この船場の生え抜きのはんぶんが、四国も伊予の果ての伊予くんだりまで都落ちした理由は、私の実父が羽目を外した極道者で、その船場の跡目役たる父親が、その極道者故に、世襲の袋物問屋の跡目から義絶の憂き目に合い、玉道の番頭の家へ長のお預けの身体となり、そこから四国への転落コースへと踏み込んだという訳である。

「この方が、お不動さんです」

その声には私は眼をみはった。それは分厚い緑の三尊仏で、黒い円頭の二童子を従えた大きな本尊は苔の緑台と化し、その仏相は丸つきり見えない。私が少年期に見た頃とは丸つきりお姿が異なる。

お灯りを点し、火を点じたお線香の煙を懐にかき込むような仕草は昔と変わらないが、化仏の妖煙にまかれてでもいるような気分だ。

このあたりはやつと人が通れるほどの狭い通路で、人がひしめき合うような間を、けばけばしい灯やネオンが瞬いてい

る。このあたりには雨にしとど濡れた石の玉垣の低い石垣があり、そこには花柳章太郎、伊志井寛、水谷八重子の名が彫られてズラリと並んでいる。

「この文字は一字五円で彫らして貰った」と、鬼遊さんがにこやかに説明してくれた。

「さあ、ここが名物の夫婦せんざい屋」という岳人さんの声に、ふっと十代の頃の私が蘇った。昔はきれいな日本髪の姐さん何人も行き来していたが今は一人だ。この店は大阪人の織田作之助の「夫婦せんざい」が原作で、その頃若かった森繁久弥と淡島千景が映画と舞台で活躍した。妻子ある船場の若旦那柳吉と、曾根崎新地の仲居の千景と好き合って駆け落ちするが、好人物で気が弱い柳吉を支え通すヒナ子役の千景が、愛想をつかしながらも、とことんよく仕えていくさまが胸を打つ。

「おははん、頼りにしてまっせ」の柳吉の名セリフは、当時を風靡したもののだが、私はその柳吉に父の若い頃の姿を見た。

法善寺横丁には織田作之助の文学碑がある。

―生き暮れてここが思案の夫婦善哉の句碑の台石に、次の建碑由来がある。

「小説家織田作之助は、大正二年十月生魂神社の近くに出生。彼は郷土大阪をこよなく愛し、大阪を離れなかった。「夫婦善哉」を始め数多くの名作を残したが、昭和二十一年一月、読売新聞に「土曜夫人」を連載中、胸部疾患で三十四歳の若さでなくなった。その命日が十日戎の夜であった。

昭和三十六年、友人藤沢恒夫 識

この法善寺横丁には、織田作之助の文学碑のほかに、平田春一の歌碑と、西田当百の川柳句碑が仲良く並んでいる。当百の句碑を抱え込んでるのは正井丹吾亭。これは大阪弁で、肥桶のことを言う。この主人は、その肥桶を商売用の用語にしたのが、かえって上々で大いに繁盛した。

上燭屋ヘイヘイヘいとさからはず

の川柳句であることは周知の通りである。

この句碑は、昭和五十年記念。同三十四年之建とある。彼は番傘同人であるが、肥桶を表看板にした、人を食ったところが当たった訳で、食い倒れの大阪人の氣質をよく出しているところが、この街らしい所以であろうが、とにかく、

変わった看板と句であることは疑いなしだ。

以上がエッセイの全文であるが、文中の（ヒナ子役の千景が）とあるのは間違いで、これは蝶子を大八がヒナ子と勘違いしているものと思われる。また、蝶子は（曾根崎新地の仲居）になっているが、曾根崎新地の芸妓が正しいのではないかと思う。

知ってか知らずか、

頬かむりのなかに日本一の顔

という岸本水府の句碑が道頓堀にあるが、これには大八は一切触れていない。

水府の句碑は法善寺横丁から離れていて、確かに見つけにくい場所ではあるが、川柳人なら誰しも知っていることである。二十年前のことになるが、私もこの句碑を見つけるのに大変苦労した想い出がある。

いずれにしても、道頓堀は歩くにしても、食べるにしても、シヨツピングするにしても、退屈しない楽しい街であることに間違いない。「夫婦善哉」も始まったことだし、今一度、法善寺横丁界限を散策に出かけて見るのも面白いかも知れない。

をんねん

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

砂かぶり着物姿が気にかかる
大切な一票だから老母つれて
勝手です待ってた夏にもう嫌気
降り続くどしゃぶり雨に驚いた
暑い夜夢つぎつぎと忙しい
おさまった豪雨後にゴミの山
往く先が分かつてるから丸くなる
ターザンにみんな拍手をしたもんだ
神さまの笑顔いつかは会えるだろう
放射能しぶとくふる里が遠い

いずも川柳会(鳥根) 竹治ちかし報

断捨離よ人を粗末にするでない
悲しみの向うで回る風車
手間ひまの梅干し粗末にはできぬ
競い合うライバルがいて蘇生する

宏之 幹啓 礼子 登美枝 正二 ひろし 多美子 公一 未延子 紀の治

章峰 寿美 玲子 桂子

左手と右手で競うボール投げ
一粒のご飯粗末にできぬ老い
死に急ぐそこまで競うことはない
メダカすいすい明日のことは考えぬ
風穴の冷たい風をもち帰る
戦中派粗末に出来ぬ癖がある
アメンボの足をうらやむのろまです
冷たさがあなたの魅力信じ切る
ライバルと競う川柳おもしろい
もう誰もとまってくれぬ冷えた指
競い合う友がいてこそ出る元氣
軽やかにすいすい飛ばす口八丁
逆風に向かい心に闘志わく
知るまではすいすい揺れていた薄
努力より結果を競う棒グラフ
すいすいと行くスパーと病院と
すいすいと素通りをするいい話
わたくしも明るい方に向いて咲く
暑い夜に冷たい話聞いている
すいすいと事が運ばぬ落し穴
横向きのままでいから側にいて
ふらふらと妻の灯りに足が向く
言い過ぎた風向き読んで許し乞う
喜びの夢に冷たい汗をかく
競うこと止めた羨むのも止めた
最初はグー競う先には運もある
最後まで競う根性だけは持つ

敬子 蘭水 文子 湊丘 きみえ 歌子 治代 煩惱児 英男 志げる 多喜 妙柳 健柳 喜子 孝亮 あきら たえこ 熊四郎 美千代 房緒 佳子 ひろし 博子 祐次 ちえ 徳子 テル子

もう一度やり直そうと前を向く
雑念を捨てたらすいすい飛べました
前向きに生きてでっかい夢を追う
都合良い時だけ神に向く心
和歌山三幸川柳会 武本 碧報
花火する約束だった子の寝顔
ご先祖の花火の跡か天の川
追憶の中の手花火淡いまま
線香花火つきてポトリとただ無言
大花火上げた男の正念場
群衆に媚びて消え行く身の花火
胸の中湿ったままにある花火
打ち明けて心残りのない花火
海亀の浜まで響く遠花火
大輪を誇って鳴らす太太鼓
脹らみをもたす老後のプログラム
面取りをしても崩れるプログラム
寄せる波地球太古のプログラム
視界良好わが人生のプログラム
プログラムに花を咲かせたのはあなた
落とし穴見抜けなかったプログラム
来賓の人数多い式次第
東大へ羊水からのプログラム
いち抜けて無口になったプログラム
プログラム無しで気楽に傘寿生き
街の灯にビエロの涙見てしまう

美江子 弘子 夢生 ちかし 碧報 愿 美子 昭枝 きく 町子 富香 次根 八重子 義泰 元三 高夫 イセ 豊 みね ひろ子 義雄 幸子 孝子 菜摘 弘子 和子

晩学の灯は両の手でいとおしむ

鍵っ子の窓は灯りを数えてる

喜怒哀楽来し方写す走馬灯

この山を越えれば里の灯が見える

人の恋うあかりへ虫も寄ってくる

店灯り見れば逢いたくなってくる

掘り当てた化石に明かり点される

高齡の街にちろちろ灯が洩れる

うす味できらわれるほど生きてやる

病み上がりやと出て来た飯の味

谷水の流しそうめん夏の味

持ち味が響き合ってる五目鰯

山からの風は緑の味がする

蜂蜜をちよつと加えた妥協案

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

リモコンの操作加減で和を保ち
リモコンに慣れ足の退化が気にかかる
リモコンで育ちエンピツ削れない

森羅万象自然の神がリモコンだ

天からの遠隔操作ままならず

ハヤブサはリモコン友に無事帰還

押してはならぬ核のリモコン鍵かけて

地図にはないが立派な地蔵様

安全運転するカーナビのやさしさよ

ひとり来てふたりで乗るんだった地図

スッピンのお露出過剰にさせる汗

ひたいの汗はみせびらかすよう落ちる

碧

章子

倅子

絹子

起世子

美羽

幹子

典子

当代

昇

純子

智三

保州

汎美

慶子

敬子

輝恵

弘子

半徳

幸子

房子

蘭幸

静風

京子

笑子

スケジュールこなしてこちよい汗だ

プロボースグラスの汗を拭きながら

この汗が何よりほくの答えです

汗臭い男に似合うアルマーニ

一歩ずつレシビを増やす鍋みかく

見上げれば一番星と目が合った

脱皮する蟬も蝶々もワタクシも

コツコツと積んだ小石が光り出す

ゴーヤ茶をたつぷり作り夏を越す

雷鳴へ肚をすえてるところです

ゆらゆらり金魚の私語を聞いている

DNA短所が一緒不思議だな

味の無い水に美味さが詰まってる

松露川柳会(鳥取)

山本

正光報

一代の恩背負って身へ重い
打ち水のかわりに撒水車が通る
打ち水へのどかな手花火懐かしむ

打ち水へさわやかな風涼を呼ぶ

柄杓もち打ち水姿風情ある

のき下へ打ち水しては客を呼ぶ

暖簾揺れ打ち水かけて庭の花

打ち水へしばし涼しい庭に佇つ

火照る身へ打ち水浴びて鎮めたい

打ち水へ下駄の素足に涼感じ

南大阪川柳会

津守

柳伸報

温暖化ずれて地球が狂い出す

志華子

栄恵

淑子

力

寛

歩美

規代

あゆみ

厚子

栄香

比呂子

千代美

史子

一路

久子

鈴枝

豊枝

智恵子

弘子

静江

公美枝

雄々

和代

正光

森

茜選

うつろいを捉えて見ればシャボン玉

荒れた字だ友に何かが起つてる

晴れる日へ耐えねばならぬ雨の音

流れ星きつと嬉しい知らせだよ

この土の道しか知らぬ土に生き

二十四時間何と長い日短い日

蟬しぐれコンダクターはどこにいる

卓袱台をなぜかひつくり返せない

生かされているから猛暑にも耐える

青い空なんと遠くへ来たもんだ

佳句地十選

(10月号から)

加島 由一 選

さりげなく痛いとつく負け惜しみ

一億が活断層の上にいる

謙遜をしつつ披露の武勇伝

職活に参考書より化粧品

美しい花はピークを知って散る

また飲もうあれが最後になるなんて

花火見る約束浴衣縫い急ぐ

ああなんていい風だるう君と居る

イエスまでアタック続く僕の恋

クラス会お久しぶりと火花散る

恵子

シマ子

昭枝

久芽代

島

一路

直子

芳山

千歩

年代

活断層すれないようにお静かに
若作りすれた仮面を取り替える
同居には意見のずれも糧にする
顔の部品一つずれてもいいません
印刷がずれてるお札宝物
論点のずれは気にせぬナルシスト
恋をしてだんだん嘘が上手くなる
乳房の手だんだん落ちて児は眠り
だんだんと腕上げてきた孫の駒
生き甲斐の酒もだんだん減った祖父
だんだんと可愛くなつてくる曾孫
歳重ねだんだん多くなるヨイショ
だんだんとエスカレーター好きになる
勝ち残りだんだん友が遠ざかる
片言と手話でだんだん打ち解ける
嫌いだと言われだんだん好きになる
だんだんと歳とる娘嫁き遅れ
泳がされているとも知らぬ女癖
泳ぎもせずブランド水着競うてる
秋灯下書物の海を泳ぐ夜
芋の子を洗うプールの監視員
太陽をひとり占めしている下着
下着つけない動物たちの美しさ
カラフルなステテコ何故か落ちつかず
電車には下着姿で乗らないで
ないはずだ娘ステテコ先に穿き
父の下着箸でつまんでいる娘
突然の訃報夜明けを待たず来る

祥 昭 更 紗 タカ子 一 歩 直 子 たもつ 栄 子 シマ子 修 庸 佑 柳 右子 あや子 勝 弘 弘 子 柳 伸 昌 紀 克 己 恭 昌 あさ子 ルイ子 なぎさ 典 子 ばっは 忠 昭 和 雄 正 春 郁 夫 歌留多

癌告知不意に見えなくなる明日
高知川柳社 小川てるみ報
値上げへの文句も消える熱帯夜
ぎらぎらの夏と契った稲の出来
この夏も踊りへ燃える人が居る
歯ごたえのない溶けた真夏のチョコレート
サングラス外して本音語り合う
初盆が続くあの世の賑やかさ
川柳塔なら 坊農 柳弘報
この歳で力出し切るなんて野暮
セーブなど余裕ないから全力で
感うこと何もなかった君一途
ブータンは寝心地よいとお釈迦さん
ぐーたらと過ごす無駄汗はかかぬ
人はみな迷いはじめて日を拝む
毎日の努力ピンチに物を言い
物ころつた時から恋おんな
エアコンを効かせ助手席大騒
戸惑いの君のえくぼで拭い去る
三次会付き合うべきか終電車
失う物無くてピンコロ待つてます
通勤に立って寝る技身についた
ミニスカが男の視線惑わせる
四分六のセーブ乗り切る腹の虫
お互いがセーブしている嫁姑
夏休みママの小言はセーブして

楓 楽 和 広 てるみ 久 娘 暖 哲 史 京 子 眞 澄 彰 治 優 博 一 怜 依子 仁 史 郎 克 己 次 郎 ふりこ 郁 夫 紀 雄 修 弘 風 比 呂志 恭 昌 保 子

よく遊びよく働いてよく眠る
おだやかな眠り給わる糖衣錠
優柔不断回転ドア抜けられぬ
思惑を見透かされてる誘い水
古書店の棚でほこりと寝る鏡花
平和の鐘感うことない終戦日
時刻表と本とミニサイズの旅へ
溜めている台詞無形の不燃物
男やろ泣くな愚痴るなごまかすな
年取った犬も旦那もよく眠る
原発のセーブ思惑交差する
モナリザのほほ笑み人を惑わせる
万物の上に君臨する驕り
運というチューブ小出しにして使う
五欲セーブしたらのつべらぼうになる
生まれて死ぬ神のみが知る物語
感いなど無い百歳の自然体
手を握る睡眠業になつてやる
富 柳 会(大阪) 古田 千華報
人気ある内は次々寄つて来た
実直な言葉はカットされている
神さまに死角はないと信じてる
残像が大手広げて老い持たれず
ハサミで切れない絆持つ二人
神様の死角でそつと会う二人
彼の君とわらない仲で蛇の目傘
死角から呼び出し状がくるいのち

いさお のりこ 柁 子 柳 弘 成 子 洋 子 信 子 眞理子 樹 萌 子 朝 子 將 文 國 治 完 次 理 恵 富 子 良 一 辰 雄 和 子 ア キ 深 雪 柳 子 壽 峰 常 男 静 知 未 知

大切な内緒を風にぬすまれる
騙された顔が映った水たまり
三つ編みをバツサリ切つて少女羽化
干し草の死角で淡い淡い恋
ぶちまけた本音があつて今がある
体内に滾らせている正義感
前髪を真つ直ぐ揃え恋一途
葱刻む母には母の音がある
見えないと思つて捨てたかゴミの山
今更にカットできない絆たち
遣り繰りをつけて頂上まで登る
目覚ましが素敵な夢をカットする
内緒ことだった秘密がもう洩れた
内ポケットに昔気質を忍ばせる
耀いていると死角は見えぬもの
ひと味を足した私に落し蓋
その内に的を絞つて矢を放つ
リセットの瞳に見えてくる死角
リウマチの痛み忘れる回り寿司
汝はアザミ風評通り生きている
凜と咲く花と人生有るがまま
内心はもつと一緒に居たかった
ホップステップ知的な薔薇が咲きました

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

信子 彦次 寿之 欣之 高鷺 慶子 よしみ 伸雄 文重 千恵 武人 清 正治 奏子 澄子 登子 紅紫朗 佳子 葉 千華 七朗 森子

雷に鳶は消えたが舞うツバメ
震度七狼少年上回る
青い鳥今が幸せかも知れぬ
夫病むと日びがこんな忙しい
川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報
ツアー客ひやかし廻る店の中
ひやかしがセクハラですと騒がれる
ひやかされその気になってゴールイン
冷やかしも悔しさもある職場婚
にんげんをからかうように絶滅種
ひやかしたまま通り過ぎ去るこの世
虫干しの習慣さえも忘れられ
玉音を聞いたあの日の蝉しぐれ
おれに似た一人娘に虫がつき
たそがれて虫も寄らない枯尾花
少年の夢虫かごに詰まつて
妄想の虫をネットの中で飼う
夏休み昆虫達の大厄日
人類は爬虫類より恐ろしい
ありの列おらが大将子分連れ
サ行三列力行二列だと口説く
一列に歩く蟻にもあるおきて
行列をしてまで食べるエネルギー
一列に京に向いてる平家塚
ニッポンジンは行列が好きらしい
配給に並んだことも語り草

弘 放任 よしみ ひかり 善江 陽之助 美美子 紀の治 重利 耕治 泰山 久芽代 貴恵 久江 みち子 たけ代 石花菜 紀美恵 玲坊 美代子 公恵 重忠 芳光 滋

赤札に神様達が列をなす
笛の音で一列になる薔がある
断崖に向かい人類列を成す
蟻の列もう帰ろうよ日が暮れる
三流の列でしこしこ生きている
恥ずかしもなく善人の列にいる
熱い恋よりも涼しい愛ほしい
わたくしの恋した人はお父ちゃん
十七歳淡い切ない恋だった
太陽に恋して地球燃えている
友情が恋に変わった星月夜
恋をして乙女殻から抜けて出る
川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報
若いふりしても体がついてこず
君と会う日の雨雲があぐらかく
気落ちした日から悪運はなれない
記念碑に祖父の功労刻まれる
運転手へ命預ける日が増える
孫作る宇宙船には夢いっぱい
少年の笹を刻む里の山
ワンマンで走り続ける縄電車
だんだんとカレーが甘くなつていく
霜降りを作り出させる黒和牛
森林を根こそぎ削るゲリラ雨
ちぎり絵の魅力に踊る白い指
思い出埋める老後の設計図

清 三津子 野蒜 玲子 節子 美知江 道子 勝憲 悦子 龍枝 美ツ千 和子 一湖 龍馬 吞舟 つとむ きよし 綾子 ひとし 則彦 芳生 一吞 井蛙 花匠 黙人

ねぎ刻む音から妻の機嫌知る
井戸端会議亭主を刻む笑い声
人呑んだ海へがっくり陽が落ちる

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一粋報

親を看る話リタイアなど出来ぬ
おとでいで赤字の農を継ぐと決め

一筋縄解く秘策を母は持ち

八十歳の心に住んでいる少女

沈黙の海が痛みを知り尽くす

横向きに歩くが蟹も一筋だ

一筋に君を想ったのは昔

削られてげっそり戻る予算案

リタイアに未練タラタラ愚痴こぼす

次々と日本げっそりするばかり

愛一筋と言った頃が華でした

おとでいもそれぞれ違う味があり

何時まで生かす神に問いたい百三歳

塩飴を舐めて酷暑に立ち向かう

時として優しいことが怖くなり

余命はばかり折り合いつけている

性が合いあなた一筋五十年

げっそりとなる程するなダイエット

げっそりも恋の病と胸をなで

一筋の道も晴れたり曇ったり

リタイアの決定権は妻が持ち

真つ直ぐに農一筋と生きた自負

隆樹 慕情 姦 洋々 とも湖 一揺 美恵子 無限 清信 地佳平 凱柳 圭一郎 回春子 一京 惣子 昌鼓 金祥 善夫 蟹郎 節子 正子 美佐枝 孝二 秋月 春名

前ぶれもなくリタイアは来てしまう
道一筋極め叙熱の列の中
受験勉強一筋恋は封印だ
大丈夫などと他人は軽く言う
嫌なせ血は争えぬおとでい

げっそりと痩せてきました預金帳

リタイア後は禁酒禁酒と無茶を言う

一筋にガンバレた頃懐かしい

一筋を通すおとこの怖い顔

つれあいと一筋同じ道を行く

一筋に付いてきたけど来る別れ

家計簿がげっそり痩せてゆく不安

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

隕石と知って突然宇宙見え

隕石はロマンチックな重い石

決心に背く弱い人間だからなあ

煽てには乗らずタンポポ風に乗る

わたくしに背いたままの高いびき

蹴躓き若しや隕石千鳥足

ぐったりと寝そべり汗も拭えない

隕石もそうリストラに合ったんだ

煽ててるのって楽しくしてあげる

目印は一番背の高い人

綺麗きれいと煽てて花を輝かす

あの家に背いてからは運がない

ぐったりかイスタンブール・マドリッド

鉄拳の群れが原発止めさせる

妻 子 穀 由美子 雅女 和子 重忠 振作 弘康 茂登子 行男 房江 一粋 鈴 和 蟹 茶子 盛桜 弘子 はるお 孔美子 富久江 (西) 美子 美ツ千 八重 完司 蟹郎

煽てられ座ってみたが出ぬ言葉
流れ星今日は地球の石となる
飲んで寝るぐったり垂れる腹廻り
背くこと覚えた頭三歳児

隕石に似ている僕の顔がある

隕石は降らず飛行機つらくし

観光の目玉隕石鎮座する

ぐったりと疲れ過ぎると眠れない

母の愛少年背く闇はない

魂もぐったりしてる孤独感

お節介しすぎぐったり油切れ

浅はかだった親に背いて家出して

月一回検診に行きぐったりと

児が巣立ち開けたこぶしに何もなし

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

例外の中耐えて来た戦中派

例外の話は外にすぐ漏れて

勧誘の電話は都合も考えず

都合よくいかぬが世間の風でした

またしても都合によりと逃げられた

生き方に変化をつけて楽になり

嬉しい日足踏まれても気にならず

御都合はいかがやらしい電話口

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

三歳児母に学んで先ず仏間

親の脛かじる物だと子は思い

実満 照彦 いさを 美代子 小鹿 くに子 すみれ (若) 和子 かおる みさ子 満 惣子 露子 彩子 かつ子 英子 はるみ 好栄 恵美子 澄子 ちよえ 昌 松風 高明

フランスへ交換留学志織ちゃん
かけ違う子育てボタンよ終戦日
法律がかゆいところでプーメラン
あのクラス先生替わり大変化

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

よろずの神聞けぬ願いもあるでしょう
不信心恥じつつ今日も神頼み
神様も御機嫌斜め荒れ模様
マー君を神の子と呼ぶ世の平和
ウメキタは迷路さつぱりほどけない
ほどけない筈だったのに君とほく
ええ加減ほどけて欲しいくされ縁
組んだ腕ほどいて王手勝負あり
わだかまりふんわりほどく里なまり
小包をほどく両手がもどかしい
「もう」よりも「まだ」で生きたい老いの道
昨日からまだ燻っている喧嘩
未だ若い言われて背筋ピンと伸び
血圧はいまだ上下エレベーター
双子でも人生変わるまだともう
「まあだだよ」隠れる場所が見当たらぬ
バスの遅れきつかけにして友が増え

川柳同好会みらい(鳥取)吉田 陽子報

面の皮ますます厚く生きて行く
合格の厚い封筒とび跳ねる

實 蜂 朗
四 郎
節 子

久 子
勝

郁 子

黒 兎

春 代

純 子

正 代

長 一

扶美代

幹 治

美智代

順 子

久仁子

信 男

柳 童

桂 子

陽子報

一 聴
あゆみ

神様に「待て」と試練を与えられ
若い時孤独死なんて聞かなんだ
程々にせよと妻言う五七五
無駄使い出来る身感謝しつ暮らす
夫婦とは対照的で丁度いい
生活のリズムを崩す待ちぼうけ
やつと呼名思わず声が裏返る
穏やかな風ゆるやかになる心
緩やかに上がる物価にマヒしそ
歳増して緩やかな日を望むなり
体罰じゃないと類つべの蚊をたたく
老いの幸明日も仕事が続いている
喜怒哀楽同じところで湧いてくる
年老いて半分出来てまあまあだ
まあまああの出来も他人の厳しい目
今日は勝つ折ってグーを握りしめ
恥の数指折りながら寝返る夜
忠告は柔らかくしてさしあげる
オンオフの切り換え早いものが勝つ
無闇には疑うまいぞ夜の月
終活をしておこうかな検査前
明日からの視野には老父まん中
じっと目を閉じている刻めぐるもの
靴紐を解きたい旅はまだ続く

葵 純 宏
和 之
茂 子
温 子
章 子
美恵子
信 子
恵美代
智恵子
敦 子
嘉 子
みち子
勢津子
慶 一
百合子
安 子
華 蓮
和 代
菜 美
一 眸
遊 子
はるお
公 弘

川柳さざやま(兵庫) 北澤 桐民報

メモ用紙書いた自分の字が読めぬ

久 子

乱雑な机上わたしの別世界
評判を取る特産の味が生き
無駄はぶき高望みない平和な日
年輪は後姿に浮いて出る
びつたりと弥陀の心に添うて生き
ひたひたと老いがよせくるそわずとも
断水に心が痛む水の恩
稲の穂を供えトツプの秋祭り
とりあえず一人で出来て幸福感ず
酒がビールビールで夏が近く
虫の声きいてはつとす長月夜
運命と片付たたくない以後余生
台風も空の旅して憂さ晴らし
とりあえず元気で老いの守備につく

美緒子
純 子
美紗子
哲 男
稠 民
真 由
勇

岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

あやまちを許してくれる家族です
あやまちを深山にこもり懺悔する
天空のどこかで睨む親父の目
親と言うデカイ宝に支えられ
百歳の親が子供を案じてる
親子だな喧嘩の後も笑い合う
二度出征親を泣かせた里の駅
家の子に限って親は信じ切る
失礼と赤信号を越えて去り
おっと失礼嬉しくてつい触れちゃった
失礼な奴だことばに毒がある

菖 子
一 粹
完 司
忠 良
節 子
た ぬ
重 忠
幸 子
蟹 郎
圭 一郎

謝りが届かぬまで天に逝き
こつそりと飲んだお酒にとどきだ
失礼し横になりたい高齢者
あら失礼私だつてオンナです
あやまちを庇つて小さい嘘が増え

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

八十もさすが美人のみだしなみ
ちぐはぐな会話が続く老いふたり
時々は刺激求めて街に出る
トロフィーの高さまちまち背比べ
写すふりピンント後ろの美女に向け
秋風にもう忘れてる炎天下

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚恵子報

愛燦々老いても気分女学生
軽はずみ呼んだら野辺の蝶が舞う
半年の無事のお札に輪をまたぐ
食欲がストンと落ちたむし暑さ
仲間とは下手なお経で通じ合う
夕風が今日の終わりのいろになる
飛行機雲今日はどの国行くのかな
なすきゅうりトマトも二本無農薬
御手の物俎板たいて夏料理
今時の儲け話にや裏がある
これ見よと握手を交わす中と韓
歳月の流れよ日々音立てて

長柳会(大阪) 坂上淳司報

盆正月長男の嫁独楽鼠
五輪招致日本の熱意伝わった
暑い夏のらりくらりと日が暮れる
軋けたつて赤チンですむ昭和の子
怪我をして学んだ事が宝物
顔じゃないお金と決めてする見合い
怪我予防貯筋コツコツ積み上げる
乗り過ごし醒めた処は操車場
時掛けて日にち棄てなかつて怪我
遭り過ごした小言がじわり効いてくる
一階と二階で夫婦丸い午後
反乱のリビアに散った子の命
怪我なんてへつちやらと言ひ顔しかめ
五輪決めた熱い視線のおもてなし
だらだらと過ごし暑さに溶けていく
熱い思い出し尽くしたか蟬の殻
媚もせず怪我もしないで無位無冠
陽炎と過ごす旗振りつらからう

川柳塔まつえ吟社(鳥根)相見柳歩報

ライバルの視線は遥か雲の上
ライバルの歩幅大きく前を行く
ライバルがいるから魔女も頑張れる
小学校のあのライバルは今どこに
ライバルの声は対岸にも届く

ライバルの一步手前で踊っている
ライバルは時計の中に隠れている
ライバルはみんな友達みんな敵
整形をすれば私もいい女
プチ整形ところが揺れる右左
整形が進んで顔に味が無い
松の木の気持ちは聞かぬ剪定師
整形しまたやり直しもとの顔
注ぐ度に話だんだん乱れてる
薔薇の花すこし乱れて欲しい夜
昭和史を一心不乱生きた自負
来客に慌てふためく乱れ髪
太古から女の乱は命取り
乱切りにされ踊つてる鍋の中
温度計乱高下して夏終える
反乱に遠くひとりのいわし雲
年金日とことん飲んでいいですか
はだしのゲンとことん読んで語ろうよ
新製品とことん見ては買うの止め
母ちゃんとはとことんモンベ生きた
子の悩みとことん聞いてやれる親
忙しさ通り越しててんでこ舞
忙しい私軽がるゴミ捨て場
命の手前の返事忙しい
忙しく口論してる夏と秋

川柳塔さかい(大阪) 村上玄也報

税務署を脅えるだけの脛の傷

幸安 清帆 幸安 淳司 孝代 武男 正博 弘光 芳野 史 正美 久美子 隆彦 登美子 和代 敬二 靖博 柳歩 久枝 柳歩 昌枝 ちえこ 千里 草庵 弘充 凉子 町紅 芳山 ちかし 久絵 寿代 美智子 禮子 知恵子 注湖 幸子 聡美 たけし 幸代 左余 久子 とも子 雅明

脅えるなあと十年は賭ける老い
負ける方が多い私の勝負服
貧乏に脅えることは今はない
東京の五輪見れるか友と賭け
音もなく追ひ抜く自転車は凶器
あれほど泣いたが皺でごまかせる
お互いに保険仲良く暮らして
改憲論とても危うい賭けに出る
幸せになりたて離婚決意する
寝た切りがベッドで株価聴いている
悪行もナマンダブツで御破算に
隣国に核に脅えて核を持つ
アスリート泣いて祝って五輪の輪
精検に脅え不安が深くなる
散りかけたバラが脅えている別れ
熟年の離婚も賭けと憚らず
又明日に賭けて今夜は寝るとする
茜雲なんと綺麗なご挨拶
奥さまと一緒に来いと医者が言う
命賭けるほどの仕事はしていない
この命賭けた主治医と生きている
誰よりも私を知っている命
恋に賭けいつも振られてばかりです
終活をポツクリ寺に賭けてます
妻忘れ子忘れやがて皆忘れ
出来るなら介護受けずにポツクリ死
鉛玉を賭けて廊下に立たされた

冬 虹
みつこ
朋 月
時 雄
清 晋
日の出
月 子
愿
世紀子
五 月
像 山
久 子
健 吾
唯 教
和 夫
さくら
かりん
扶美代
和 幸
玄 也
篤 子
のん子
舞 夢
としお
誠 一
俣 子
敏 治

人生のサイコロをふる二度三度
暴力の教師不安に脅えてる
あまちゃんの訛り言葉にゴーサイン
介護保険の世話にならずに逝きたいな
真っ当に生きて脅えることはない
脅されてサブリメントを買わされる
川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報
相合い傘信号待つのもおつなものの
口出さず子のシグナルを見極める
欲少し色気少しの心電図
妻からの信号無視で来た不幸
信号の無い樹海ですご用心
信号無視孫に説教されている
言わずとも分かっているなど無茶を言う
信号は出していたはず藤圭子
青信号ランドセルの子手を上げる
温暖化赤信号と天の声
子等のため島に一つの信号機
停電の街に手旗のはなれ業
ままならぬ信号遅刻してしまふ
シナリオに無い信号に追い越され
言いたいことあってひとりの手を上げる
言い方は優しいけれど顔は鬼
黒を黒と言って出世には遠い
言うときくけどワシは悪くない謝らん
孫が言う爺ちゃん百迄頑張って

好 清
八千代
ばっは
天 笑
篤 子
満知子
公 平
ばっは
舞 夢
裕 之
昌 紀
温 子
安 代
直 子
妙 子
芳 香
柳 弘
ダン吉
日の出
ゆみ子
勝 弘
安 昭

泣き事は言わぬと決めた青い天
言うことに通訳がいる孫ひとつ
孫の名を今だに全部言えぬ爺
虎の巻手に新人のガイドさん
次世代が平和ガイドを継ぐ決意
カーナビが未知との距離を縮めます
親のガイドそれで深みに転げおち
カーナビに小さな秋をセツとする
肩触れる度にびりびり傘の中
父の前あのビリビリ感が好きでした
さりげなく触れた古傷また疼く
びりびりしてる母さんから飛び火
こいさんが荒れると犬が小屋を出ぬ
良い所悪い所は紙一重
びりびりの時間が終わる手術室
悔しさをビリビリさせている次点(矢)
川 柳 大 阪
森松まつお報

朝 子
克 己
桃 花
公 誠
郁 子
志津子
シマ子
由 一
賢 子
典 子
千 代
かりん
半 銭
順 子
義 泰
五 月
美 花
公 平
まつお
柳 昌
功
芳 香
紀 雄
鉄 心
和

空財布まさか論吉が寝てるとは
捜し物まさかのとこで笑つてる

(奥)五月

童巻のまさかが急にくる恐怖
冷や汗をかいてだんだん成長し
汗臭い男にふつと男見る

朝子

やりとげた今日一日のシャツの汗
晩学に程好い汗を惜しまない
冷や汗がタラタラ妻の倍返し
いい汗が立派に男を磨きます

温子

個性消しカメレオンにはなれないな
風読んで動く個性は大きらい
自惚れが過ぎると個性風化する
オーケーもノーも言わんと黙ってる

比呂志

それだけの個性大事に仲がいい
かまい過ぎ後で気に病むお節介
山頂でうれい汗が光ってる

万紗子

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造 報告

善純

千羽鶴折って折りの人となる
過去はみな美しくあれ走馬灯
川柳が作った友はよくしゃべる

喜楽

先ず三日生きのびる策立ててある
仕合せは自分で作り掴みます
役立たぬよう願って詰める非常食
四万十が記録作つたこの暑さ

柳弘

古里は人影はなく星溢れ
落とした財布探しに行つて足に怪我
栗の飯湯気も供えて母の秋

笑風

美津子

復興で作る未来の足がかり
はやはやの新婚家庭居せぬ
できたてのはやはや蓄いじらしい
程々に生きてる今日を良しとする

遼子

災害の寄付金宙に浮いたまま
邪魔になる負けず嫌いの習性
悔しさをバネに奈落を這い上がる
ぼろぼろの育児ノートに愛が沁む

光久

隣からマツタケ二本いい人や
乗り越えた猛暑に命ある感謝
喜びも愁いもほろ苦いノート
はやはやの頃はひたすら前を見た

わこ

雨が降る原爆の日の今日も降る
列島は気象災害勢ぞろい
保育器の孫の鼓動と響き合う
丹誠をこめたはずでも曲がり茄子

弘子

人間は頑張っている試作品
こつこつと人生ノートうめてきた
黒豆をどうぞ美白の肌を作ります
水引いてゴム長二足逆さ干し

折杭

責任をいくつはたしてきた白髪
思惑と別な悲しい妥協する

文香

創るよりも続けることが難しい

一徳

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦 報告

じろう

かずお

話の輪外れぬように読む雑誌
インスピレーション湧いて積木を組み立てる
この時世返金なんてほんとかな
暗闇を透かせばほんと見える明日

庸佑

愛の鞭創造力の芽を千切る
ほんとだよ言った男はすぐ逃げる
シルバーになり仏の微笑解りかけ
汚染水早止め競技あつて欲し

郁子

美味求心創作料理妻自慢
創造と破壊が生んだ近代化
本当の汗を知らない机上論
銀の匙幸せ付けて贈ります

歌留多

銀髪のもりの髪が生えて来ぬ
くるくると流しそうめん夏おわる
幸せはこんなもんだと日が暮れる
楽しいと思うことみな栄養素

正彦

ほんととなら赤門くぐる筈でした
オッケーです保護者よりとの子のメール
丸が好きだから線引きは嫌い
あめつちのはざまに人は創られた

公彦

シルバーには縁がなかった戎橋
神様が創った顔だ我慢する
あなた見る対角線にいつもいる
又来たと言つて嬉しなく隠す父

武彦

又来たと言つて嬉しなく隠す父
お茶だけで済まなくなった窓ごっこ
ラストダンスあなたと踊る銀の靴
生真面目が直線ばかり引きたがり

幹治

千鶴子

雀舎

健二

美智代

京都塔の会

樹本 宏子報

和解する覚悟の電話かけ終る
遠景ばかり見るくせついた老いの坂
ご先祖の景色が眠るダムの底
誤解とけ心ほのほの灯さす
箸泳ぐ流し素麺夏景色
わだかまり解けてすつきり湯につかる
仏壇にいまもばつちり母がいる
向日葵の笑顔が解く夏のうつ
さすが棟梁見ごとに合やす柄と穴
周辺の看視カメラが解いた謎
むしやくしゃを解いてくれたシューベルト
頑張って三保の松原生き返り
遠景に笑む母がいる盆の入り
暑いのは毎年なのにきついとし
解答はひとつであってほしいなあ
ヒールはきばつちり決めて初デート
夏の星座神のロマンを解きあかす
母の風景遠くになった割烹着
熱中症マウンド降りる子の無念
夕景をちよちよ歩く天花粉
僕だけの絶景を持つ散歩道
景勝地ゲリラ豪雨に荒れ果てる
ばあちゃんに景色二の次グルメ旅
誤理解けはつと見上げた青い空

朝子 五月 福子 欣之 満子 宏子 葉子 めぐ みどり 弘子 英旺 泰夫 則彦 啓子 牛延 かずお 弘之 益子 文代 万紗子 さゆり 保子 求芽 義昭

君のジョーク緊張を解く思いやり
父と子のもつれた糸を母が解く
誤理解け互いに絆深くする
ハイタッチ孫がおかわりするカレー
方程式解いて息子を黙らせる

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

九条のお蔭晩酌できてます
バラ一枝棘は抜かず贈ります
人間のエゴでブチンと切る小枝
来し方のチョンボころろ笑つて
楽しげに手話で会話がはずみます
マンジュシヤゲ一足先に秋が来る
ハルカスの秋のオープン待ちわびる
手の内を見せてすんなり裏をかく
気になってやはりあなたと手をつなぐ
また一人希望が散ったトルコの地
来し方の岐路で拾った一行詞
花占い当たらなかつた人が来る
野仏の御手にすがっているのち
枝の張り陰で支えるのは根っこ
奥の手はタンスの中の埋蔵金
振り上げた手を下ろせないオバマさん
生命線東京五輪見られそう
来る来ない秋のスマホは無口です
にぎにぎの出来たおててが自己主張
街灯も瓦礫と化した闇の街

ふりこ 比ろ志 庸佑 美津子 福子 峯二 信二 奏子 堅坊 和枝 紀乃 祥昭 武昭 良一 のぶ久 雀舎 隆昭 忠昭 和雄 直子 蕉子 高鷺 壽峰

街灯が消えた明日も職探す
甘柿を枝から貰う陽の恵み
街灯へ集まる虫の不登校
街灯の死角に潜む魔の触手
お借りした男を返す日が来たわ
よう来たなと迎えて呉れるかなあの世
来る者は拒まぬ風が透き通る
ケタイから読書週間やって来る
届かない枝に真つ赤な花が咲いている
糞虫も枝を選んでぶらさがる
生きのびて復興五輪見届けん
妻の手の届く範囲で生きてます
綱取りの夢はバルト海に消えた
人災を重ね重ねてレベル3
街灯にシューシャインボーイ居た戦後

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

ダン吉 穩夫 秀夫 敏子 真理子 たかこ 柳弘 信子 廣子 克己 たもつ 一志 いさお 勝弘 哲男 あかり 扶美代 光男 ちづる キーキー 絹枝 喜代子 清之 悦子 龍一

僕のヒントで成功をして今上司
地獄絵図ヒントになって罪を吐く

シルク
弥生

もやの中見えそうで見えないヒント
脱税のヒントを税務署で拾う

六点
フジ子

場違いの席へ呼ばれて畏まる
呼ばれてもここは降りてはならぬ駅

一步
瑠美子

おめでとう東京五輪勝ちとつた
母鳥を呼ぶ雛鳥の健気さよ

いさお
尚男

秋の空小鳥よびこむすずのねが
ふるさとの名を呼び親に思い寄せ

雄太
美代子

ミヨちゃんと呼ばれた様な気がした
八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

森子
紀雄

焼きもちも焦げ目も二人三脚で
奇数月金欠病に見舞われる

朝子
賀世子

蜘蛛の巣が宝石となる雨上がり
退院が決まり慌てて行く見舞

清
加央里

白を着て崩れることのない素顔
風蝕の崖で巣作りする二人

高鷺
慶子

薄紙を重ね重ねて今平和
古巣には今日も折りが座ってる

賢子
寿之

病には負けぬ気迫をもてくる
たつぷりと時間をかけた愛の嵩

常男
壽峰

浮雲にフツと溜息吐いて秋
焼けこげたあとばかりある世界地図

草風
欣之

焼玉エンジン響かせ夫婦船帰る
木犀と黙礼交す朝歩き

草風
欣之

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

わたくしが脱ぐとブルーイングの風
欲望は広がり視野は狭くなる

芳山
くにこ

なまはげの仮面を脱げば好々爺
森英恵よりユニクロの服が好き

玲子
寿代

森の朝騒ぎはじめたのは二流
一流でないから出来る好き勝手

博子
照彦

田舎には田舎の二流気楽です
三流に落ちないようにならめいて

大鯰
和子

太陽と地球と月は家族です
孫の夢一肌脱げぬ不甲斐なさ

恭子
石花菜

敬老会ボーイコットして桃狩りに
情熱を脱いでゆつくり湯につかる

麦青
幸子

B級のグルメを並べじげおこし
秋夜長うたた寝をして深夜便

雄大
けいこ

二流には及ばない我下流です
扇風機首振り過ぎて入院中

風露
由紀子

お化けより怖い私の物忘れ
鬼の面脱がしてくれた美女の酌

重忠
鈴野

名店の訳あり品を買ってくる
ハングリー知らぬ若者離職する

すみあ
仁美

北枕に寝ても異変は起こらない
タコが小さい二流のタコヤキ屋

完司
正和報

川柳さんだ(兵庫)

堀 正和報

強くあれつついついコーチの手が伸びる
章子

章子

何事もひとりで決める独り者
賠償で人の命が決められる

歳子
キヨミ

百歳のアスリート夢真つ只中
目配せに気付かず調子乗すぎる

順子
宣子

敬老日誰も何にも言うて来ず
指を折り首をひねっている夜長

淑子
一子

夫婦とはめんどくさいと知りまし
ゆつたりと白い絵本の喫茶店

ひとみ
ちあき

どうでもいいこと決定権は私に
涙腺が合図しているアンコール

真由
菜々子

敗戦のお蔭で謳歌する自由
見落した合図で未来棒にふる

朋月
光久

軽井沢でラケット振った過去がある
松茸は出ましたかしら待ってます

武彦
千津子

たおやかに秋へ飛び出す塩むすび
金星にうれし涙の大相撲

ヨシエ
野薫

ゆつたりはやはり我家の狭い風呂
日替わりの気分が暮らすノ天気

徹見
富夫

医者からの意味ある言葉合図かな
決めたこと政権替れば知らぬ顔

和雄
つな子

田舎つべ米と味噌汁お漬物
ウォーキング噂の二人間に消え

晶子
恭子

招致後はやたらに走る人が増え
目で合図愛はただ今進行中

廣子
雅子

日本の行先決めた八咫鳥
百歳を越える長寿で町が出来

俊昭
雅尚

東京五輪オールジャパンでやりまっせ
八十路越え素敵なシニア目指す日々
七年は生きると決めた寝たつきり
新聞の文字まで臭う汚染水
王さんの記録破った飛ぶボール

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

山崩れ必死に走る蝸牛
焦るまい残る余生は風まかせ
尺玉も無念の涙福知山
尺玉が夏の夜空を独り占め
いい話少しじらせてから言おう
焦らないみんないっしょに歳をとる
セシウムが流れる海に魚住む
お人好しいつも誰かに利用され
向い風ばかりに出会う求職者
戦争の今も語部終戦日
一言が時に心を傷つける
間近より遠くの花火おつなもの
長男が手足に使う次男次女
鯛の干物土産に買った喜ばれ
転んでもただでは起きぬ子に育ち
猫さんに負けていません魚好き
政権を握ったからの居丈高
秋刀魚漁秋の匂いを連れて来る
再開の握手交わせぬ計の知らせ
火花には桜と同じ無常感

雅司 一泉 好文 忠 正和 章司報 美代子 泰子 みつこ 敏 扶美代 かつ美 ちづる ヨシ枝 獏 杳 美喜 雄太 フジ 高鷺 アヤ子 シルク 悦子 いさお 久仁子 庸佑 章司

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

吊り橋に度胸の有無を試される
嫁姑今度も僕が橋渡しし
橋渡ししてる恋人取っちゃった
八百八橋出合いと別れ数知れず
橋のない川を渡ってから大人
サッカー狂空宙蹴って気を晴らす
やつたぜと拍手に無情オフサイド
類に日の丸孫とサッカー視てる幸
サッカーにも蹴鞠にも燃え古都に住む
伸びる芽を摘んではならぬおもちゃ箱
がらくたも宝も同居おもちゃ箱
釣り道具あれは天狗のおもちゃ箱
思い出の玩具今でも棚の主
ズバズバと言うてオモチャにされている
おもちゃ箱にあらず私の書斎です
後片付け教えなかつたおもちゃ箱
力士よりエキサイトする砂かぶり
イブシロンさて何の葉だったっけ
素麺が少し残って夏終る
残像の儚い過去を懐かしむ
オリンピック世界注視のおもてなし
オリンピックライブで見た頑張りう
「トウキョウ」と半世紀経て五輪の火
二日酔い妻の言葉で娘が叱る
雨も程々ほとほと困るゲリラ雨

浩二 けんえい 舞夢 すみ子 楓楽 公平 蕉子 桃花 富子 照子 捷也 志華子 知之 日の出 眞澄 昭 善之 恭昌 義 集一 弘子 紀子 満作 正雄 みつ子

六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 毅報

もの忘れほとほと自分いやになる
洗濯を亡母そっくりの手が畳む
緋の衣亡妻がまとった彼岸花
守らねば絵に描いた餅ですルール
賑やかなテールブルだったあの頃は
残像を集めて父の喪が明ける
古机今じゃ川柳ひねり出す
相合傘机に彫って冷やかされ
引出しに潜む癖ある諭吉さん
目を閉じて思い出色になる机
何をしに降りて来たかとまた二階
嫌なこと全て忘れて明日を見る
物忘れまだまだそんな歳じゃない
忘れません恩にきますとそれつきり
ありがとうを忘れず生きる終の章
何もかも忘れてあげる手切れ金
忘れようとする程記憶よみがえる
にこやかに忘れ上手を演じてる
忘れまい素敵な親が居たことを
ワンテンポおくれた老いのもどかしさ
ゴーイングマイウェイなら負けてない
これ迄のテンポのように生きられぬ
テンポ良くいけば花です人生は
日本中ゴリン五輪と山車を押す
嫌なことだんだん忘れ丸くなる

希久子 美穂 毅 光久 能子 無限 妙子 茂 武臣 博史 洋次郎 保雄 康子 寿朗 利彦 武彦 浩司 義博 千賀子 弘子 政一 ひとみ 勤 弘 盛夫

六人で一人の孫をあやして
心地良い敗北明日の糧にする
カーナビと妻に委ねてゆく旅路
赤トンボ黄金の波を乱舞する

作業服きちんと畳む退職日
高値でも口が秋刀魚を買えと言う
死ぬなよが別れの言葉クラス会
風立ちぬ巨匠最後となる机
師の真似をしながら作るオリジナル
琴の音に安らぎもらう山芦屋
気休めを自分に言って負けている

楓 楽
美恵子
ひろ
洋一
宏造
繁義
和朗
文香
忠貞

ローズ川柳会(兵庫) 木村貴代子報

四季の国やつとこ秋の来る気配
ぶどう狩り我が少食をくやむ帰路
哀しくてそして愛しい貧乏性
わくわくと待てどロケット揚がらない
手も足も今のところは動きます
お持たせのぶどうと昔話する
老いらくの胸のゆらぐをどうしよう

米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

お供えが空箱になり盆を終え
夏休みラジオ体操影ひそめ
暑い夏体温合わせ目が回る
クーラーで暑さしいではととする
さすがですおだてられたら舞い上がり
十七夜窓からしのぶ花火です

宏之
礼子
正二
登美枝
ひろし
幹啓

もう着られないと妻が言う赤い服
あれこれと飼って別れて哀もある

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

露ほども記憶がないと老いの知恵
露草の覗き込んでる石仏
良い句だと思つていたに露と消え
ボランテア露程の事喜ばれ
災害に静かな露は忘れたり
旨い話二時間後には露と消え
今日生きる露の命と知りながら
いもの葉の露で墨する星祭り
逢いたいな背中ぞくぞくする人に
崖つ淵ぞくぞくしながら下のぞく
札束を欲がぞくぞく包み込む
夏かぜか私は馬鹿で引かぬはず
火炙りの刑で鈍った石あたま
はたもちは腕が鈍つて半殺し
太陽がなまる身体をまた攻める
感動も悲哀も鈍るお年頃
トンチンカン鈍る頭で今日を生き
イチローはベンチ入りでも鈍らない
せめてものあなたへ愛の掛けこば
病む妻をせめて達者で看取りたや
残したいせめて子孫に不戦はね
髪染めてせめて若くと髪を梳く
亡き母へせめて見せたい娘の晴れ着
行き違ひせめてメールのひとつでも

公一
未延子
節子
萩江
風露
日出子
瑞子
玲子
康子
酔芙蓉
鬼一
英子
茶子
悠子
石花菜
次男
祐子
和子
由紀子
けいこ
雄大
重忠
智恵子
恭子
美代子
貞子

不義理詫びせめてもと花そつと置く
消費税せめて年金上げてから

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

ふらふらになつても猛暑乗り切つた
呆けないで百歳ハードルは高い
怖いけれども見たい竜巻
守るものあるから力湧いてくる
勤務中ふらふらしやんと五時男
ふらふらと老いの樹海の半世紀
ふらふらと言葉の森へ迷い込む
ふらふらしていると風来坊になる
ひれ酒とふぐおいしいふらふら
ふらふら入る旅の蕎麦やは旨かった
ふらふらでやつと帰宅の家出猫
余命短し嫌いな自分いとおしむ
ふらふらとしようだが詩人です

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

孫が言う好きと嫌いは紙一重
古写真片づけられず眺めてる
自己主張過ぎて落ち入る自己嫌悪
眺めてるだけで手がぬえ宝石店
夫婦善哉あんな亭主はわて嫌い
孫登寝癖の馬鹿たれ起こしたな
死んだふり苦手で目立ち嫌われる
病癒え感謝でみてる注射あと
好き嫌いはつきり言えた若い頃

陽
あやの
克衛
泰子
昭好
敬子
やすの
みちる

高級魚チラと眺めて鯖を買う

薫

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

待人が雨のすだれの向うから
貧乏をくやみうらんだ向学心
ひと駅と思い歩いてへとへとに
財布にも耳を貸そうかムダ使い
悔やんでも元に戻れぬ下り坂
長生きを悔やむ夫をたしなめる
傘として長靴はいいて一万歩
へとへとになるほどやったことが無い
ブラックレイン大地にも心にも
自画像が死んだら売れるかも知れぬ
ありありと花芽が伸びる雨上り
恋の花咲かないままで終りそう
終の日も悔い無き道と言いつける
初めての富士やま登山雨あがる
ベスト尽した結果だ悔むことは無い
体調で西瓜の味をきく八百屋
一万歩決めた初日が千歩ちよい
久方に銭湯でみる富士の山
もう暴れないでとそつと浜に立つ
はいはいと言えばすんなり済んだこと
へとへとと身体ころは軽くなり
へとへとだが頑張ったねと秋の風
風呂あがり裸であける発泡酒
後悔の深さ蛇口がしまらない

里江 龜与子 千代子 よしひさ 泰子 柳明 寛十郎 洋子 ひとみ 幸香 雪菜 和子 富夫 靖鬼 五月 祐康 野薫 かずお キヨミ 菜々子 哲夫 朋月 ヨシエ

世界へは安全ですと啖阿切る
勝手なことと言える間はある寿命
雨音が羊の数を狂わせる
亡き犬とよく来た道も久しぶり
雨垂れに無心の森へ誘われる

城北川柳会(大阪) 近藤

心に満ちた言葉になつて口をつく
ホットスポット今福島が痛ましい
スポットを浴びて笑っている遺影
オール3スポットライト浴びられず
スポットに程遠く居て風を詠む
巧妙な暗示にかかる欲の皮
立ち位置はライトのあたるちよつと外
磨いたらお返しくれる窓がある
国に暗示かけて年金増やせぬか
冷戦が再び始まる予感
ビチビチの日もあつたらう冷凍魚
暗転はスポットライト浴びてから
古屋でも磨き甲斐ある床柱
絶景を眼鏡磨いてもう一度
贗作と知らず家宝の壺磨く
猜疑心強く暗示よせつけぬ
怪談斬おどろおどろと打つ太鼓
そこだけは決して触れぬ親心
冷淡にされたお人に倍返し
聞く耳を磨くと人が寄つて来る

正和 美龍 見清 哲男 比ろ志 正報 たもつ 志華子 郁夫 勝弘 柳弘 倫子 実 弘風 ルイ子 縣作 典子 仁 あさ子 榮子 克己 朝子 公子 堅坊 賢子 義昭

面倒見る主治医の眉が微動する
女偏サブリメントで磨かれる
冷たさに出合ふたんびに成長す
夢食べているから元気で傘寿
世直しの眼鏡磨いて書くコラム
冷や飯を喰つて人間しゃんとする
暖かい言葉冷たい脳溶かす
冷飯粗だがみな高い志
念のためデートの前は歯を磨く
原発の汚点世界の目が光る

洋志 麗 杵香 集一 野鶴 美智子 修 いさお 満作

事務所便り

歳を重ねるごとに先ず何事も億劫になる。句を作るのもシンドイし投句も面倒。と自分を許しているうちに気が付けば播り鉢の底にいます。そうなるって言い上げるのに何倍ものエネルギーがいる。

見た目年齢は、貴方は少年の面影を残し、貴女は若く美しい。どうか毎月の句会に投句に、積極的にご参加下さい。塔誌を見る楽しみもきつと倍加するはず。尚、毎月二十七日に必ず発送する塔誌の為に、十五日締切りはくれぐれも厳守して下さい。土日祝祭日に当る時は十三日または十四日が締切りになります。ご留意下さい。

(山岡富美子)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸 和 田 川 柳 会	16日(土) 14時締切 油断・色気・鍵・イメージ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川 柳 塔 みちのく	16日(土) 16時開場 切る・いらいら・傾く	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 藤 井 寺	17日(日) 14時締切 橋・彩り・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	17日(日) 13時開場 わき役・まとまる・きつと	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	18日(月) 13時40分締切 寄せる・民話・ぬらりくらり 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	19日(火) 13時30分締切 酒・ピンク・進む・まるまる 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	22日(金) 10時開場 正念場・大切・人並・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川 柳 塔 すみよし	23日(土) 14時15分締切 横・見つめる・押す	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	23日(土) 12時30分開場 郵便・葉・横	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20番地 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日) 14時締切 紅葉・口実・トラブル・初心	綾南の森 公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうも 吟 社	24日(日) 13時30分開場 へこむ・身勝手・てっきり	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	25日(月) 18時開場 箸・忙しい・ますます・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松 露 川 柳 会	25日(月) 19時30分締切 友・希望・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口1294-2 山本正光
京 都 塔 の 会	吟 行 無 鄰 菴 26日(火) 11時集合 へとへと・修・連なる	京都市国際交流会館 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	2日(土) 14時締切 古い・戻す・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
城北 川柳会	2日(土) 13時開場 添える・目障り・きっちり・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉 川柳会	2日(土) 14時締切 ぱっさり・逆らう・あれこれ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 ねやがわ	3日(日) 14時締切 マナー・味方・値切る・道楽 チャンネル・投げる	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 塔な ら	6日(木) 14時締切 譲る・楽・言葉	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳 塔さ かい	8日(金) 13時開場 乗る・無視・折り句=かはい	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川柳会	8日(金) 14時締切 流れ・柿・無駄・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	9日(土) 14時締切 縮む・福・共感	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳 塔打 吹	9日(土) 14時締切 角・遠い・ゆうゆう	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳 塔まつ え	9日(土) 13時45分締切 雲・捨てる・まんが・レンズ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川柳会	10日(日) 14時締切 晶屑・次・座る・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
川柳 わかやま 吟社	10日(日) 14時10分締切 兼 題=羽・じっくり・遠い 課題吟=裏	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桑原道夫
西宮北口 川柳会	11日(月) 14時締切 温泉・包む・アップ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 あまがさき	12日(火) 14時締切 信じる・一時・むかむか 自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	12日(火) 13時30分締切 宇宙・破る・おかしな	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

柳界展望

商工会議所4Fホールで開催。事前投句者三三七名(うち当日参加者一五〇名)。同人の秀句次の通り。

★「美と川柳X」親月の

夕べは9月19日、兵庫県

立美術館で開催。参加者

68名、同人の特選は次の

通り。

落ち鮎の四、五匹月の

匂いする 両川 無限

★吹田市民川柳大会は9

月22日、メインシアター

に於いて開催。同人の秀句

親として硬軟両様の構

え

池 森子

掴まえた愛をギユギユッ

と固結び 山野 寿之

★川柳カード第2回大会

は9月27日(土)、たかつが

ーデンにて開催。参加者

85名。同人の秀句。

学校を覆う大きな病垂

れ

高島 啓子

★第21回和歌山県川柳大

会は9月29日(日)、和歌山

チャンスだが罪の匂いも

少しある 鴨谷瑠美子

★小島蘭幸主幹は、朝日

ひろしま柳壇の選者を十

月から担当。

★山本三郎氏(理事・寝

屋川市)の旭日章受章記

念祝賀会は、十月五日大

阪キャッスルホテルで開

催。本社より楓楽理事長・

岳人相談役はか三名が出

席。

★前田尋画伯の「なにわ

大阪風物詩」きり絵で捉

えた大阪の色」は9月20

日・23日まで、大阪市立

住まいのミュージアムギ

ャラリーで開催され好評

を博した。

▽芳志御礼△

○故石田清泉氏ご遺族よ

り金一封拝受しました。

長岡京市

日置みどり

▽出版△

◇成田雨季氏(同人・米

子市)は、詩集「女たちへ」

を上梓。A5判、126頁。

「宇宙から来た」など28

編の詩を収めている。頒

価二千円。

▽訃 報△

■津川紫見氏(同人・松

江市)は9月16日逝去。

行年71。通夜・告別式に

は三島松丘理事、竹治ち

かし理事、石橋芳山理事、

松本知恵子さんが参列。

■峯村勲弘氏(同人・高

槻市)は9月30日逝去。

行年77。通夜・告別式に

は西出楓楽理事長、片山

かずお常任理事、杉本義

昭氏が参列。

▽新誌友紹介△

香川県 田口 彦六

紹介者 木本 朱夏

大阪市 大治 重信

紹介者 古今堂蕉子

鶴田 遠野

西宮市 奥田みつ子

黒田 能子

常任理事会 11月7日(木)

新同人紹介

山根 妙子

楓楽・遠野・蕉子推薦

片山かずお。

▽お詫びして訂正△

10月号 P46上段16行

目、手と足も出ないこけ

しと見つけおりこけし

を。P105中段18行目、文

子↓文香。P112下段3行

目、風ぐるま遠き日唄ぶ

子守唄の作者は寿子さん

でした。

臨時常任理事会 9月24

日(火)川柳塔まつり最終

確認②合同句集チラシ最

終確認③定例確認事項④

各部報告⑤その他

次回臨時常任理事会

10月22日(火)PM13時30分

常任理事会 11月7日(木)

AM10時

▽名簿訂正△

○P34 常任理事に追加

和歌山三幸川柳会句会400回 及び
川柳誌「七面」通巻600号
記念句会へのお誘い

日時 平成26年1月31日(金)
開場 11時 出句締切 正午
会場 1時
場所 和歌山商工会議所 4階特別室
(和歌山市役所西側)

参加費 2000円(弁当・記念品・発表誌呈)
当日納付してください

題 各題 2句
事前投句 「記念」 三宅 保州 謝選
兼題 「和」 田中 みね 選
「歌」 岩佐 ダン 選
「山」 川上 大輪 選
「三」 日野 愿 選
「幸」 田中 山海 選

事前投句 平成26年1月11日(土)必着
勝手ながら欠席投句はご遠慮ください

投句先・問合せ先
和歌山三幸川柳会 事務局 古久保和子
〒640-8111 和歌山市新通7丁目17
TEL. 073-423-8930

京都塔の会 500号記念合同句集
『千社札其之八』発刊と
第七〇回 秋の吟行句会 ご案内

月 日 11月26日(火)

集合 午前11時
地下鉄東西線「蹴上」駅改札前

行先 蹴上駅～無鄰庵(むりんあん)～
京都市国際交流会館(昼食・句会場)

兼題 「当日雑感」「へとへと」「修」
「連なる」 各題3句

会費 4000円(当日いただきます)

申込締切 11月20日まで 榎本宏子あて
〒607-8231 京都市山科区観修寺堂田70-16
TEL. 075-591-0424

★無鄰庵 明治・大正時代の元老 山県
有朋の別邸

全日本川柳誌上大会(柳多留第17集)

課題と共通者(各題2句・連記)

「ライバル」 小金沢綾子(東京) 宮村 典子(三重) 共選

「食べる」 堀江 加代(千葉) 久保 青花(広島) 共選

「世」 浪越 靖政(北海道) 伊達 郁夫(大阪) 共選

「灯」 植木 利衛(茨城) 長江 時子(大阪) 共選

「箱」 今田 久帆(静岡) 村上 水筆(兵庫) 共選

第二次選者 本田 智彦(大阪・津田 暹(千葉)

佐藤 美文(埼玉)・永石 珠子(長崎)

大西 泰世(大阪)

参加費 2000円(投句料・「平成柳多留」第17集代金含む)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞

(注)日本青少年育成協会会長賞・全日本川柳協会賞

全日本川柳誌上大会賞(予定)

投句締切 平成26年1月31日(金)(当日消印有効)

発表・表彰 第38回全日本川柳富山大会(平成26年6月)

参加方法 規定の用紙(雑詠1句)と出句用紙(課題5題10句)
に記入し、参加費2000円(振替又は小為替)とと
もに下記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

一般社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-1221

FAX (06) 6352-1243

振替口座 009701913575

編集後記

★栄光の日も一日は二十四時 蕉風

★十九回川柳塔まつりは滞りなく終えることができた。来年の七月は路郎の五十回忌、秋には川柳雑誌・川柳塔創刊九十周年。記念事業として合同句集が刊行される。緑あつて関わった川柳の足跡を刻むために、同人・誌友はもちろん、一般の川柳愛好家の皆さまのご参加をお願いしたい。

★元・青玄代表の伊丹三樹彦氏からお便りを頂いた。……『麻生路郎読本』を頂きました。実に良く出来ているのに感心しました。俳壇でも類を見ません。写真はやや薄くて惜しいですが、量的には満足です。路郎さんとは大阪駅前一度会ったきりです。神戸の柳人とは交際がありました。……

川柳はスパイス、俳句はハーブと私は心得てます。蕉風さんは優しい方でした……

★氏は俳句と写真の相乗による「写俳」運動を創設。これまでに写俳の個展は二十数回開催、写俳集は十五冊刊行。現在九十三歳。ますますのご活躍をお祈りしたい。氏の写真はインターネット上でも楽しむことが出来る。

★同人・早川遡行さんから東野大八先生の絶筆「雨の法善寺横丁」を頂いた。大八先生が船場のぼんぼんだったことは驚きであった。父上の放蕩がもとで伊予の大洲に逼塞するくだりなどは、夫婦善哉を地でゆくようではないか。

★大八先生、蕉風先生と道頓堀でてつちりをこ一緒したことがある。大八先生は紙のランチョンマットにさらさらと筆を

ひとこと

お疲れさん 30系

大阪市営地下鉄の30系が、10月に引退した。30系と言えば、昭和45年あの大阪万博にむけ導入された車両で、従来のものより乗降をスムーズにするため、扉の数を増やすなどの工夫があった。

この時期、私は駅員として天王寺駅で勤務、乗車券の販売（当時乗車券は窓口で手売り、改札はもちろん自動ではない）や、ホームの整理など、万博のにぎわいを嫌

というほど体感した。

万博会場へ行ったのは一度きりで（もちろん30系に乗って）あまりの人手に呆れ、疲れ果てて帰って来たのを覚えてる。

某新聞の30系引退記事の中に、整備に携わった職員の苦勞話が載っており、懐かしく読ませてもらった。30系の引退により地下鉄全車両がブレイキを利用して発電する省エコ車になるそうだ。

（森松まつお）

走らせた。丸顔の河豚に一句添えられていたが、絵もお達者だった。

★新年号掲載の年賀広告を募集しています。お一人でも多くのご協力をお願いします。

★十九回川柳塔まつりの模様は、日程の都合で十二月号になります。ご了承ください。

（朱）

▼災害も別れも突然やってきます。最近の列島は地震、津波、豪雨、竜巻と頻繁にあちこちで起こ

り、命の儚さをつくづく急かされて、作句している私ですので、佳句が生まれないのも当然のことでしょう。早い目に作句すればいいのですが、何故か何時もぎりぎりに事だと思ってしまう。句会での、一期一会のひと時、家族との日常の暮らしを楽しく大切にしなければと思います。

▼毎年秋は川柳大会が、目白押しで、句会日の予定表が手放せません。締切日のイエローカードにそうです。

（能）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号)」

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「書く」(11月15日締切)

1月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓
雅
号

地名

市都
道府
姓
雅
号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

個人用

年賀広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(い)希望の大きさを○で囲んでください。

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

電 話	住 所	姓・雅号
()	〒	
()		

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社

作品募集

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 川上大輪選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄「書」 (2句) 竹治ちかし共選
大内朝子選

一路集 (3句) 「仕」事「ユニーク」流「一」
安土理恵選
米澤倭子選
横山捷也選
太田昭担当

初歩教室 「一」暦「一」(3句)
「一」

2月号

檸檬抄「明暗」
一路集「磨く」「ケース」
「念入り」
初歩教室「逃げる」

第32年度 夜市川柳募集

第6回「読む」三宅保州選
ハガキに3句 11月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料84円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一三年(平成二十五年)十一月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六六七七九三三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

本社11月句会

とき 11月7日(木) 13時開場・13時40分締切
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

おはなし 「一寸した気遣い」 嶋澤喜八郎氏
兼題 「両」 居谷真理子選
「免許」 山本義子選
「すけすけ」 北野哲男選
「濡れる」 鈴木いさお選
「余地」 坊農柳弘選
小島蘭幸選

会費 1000円
投句料 500円 (切手可) (各題2句以内)

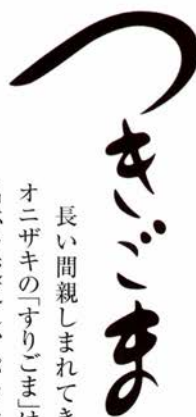
本社12月句会

5日(木) 午後1時から
兼題 「枝」「相棒」「やっと」
「気高い」「めまい」

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア(ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>